熊本県文化財調査報告第244集

中原横穴墓群

—中神総合流域防災事業（傾崩）に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2008.3

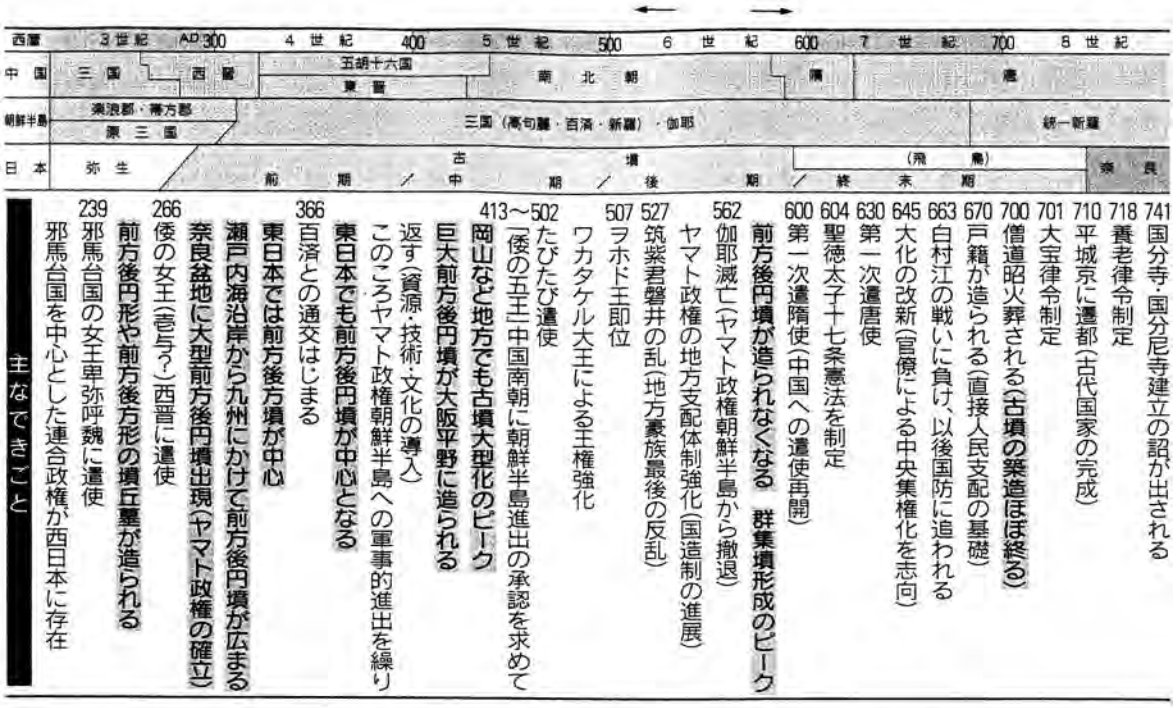
熊本県教育委員会

写真（PL）1　空撮1（遺跡上空より　球磨盆地を望む）

写真（PL）2　空撮2（遺跡全景）

発掘調査でわかった中原横穴墓群の様子

熊本県教育庁文化課



表(Tab)① 日本の古墳 僕が調べた歴史の謎(1998より引用)

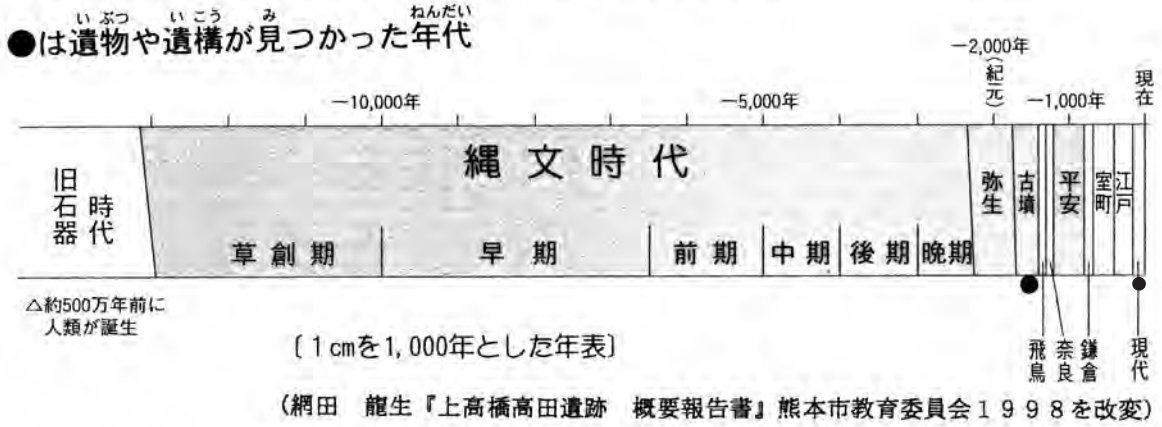
(竹田宏司 『九州の横穴墓と地下式横穴墓』2001 を一部改変)

図(Fig)① 肥後(熊本県)の横穴墓分布

【中原横穴墓群（人吉市中神町）の紹介】

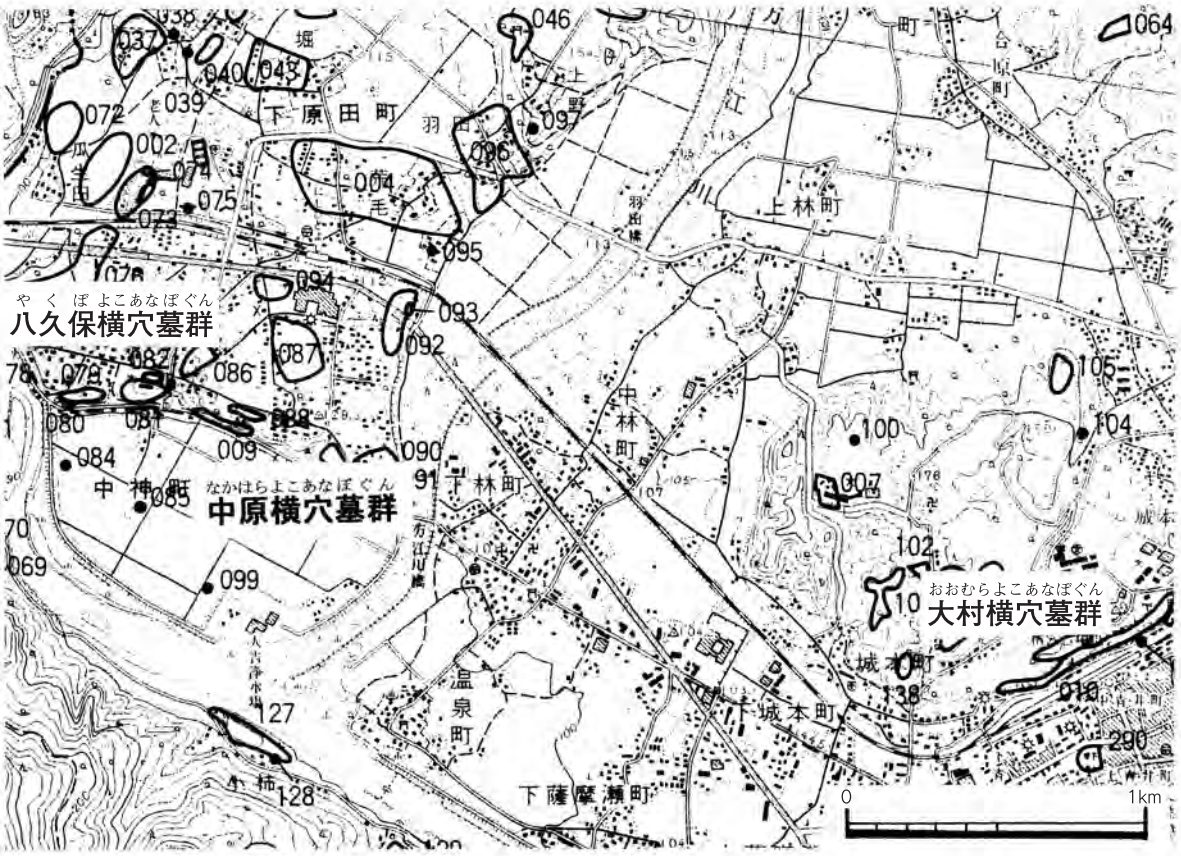
この横穴墓群は、球磨川の中流域、右岸の段丘を形成する凝灰岩の壁を掘って作られた古墳時代後期(6世紀：今から約1,500年～1,400年前)の墓群です。同様な墓群は西側に隣接して八久保横穴墓群、南東に約3km周辺に装飾文様を持つ大村横穴墓群があります。

今回、この横穴墓群に崖崩れ防止の工事が行われる事になり、コンクリートが吹き付けられたり、壊される前に遺跡の記録を残すための発掘調査を行いました。調査期間は、平成１８年８月から平成１９年１１月までの内、約３ヶ月間でした。

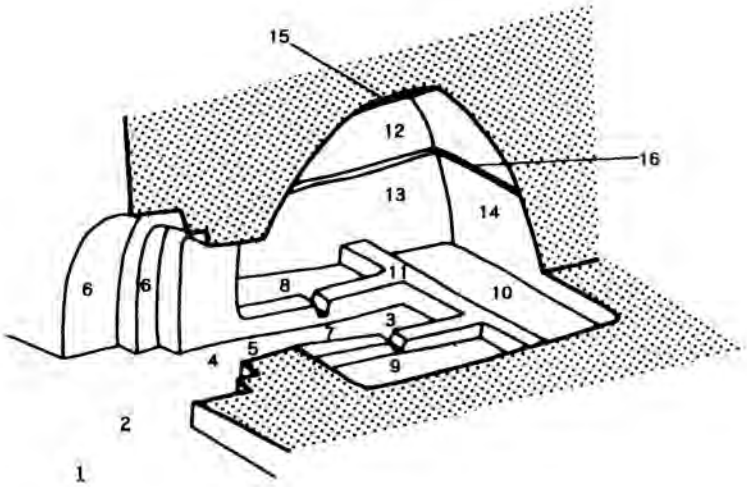


（網田　龍生『上高橋高田遺跡　概要報告書』熊本市教育委員会１９９８を改変）

表(Tab)②　遺跡年表

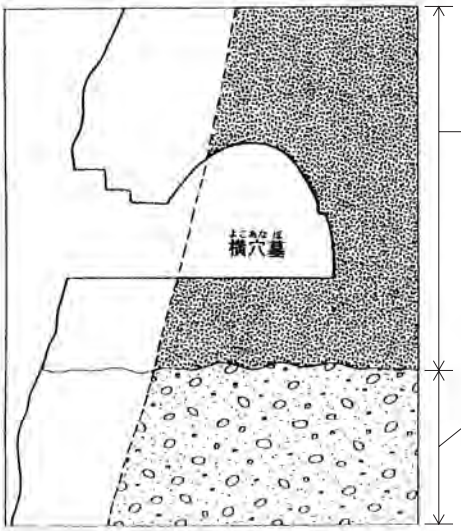


図(Fig)②　周辺遺跡地図　S=1/25,000



1. 前庭部（ぜんていぶ）　横穴墓入口（羨道前）の広場。
2. 羨道（せんどう）　横穴墓の外部から玄室に通じる道。
3. 玄室（げんしつ）　横穴墓の主体となる屍体を安置する室。複室（室が２質）の横穴墓の場合、奥室・後室・主室とよぶ事もある。
4. 羨門（せんもん）　前室や玄室の入口。
5. 玄門（げんもん）　玄室の入口。
6. 飾縁（かざりぶち）　（飾り縁）、羨門の外に造られた階段状の飾り。飾縁が２つ以上つく場合、本項では内側から第１飾縁、第２飾縁…とする。
7. 通路（つうろ）　玄室や前室の中央部を貫く道。
8. 左屍床（ひだりししょう）　左側に屍体を収める所。
9. 右屍床（みぎし しょう）　右側に屍体を収める所。
10. 奥屍床（おくし しょう）　奥に屍体を収める所。
11. 仕切（しきり）　用途を区切る境の突帯。
12. 天井部（てんじょうぶ）　天井の部分。
13. 左側壁（ひだりそくへき）　左の壁。
14. 奥壁（おくへき）　奥の壁。
15. 棟線（むねせん）　家の棟を表現した線。
16. 軒先線（のきさきせん）　家の軒先を表現した線。

（高木正文『熊本県装飾古墳総合調査報告書』1984、西住欣一郎『瀬戸口横穴墓群』1989を一部改訂）



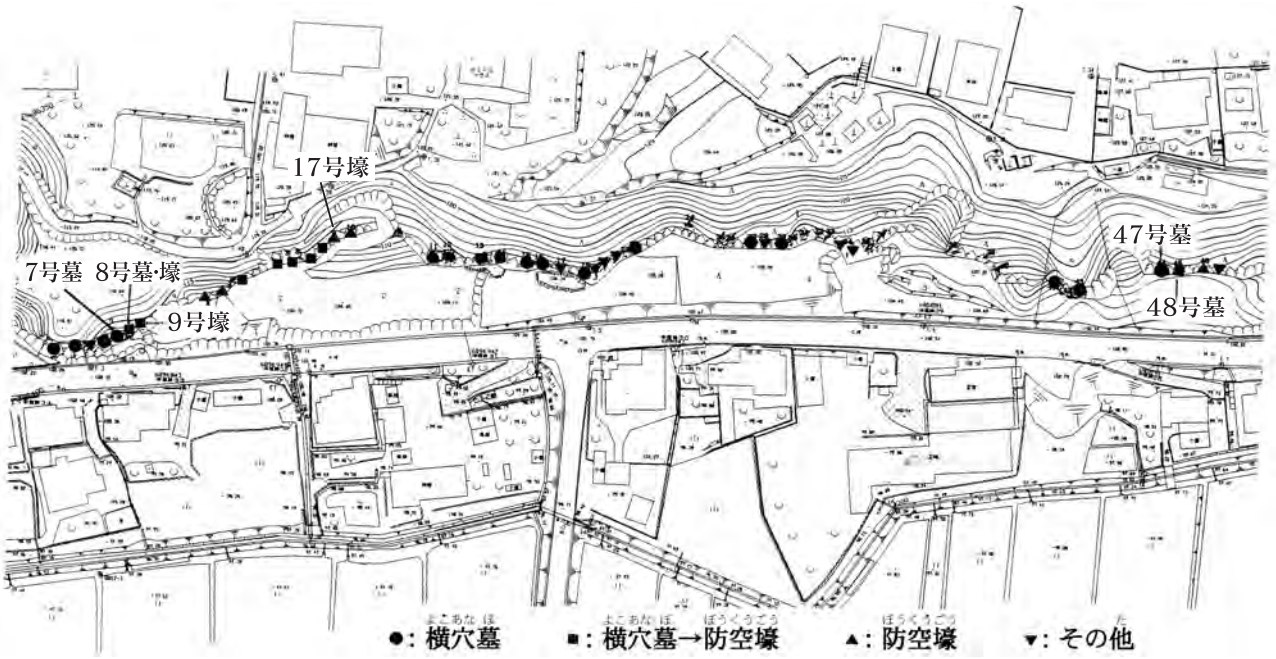
阿蘇溶結凝灰岩（あそようけつぎょうかいがん）

約（やく）９万年前（まんねんまえ）、阿蘇山（あそさん）からの噴出物（ふんしゅつぶつ）が固（かた）まった軟質（なんしつ）の凝灰岩（ぎょうかいがん）。

人吉層（ひとよしそう）

約（やく）100万年以前（まんねんいぜん）、周辺（しゅうへん）が湖（みずうみ）だった頃（ころ）にできた砂礫層（されきそう）。

図（Fig）③　横穴墓の部分名称及び地質説明図



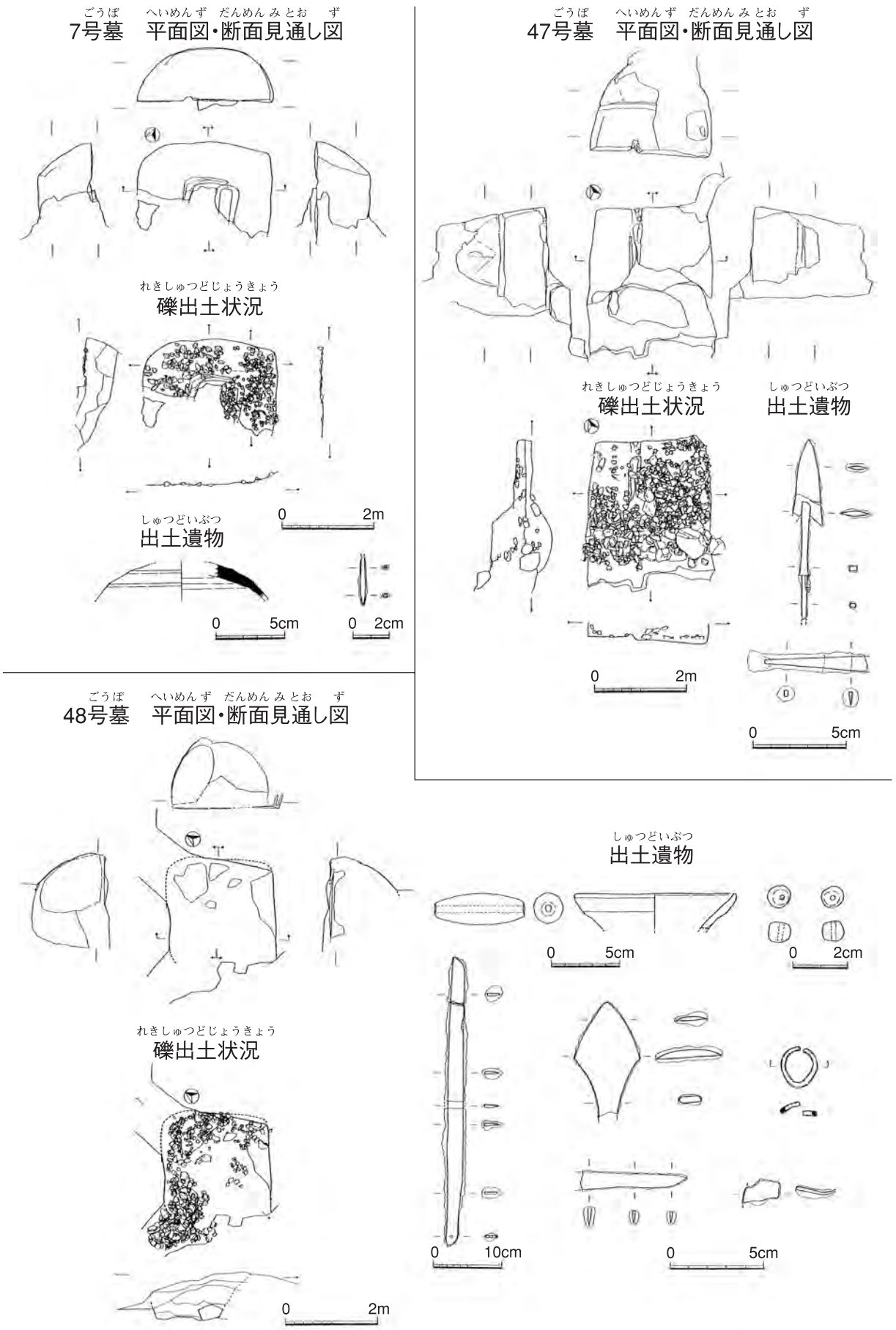
図(Fig)④　中原横穴墓群平面位置図

【発掘調査でわかったことや考えられること】

◆今回の発掘調査により、工事区内に横穴墓が27基確認されました。この数は大村横穴墓群の26基を上回り、現在のところ人吉・球磨地方では最大規模です。しかも周辺地域の分布調査により、横穴墓の数は更に増える可能性が高いと考えられます。確認された横穴墓は、脆い凝灰岩のために崩壊が激しく、全てが完全な元の状態ではありませんでしたが、7号墓、47号墓、48号墓には、当時の副葬品と考えられる鉄の鏃や刀などが出土しました。床面には拳大から両拳大の河原石が敷きつめられており、一部は当時のままの状態と考えられます。当時の住居跡は確認されていませんが、段丘上の台地もしくは球磨川流域の低地周辺にあったと推定されます。

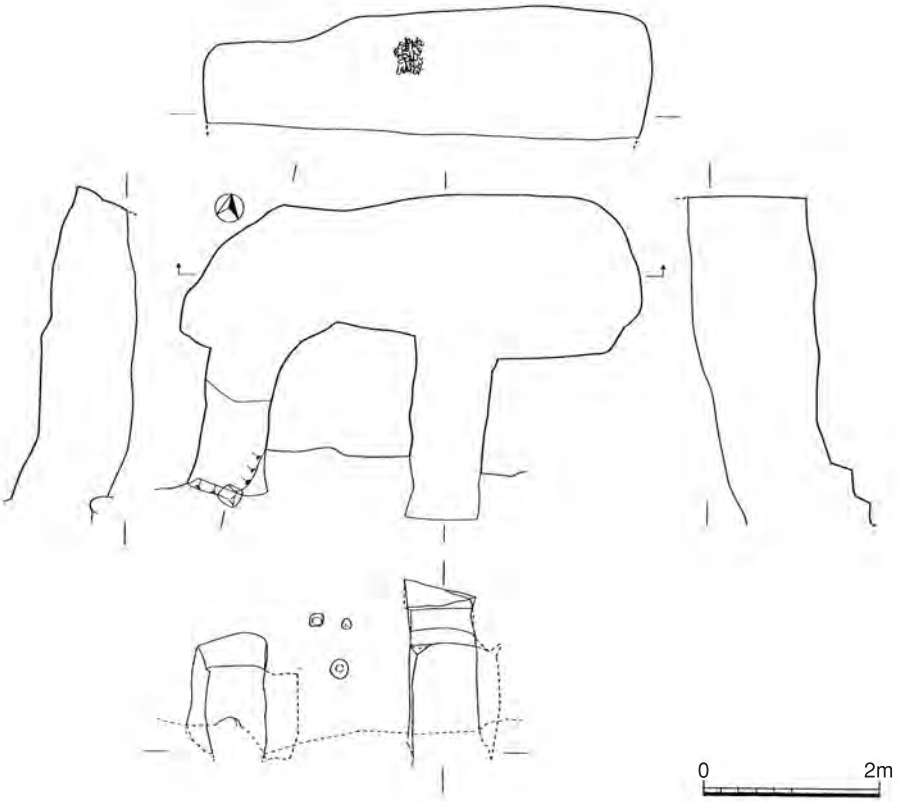
◆47号墓の壁には三角形の文様を連続的に彫り込んだ装飾文様が確認されました。この文様は大村横穴墓群のものとは違う装飾ですが、菊池川流域などによく似た文様を持つ横穴墓が見られます。

◆第二次世界大戦中に使用された防空壕（掘りかけや通路部分も含めて）が12基確認されました。その中には横穴墓を防空壕に作り変えたものが8基ありました。

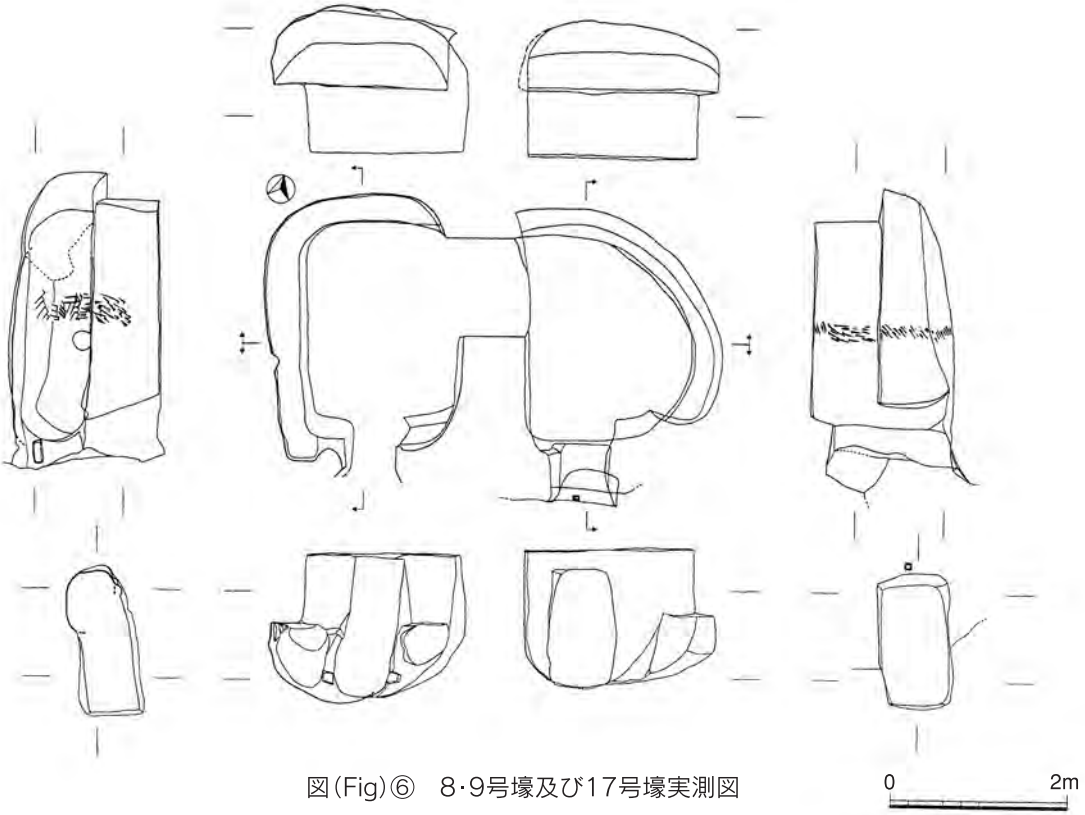


図(Fig)⑤　7・47・48号墓実測図及び出土遺物

17号墳　平面図・断面見通し図



8・9号墳　平面図・断面見通し図

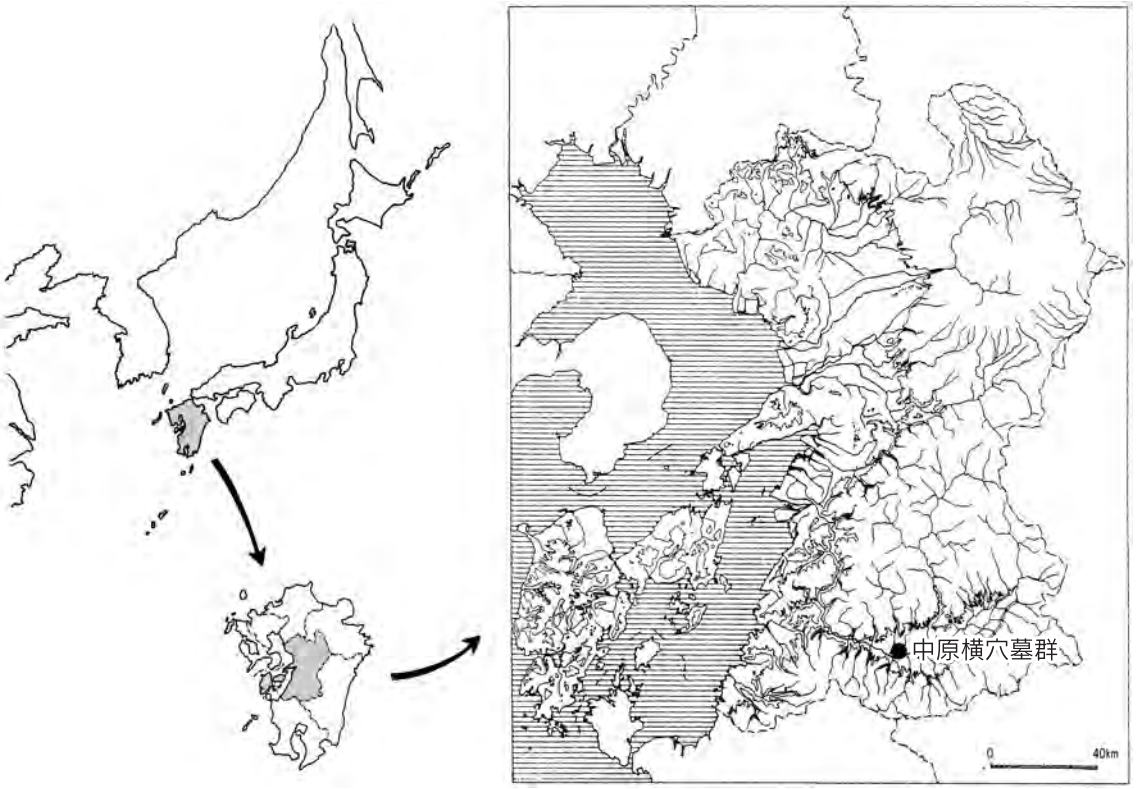


図(Fig)⑥　8・9号墳及び17号墳実測図

熊本県文化財調査報告　第244集

中原横穴墓群

なかはらよこあなぼぐん



２００８

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、平成18年8月から平成19年11月までの約3ヶ月、中神総合流域防災事業(傾崩)に伴う埋蔵文化財発掘調査として人吉市中神町に所在する中原横穴墓群の発掘調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代後期～終末期の横穴墓が27基、第二次世界大戦中の防空壕が12基確認されました。

人吉・球磨地域の横穴墓群の中では、人吉市に所在する大村横穴墓群を抜き、最大数を誇ることが確認されました。今回の発掘調査は、事業の範囲内に限定されることから、事業範囲外も含めると横穴墓の数は更に増加することは間違いありません。

今回まとめました報告書が県民の皆様を始め多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解を深めて頂く一助となれば、喜びに堪えません。

なお、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成20年３月31日

熊本県教育長　　柿　塚　純　男

例　　言

1．本書は、平成18年（2006）８月１日～平成19年（2007）11月22日にかけて実施した人吉市中神町に所在する中原横穴墓群の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告第244集である。
2．調査は、平成18年～19年度中神総合流域防災事業（傾崩）に伴い実施した。
3．調査は、熊本県土木部の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財資料室で行った。
4．整理報告は平成19年度（2007）に行った。
5．国土座標軸による測量基準杭の設定は、（株）九州文化財研究所に委託した。
6．本書で使用した航空写真は、九州航空株式会社に委託撮影したものである。
7．現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、岡本真也、波多野芳郎が行った。遺物実測は、野田愛、宮崎典子、府内博子、波多野、岡本が行った。遺構製図、遺物製図及び図版の作成は、野田、宮崎、府内が行った。鉄器処理は、谷川亜紀子、今田里枝、大塚トシ子、平川早苗が行った。遺物写真撮影は、村田百合子、手嶋裕子が行った。
8．英文要約は、岡本が作成し、村田がこれを訂正した。
9．本文の執筆は、第Ⅴ章を（株）パリノ・サーヴェイ、附論を馬場正弘（熊本県教育庁文化課）に委託し、それ以外を岡本が行った。
10．本書の編集は、岡本があたり、校正等に際しては野田、宮崎、府内がこれを補助した。
11．遺物は、熊本県文化財資料室に保管している。

凡　　例

1．図版中の断面は実線、最大長を破線で表した。
2．天井部への稜線及び軒先線を赤色の一点鎖線で表した。
3．横穴と防空壕が混在するため、それぞれを説明する所にトーンを貼っている。
4．番号がないものは、調査の段階で確認できなかったために欠番とした。
5．報告書に掲載した遺構実測図はS=1/60、遺物実測図に関しては不統一であるため、各々の頁に明記した。
6．出土遺物の観察表は、掲載分については全て巻末の遺物観察表に掲載している。
7．写真図版のキャプションにある矢印は撮影方向を示す。
8．本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。

本　文　目　次

巻頭カラー写真
発掘調査でわかった中原横穴墓群の様子
序文
例言・凡例・本文目次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1～ 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の過程 …… 1～ 3
第Ⅱ章　位置と環境 …… 3～ 8
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3～ 8
第Ⅲ章　調査の概要 …… 8～11
　第１節　はじめに …… 8
　第２節　調査の方法 ……11
第Ⅳ章　調査の結果 ……11～44
　第１節　はじめに ……11～13
　第２節　遺跡の立地と分布及び横穴墓の部分名称 ……13
　第３節　検出遺構と出土遺物 ……13～44
　（１）横穴墓 ……13～34
　（２）防空壕 ……34～41
　（３）その他 ……41～44
　（４）調査区内での表採遺物 ……44
第Ⅴ章　諸分析 ……45～50
　１．中原横穴墓群の年代に関わる自然科学分析（放射性炭素年代測定） ……45～47
　２．中原横穴墓群の基盤の溶結凝灰岩について（屈折率測定） ……48～50
【株式会社 パリノ・サーヴェイ】
第Ⅵ章　総括 ……51～59
　第１節　はじめに ……51
　第２節　横穴墓の立地と分布 ……51
　第３節　横穴墓の構造と変遷 ……51～55
　第４節　横穴墓の装飾 ……55
　第５節　横穴墓からの出土遺物 ……55
　第６節　防空壕 ……55
　第７節　おわりに ……55～59
遺物観察表 ……60～61
引用・参考文献 ……62
Summary ……63
―附論―
　中原横穴墓群周辺地域の地質について　【熊本県教育庁文化課　馬場正弘】 ……64～68
写真図版 ……69～92
あとがき ……93
報告書抄録 ……94

挿　図　目　次

図(Fig)①　肥後（熊本県）の横穴墓分布 ……巻頭
図(Fig)②　周辺遺跡地図（S=1/25000） ……巻頭
図(Fig)③　横穴墓の部分名称及び地質説明図 ……巻頭
図(Fig)④　中原横穴墓群 平面位置図 ……巻頭
図(Fig)⑤　７・47・48号墓実測図及び出土遺物 ……巻頭
図(Fig)⑥　８・９号壕及び17号壕実測図 ……巻頭

図(Fig) 1　中原横穴墓群周辺遺跡地図 S=1/25000 …… 5
図(Fig) 2　中原横穴墓群遺構配置図 S=1/800 …… 9・10
図(Fig) 3　横穴墓の部分名称図 ……12
図(Fig) 4　１・２・６号横穴墓実測図 ……14
図(Fig) 5　７号横穴墓実測図、礫出土状況図及び出土遺物実測図 ……15
図(Fig) 6　21・22号横穴墓実測図 ……18
図(Fig) 7　25・26・27号横穴墓実測図 ……19
図(Fig) 8　29・33・38号横穴墓実測図 ……20
図(Fig) 9　40・41号横穴墓実測図及び礫出土状況図 ……21
図(Fig)10　45・46号横穴墓実測図 ……22
図(Fig)11　47号横穴墓実測図及び出土遺物状況図 ……24
図(Fig)12　47号横穴墓出土遺物実測図 ……25
図(Fig)13　51・52号横穴墓実測図 ……26
図(Fig)14　８号横穴墓実測図 ……27
図(Fig)15　13・14号横穴墓実測図 ……28
図(Fig)16　15・16号横穴墓実測図 ……29
図(Fig)17　10・12号横穴墓実測図 ……30
図(Fig)18　48号横穴墓実測図及び出土遺物状況図 ……31
図(Fig)19　48号横穴墓出土遺物実測図 ……32
図(Fig)20　８・９号防空壕実測図 ……36
図(Fig)21　10・11号防空壕実測図 ……37
図(Fig)22　17・19号防空壕実測図 ……38
図(Fig)23　48・49号防空壕実測図 ……39
図(Fig)24　13・14号防空壕実測図 ……40
図(Fig)25　15・16号防空壕実測図 ……42
図(Fig)26　50号不明掘削実測図 ……43
図(Fig)27　熊本県横穴墓位置図 ……54
図(Fig)28　平面形による大分類図 ……54
図(Fig)29　横穴墓位置図:A期 ……56
図(Fig)30　横穴墓位置図:B期 ……56
図(Fig)31　横穴墓位置図:C期 ……57
図(Fig)32　九州の横穴墓と地下式横穴墓の分布 ……58
図(Fig)33　地下式板石積石室墓分布図 ……59

表　目　次

表(Tab)①　日本の古墳　僕が調べた歴史の謎　（1998より引用）　……巻頭
表(Tab)②　遺跡年表　（網田　1998を改変）　……巻頭

表(Tab) 1　中原横穴墓群周辺遺跡一覧表 1　…… 6
表(Tab) 2　中原横穴墓群周辺遺跡一覧表 2　…… 7
表(Tab) 3　横穴墓と防空壕等の番号　……12
表(Tab) 4　中原横穴墓群の横穴墓一覧表 1　……52
表(Tab) 5　中原横穴墓群の横穴墓一覧表 2　……53
表(Tab) 6　中原横穴墓群の防空壕一覧表　……59
表(Tab) 7　７号墓出土遺物観察表　……60
表(Tab) 8　47号墓出土遺物観察表　……60
表(Tab) 9　48号墓出土遺物観察表　……61

写　真　図　版

写真(PL) 1　空撮１（遺跡上空より球磨盆地を望む）……巻頭
写真(PL) 2　空撮２（遺跡全景）……巻頭
写真(PL) 3　調査区遠景（南より）……69
写真(PL) 4　調査区遠景（東より）……69
写真(PL) 5　調査区近景（東より）……69
写真(PL) 6　調査区近景（西より）……69
写真(PL) 7　33号墓周辺状況（西より）……69
写真(PL) 8　33号墓周辺状況（東より）……69
写真(PL) 9　１号墓全景　……70
写真(PL)10　２号墓全景　……70
写真(PL)11　６号墓全景（南より）……70
写真(PL)12　７号墓礫出土状況　……70
写真(PL)13　７号墓調査前状況　……70
写真(PL)14　７号墓完掘状況　……70
写真(PL)15　６号墓全景(南西より）……71
写真(PL)16　７号墓、８・９号墓・壕出入口　……71
写真(PL)17　８・９号墓・壕　……71
写真(PL)18　８号墓･壕の玄門、出入口を覗く　……71
写真(PL)19　８号墓・壕側から９号壕を覗く　……71
写真(PL)20　８号墓・壕内部　……71
写真(PL)21　８・９号墓・壕天井部　……72
写真(PL)22　８・９号墓・壕の連結部　……72
写真(PL)23　９号壕右側壁（１）……72
写真(PL)24　９号壕右側壁（２）……72
写真(PL)25　９号壕天井部　……72
写真(PL)26　９号壕内部より出入口を覗く　……72
写真(PL)27　10・11・12号墓・壕全景　……73
写真(PL)28　10号墓・壕の出入口部　……73
写真(PL)29　10号墓内部より出入口部を覗く　……73
写真(PL)30　10号壕内部の棚　……73
写真(PL)31　12号墓全景　……73
写真(PL)32　11号壕出入口　……73
写真(PL)33　13・14号墓・壕出入口　……74
写真(PL)34　13号墓・壕内部（１）……74
写真(PL)35　13号墓・壕内部（２）……74
写真(PL)36　13号墓・壕側より14号墓・壕に繋がる通路　……74
写真(PL)37　14号墓・壕内部（１）……74
写真(PL)38　14号墓・壕内部（２）……74
写真(PL)39　14号墓・壕天井部　……75
写真(PL)40　14号墓・壕側より13号墓・壕に繋がる通路　……75
写真(PL)41　15号墓・壕出入口部　……75
写真(PL)42　15号墓・壕内部（１）……75
写真(PL)43　15号墓・壕内部（２）……75
写真(PL)44　15号墓・壕天井部　……75
写真(PL)45　15号墓・壕内部（３）……76
写真(PL)46　15号墓・壕側より16号墓・壕に繋がる通路　……76

写真(PL)47　15号墓・壕内部（４）……76
写真(PL)48　16号墓・壕出入口部　……76
写真(PL)49　16号墓・壕内部　……76
写真(PL)50　16号墓・壕側より15号墓・壕に繋がる通路　……76
写真(PL)51　17号壕出入口部（１）……77
写真(PL)52　17号壕出入口部（２）……77
写真(PL)53　17号壕内部状況（１）……77
写真(PL)54　17号壕内部状況（２）……77
写真(PL)55　17号壕内部状況（３）……77
写真(PL)56　17号壕内部と出入口部周辺　……77
写真(PL)57　15号墓・壕周辺より西側を望む　……78
写真(PL)58　16号墓・壕全景と弾痕跡？　……78
写真(PL)59　17・18号壕出入口周辺　……78
写真(PL)60　19号壕出入口周辺　……78
写真(PL)61　19号壕内部状況　……78
写真(PL)62　21・22号墓全景　……78
写真(PL)63　21号墓全景　……79
写真(PL)64　22号墓全景　……79
写真(PL)65　23・24号墓全景　……79
写真(PL)66　23号墓全景（１）……79
写真(PL)67　23号墓全景（２）……79
写真(PL)68　24号墓内部状況（１）……79
写真(PL)69　24号墓内部状況（２）……80
写真(PL)70　25・26号墓全景　……80
写真(PL)71　25号墓近景　……80
写真(PL)72　26号墓全景　……80
写真(PL)73　29号墓遠景　……80
写真(PL)74　29号墓近景　……80
写真(PL)75　33号墓遠景　……81
写真(PL)76　33号墓近景　……81
写真(PL)77　39・40号墓を望む　……81
写真(PL)78　38号墓全景　……81
写真(PL)79　40号墓全景　……81
写真(PL)80　41号墓（左）遠景　……81
写真(PL)81　41号墓近景　……82
写真(PL)82　45号墓全景　……82
写真(PL)83　46号墓全景（西より）……82
写真(PL)84　46号墓調査前状況　……82
写真(PL)85　46号墓完掘状況（１）……82
写真(PL)86　46号墓完掘状況（２）……82
写真(PL)87　47号墓調査前状況　……83
写真(PL) 88　47号墓礫出土状況　……83
写真(PL) 89　47号墓遺物出土状況　……83
写真(PL) 90　47号墓完掘状況　……83
写真(PL) 91　47号墓開口部付近　……83
写真(PL) 92　47号墓線刻確認状況　……83
写真(PL) 93　48号墓調査前状況　……84
写真(PL) 94　48号壕碑文　……84
写真(PL) 95　48号壕内部より出入口部を望む　…84
写真(PL) 96　48号壕内部状況　……84
写真(PL) 97　48号墓礫・遺物出土状況（遠景）…84
写真(PL) 98　48号墓礫・遺物出土状況（近景）…84
写真(PL) 99　48号墓完掘状況　……85
写真(PL)100　49号壕全景　……85
写真(PL)101　49号壕内部　……85
写真(PL)102　49号壕内部より出入口部を望む　…85
写真(PL)103　49・50号壕遠景　……85
写真(PL)104　50号調査前状況　……85
写真(PL)105　50号完掘状況　……86
写真(PL)106　51号墓全景（１）……86
写真(PL)107　51号墓全景（２）……86
写真(PL)108　51号墓右側壁　……86
写真(PL)109　52号墓全景　……86
写真(PL)110　52号墓近景　……86
写真(PL)111　52号墓周辺状況　……87
写真(PL)112　14号墓・壕と中間靖さん　……87
写真(PL)113　14号墓の掘削痕跡の拓本　……87
写真(PL)114　15号墓の掘削痕跡の拓本　……87
写真(PL)115　戦争時、49号壕に入られた中矢野コナミさん　……87
写真(PL)116　29号墓の掘削痕跡の拓本　……87
写真(PL)117　作業員さん方との集合写真　……88
写真(PL)118　調査区伐採後の状況（１）……88
写真(PL)119　調査区伐採後の状況（２）……88
写真(PL)120　調査区伐採後の状況（３）……88
写真(PL)121　調査区伐採後の状況（４）……88
写真(PL)122　調査区伐採後の状況（５）……88
写真(PL)123　７号墓出土遺物　……89
写真(PL)124　48号墓出土遺物　……89
写真(PL)125　47号墓出土遺物（１）……90
写真(PL)126　47号墓出土遺物（２）……90
写真(PL)127　調査区周辺の表採遺物（写真のみ）91
写真(PL)128　出土遺物のX線写真　……92

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

本遺跡の調査は、熊本県球磨地域振興局土木部の中神総合流域防災事業（傾崩）に伴う事前の記録保存を目的とした発掘調査である。

事業の実施に先立ち予備調査を行い、予定地内が中原横穴墓群の中に含まれ、多数の横穴墓の存在が確認された。その後、埋蔵文化財の発掘調査が必要な範囲を確認し、熊本県土木部と協議を重ねた上で、調査を行う運びとなった。

第２節　調査の組織

予備調査は平成17年度、発掘調査は平成18･19年度、報告書作成及び印刷は平成19年度に行った。

【平成17年度（2005）予備調査及び実測】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　倉岡　博（課長補佐）
調査総括　西住欣一郎（文化財調査第二係長）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　四元正明（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参　事）
　　小谷仁志（主　事）
調査担当　廣田静学（参　事）
　　木村龍生（学芸員）

【平成18年度（2006）本調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　江本　直（課長補佐）
調査総括　西住欣一郎（文化財調査第二係長）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参　事）
　　小谷仁志（主任主事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　　波多野芳郎（非常勤職員）

【平成19年度（2007）報告書作成】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　江本　直（課長補佐）
調査総括　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
調査事務局　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
　　高宮優美（主幹兼総務係長）
　　塚原健一（参　事）
　　高松克行（主任主事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　　野田　愛（非常勤職員）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

甲元眞之（熊本大学文学部教授）、鶴嶋俊彦・和田好史・村上晃勇・山本研央（人吉市教育委員会）、比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）、増田直人・西嶋剛広（植木町教育委員会）、池田朋生（熊本県立装飾古墳館）、江本直・野田拓治・高木正文・西住欣一郎・木村元浩・廣田静学・馬場正弘・木村龍生・福田匡朗・沖謙介（熊本県教育庁文化課）、西健一郎（元九州大学文学部助手）、大柿友一、白川栄一郎、中間靖、中矢野コナミ（敬称略）

第３節　調査の過程

本調査は平成17（2005）年8月1日（月）から平成17（2005）年10月19日（木）までと平成19（2007）年3月5日（月）から平成19（2007）年11月22日（金）までの期間行った。

以下に各月を前半と後半に分けて、調査日誌の中から特筆すべき事項や内容を簡単に述べたい。

【８月】

（前半）

7日。機材を資料室から現場プレハブ及び倉庫に搬入。調査区内の草刈りや雑木等の伐採作業を行う。

8～10日、調査区内の草刈りや雑木等の伐採作業を行う。

9日、猛暑日。熊本市で観測史上初の37.7度、人吉市も35.8度であった。

（後半）

21日、37～38号、43～45号周辺は崖崩れが進んで土砂の堆積が著しい。埋もれている横穴墓が存在する可能性が高い。しかし今回の工事では崖の剥き出し部分にのみ吹付け作業が行われる関係上、土砂を除去することはしない。

作業員さんが、マムシの子1匹を捕獲され、持っ

て帰られる。また、調査前に42号に焼酎を供えられていた。この崇高な精神が良い調査につながるものと感動する。

22日、作業員さんが、前日に続きマムシ1匹を捕獲された。

24日～、本日より本格的に石室内の発掘に入る。46号と47号の掘り下げを行う。しかしながら、46号の床面はほとんど残存していないことが判明。47号では約40cm四方のグリッドを設定して掘り下げを行ったところ、4点の鉄鏃が出土した。掘削した土もふるいにかける。崖の崩落が心配されるため、作業はヘルメットを着用し、横穴墓の入り口にはローリングタワーを立てて安全策をとりながら作業を進める。

第二次世界大戦中、48・49号防空壕に入られた方がご存命であることが判明。

29日～、41と42号の掘り下げも開始。こちらはほとんどが後世の撹乱である可能性が高まる。

【９月】

（前半）

１日～５日、47号は礫が敷き詰められた状況が確認された。礫は、人吉層もしくは球磨川で採取可能な拳大から両拳大の大きさの円礫や亜角礫が主体である。崩落部は後世に敷き詰められたものと考えられる。掘削土をふるう作業も並行して行う。

６日～13日、41号は横穴のプランがかろうじて残存しているが、42号は全て撹乱を受けていることが判明。47号墓掘削土をふるった土から刀子や不明鉄製品が出土。

50号の掘削を開始。上部は防空壕の掘りかけと考えられるが、下部はそれ以前の大きな掘り込みがあったことを確認。しかしその理由は不明。

42号と50号から径1.5cm程度の鉛玉が１個ずつ出土。また、42号からは一勝地焼きで半磁器の椀の口縁部片と考えられる資料が出土。いずれも後世の撹乱土中からの出土である。

14日～15日、46号墓の完掘。奥壁に神棚と考えられる堀込みを２ヵ所確認。45号は天井部が一部残存している状況を確認。右側の撹乱土から明治時代以降に焼かれた肥前系の瑠璃釉御神徳利1点が完形で出土。

（後半）

19日、馬場正弘氏の調査指導を受ける。本遺跡の基盤層は、約100万年以前の人吉層の上に約９万年前の阿蘇４溶結凝灰岩が堆積しており、横穴墓は阿蘇４溶結凝灰岩に掘り込まれていることが判明。なお、人吉層と凝灰岩の間は不整合面であった。

６、７号墓の調査を開始する。

20日、７号墓も47号墓と同様に拳大から両拳大の大きさの円礫が敷き詰められた状況を確認。

21日、掘削土をふるった土から10点の鉄器が出土。47号墓からは、刀子や鉄鏃など９点、48号墓からは１点の鉄片が確認された。

26日、48号墓の掘削において､礫直上から刀子の先端部１点と耳環1点が出土。分析用カーボンの採取も行う。横穴墓のプランが約１/２残存していることも判明する。残りの調査は上部の崖面の吹付けが終了し、安全が確保された来年３月に行うことを協議する。

28日、木村龍生、沖両氏が来跡。50号完掘。

29日、植木町教育委員会、増田氏来跡。

【10月】

（前半）

２日～、47号墓の敷き詰められた角礫～亜角礫の凝灰岩は後世のものと考えられると判断する。

４日、７号墓より須恵器片1点、土師器片１点及び鉄片が１点が出土。須恵器は、杯の蓋の一部と推定されるが、土師器は、小片のため器種や部位も不明。鉄片は、鉄鏃の茎部の可能性が高い。38号墓、40号墓、41号墓完掘。

12日、作業員さんの現場最終日。掘削などは全て終了。高木補佐、西住係長、廣田参事、木村参事が来跡。高木補佐指導の下、47号墓に線刻による装飾文様（連続三角文）の存在を最終確認。

（後半）

17日、７号墓の完掘状況、15号墓と16号墓の上にある無数の穴（西南戦争時の弾跡？）などを撮影。防空壕について中間靖氏や中矢野コナミ氏に聞き取り調査を行う。

18日、横穴墓や防空壕に残る掘削痕跡の拓本をとる。

19日、47号墓の装飾文様の撮影を行う。残る作

業は48号墓の安全対策後の発掘調査。３月になる予定。以後の実測作業は九州文化財研究所の野村氏や尾ノ上氏等に依頼する。

【11月】

23日、教育の日に因んで、現場説明会を実施。中原小学校の玄関で発掘調査の概要説明を行い、出土遺物を展示して、希望者に現地を見てもらう。雨の日にもかかわらず51名の参加者を得る。

【平成19年３月】

５日～８日、48号の残りを調査。鉄製の大刀１振り、土錘１点、土師器の甕の口縁部１点、土玉３点が出土。人吉市教育委員会の鶴嶋氏、和田氏、村上氏、山本氏、植木町教育委員会の西嶋氏が来跡。

【７月】

30日、熊本大学文学部の甲元教授に47号墓の装飾文様についての調査指導を受ける。

【11月】

８、15日～22日、１号墓及び２号墓の崖面の崩落防止安全対策が完了したことを受けて、写真撮影及び九州文化財研究所による実測作業を行う。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

九州は、地形的に大きく四つに区分される。すなわち福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半と長崎県南半の中部火山地域、宮崎県・熊本県南半の中部山地、そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の四地域である。その中で中部山地は、一般に九州山地とも呼ばれ、祖母・国見・市房などの1,700ｍ級の山々が連なる高山地帯である。中原横穴墓群が所在する人吉盆地は、この九州山地に大きく口を開けた、標高約100ｍ～200ｍを測る断層盆地である。

盆地の中央部には、東西に流れる球磨川があり、その流れは日本三大急流に数えられる。

そして、この球磨川は、人吉盆地を抜けると、急激に流れを北方に変え中部山地の谷間を蛇行しながら、八代海へと注ぎ込んでいる。その間の支流は、80本を数え、流域面積は、1,880k㎡に及び、熊本県総面積の25％を占めている。こうした県下最大の規模を持つ球磨川は、さらに、人吉盆地とその周辺での地形展開の中心をなしている。すなわち、球磨川を中心としての沖積地→台地・丘陵地→山地という一連の展開である。こうした地形の展開ではあるが、人吉盆地での地形上の中心をなすものは、台地・丘陵地で、沖積地の広がりは、球磨川とその支流の流路に沿ってみられる。

球磨川南岸の台地・丘陵地の中心は、白髪岳山地の麓に形成された複合扇状地である。この扇状地には、その中央部（扇央部）で、水流が潜流化するという性質があり、遺跡の分布はこうした地形の性質によっても左右されて、主に、扇頂・扇端部を中心にみられる。こうした地域の他に、人吉市周辺には、姶良火山起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵地が分布している。一方、球磨川北岸には、川辺川によって形成された盆地中央部に広がる広大な扇状地と、それ以外の地域の阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流（シラス）を基盤とする丘陵地がある。このように、球磨川の両岸の台地・丘陵地には、基本的に生成の違いがあることがわかる。(1)

中原横穴墓群が所在する場所は、球磨川の右岸の台地の崖部にあたる。この台地の基盤は、約100万年以上も前に形成された人吉湖の堆積物（砂礫層）の上に約９万年前の阿蘇４溶結凝灰岩が更に堆積して成り立っており（但し、人吉湖の堆積物と阿蘇４溶結凝灰岩の間には不整合面が観察される）、横穴墓群は、阿蘇４溶結凝灰岩を掘り込む形で形成されている。(2)

第２節　歴史的環境

ここでは図１中原横穴墓群が所在する人吉盆地を中心に各時代の歴史的環境を概観してみたい。

【旧石器時代】（～約13,000年前）

現在、熊本県下には300を越える旧石器時代の遺跡が確認されている。河川流域に集中しており、その中でも白川を中心とする阿蘇外輪山一帯や球磨川上流域を中心とする球磨盆地一帯などが特に集中した地域である。

現在、人吉・球磨地方には約30遺跡が確認され

ている。その所属時期は、ナイフ形石器文化に属するものが多数を占めるが、そのほとんどが表面採集によって確認された遺跡である。しかし、近年、発掘調査による遺跡も増加している。その中で姶良丹沢火山灰（AT）降灰以前の遺跡として、大野遺跡群、血ヶ峯遺跡、狸谷遺跡（以上人吉市）、久保遺跡（球磨村）、潮山遺跡、クノ原遺跡（以上湯前町）があげられる。特に大野遺跡群Ｄ遺跡Ⅷa、Ⅷb層の出土資料の一部は、九州南東部の石器群変遷の中で最も古い位置づけがなされている。(3)

【縄文時代】（約13,000年前～2,300年前）

人吉・球磨地方の縄文時代は、各時代にわたる遺跡が存在している。

草創期の遺跡は白鳥平Ａ遺跡（人吉市）、里ン城遺跡（多良木町）があり、白鳥平Ａ遺跡では爪形文土器と石鏃や細石刃などが共伴している。

早期の遺跡は、数多く存在する。狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、大村遺跡、石清水遺跡、射場ノ本遺跡（以上人吉市）、野原遺跡（相良村）、頭地松本Ａ遺跡、頭地田口Ａ遺跡、頭地田口Ｂ遺跡、頭地Ｃ遺跡、大平遺跡、野々脇遺跡（以上五木村）などがある。

頭地田口Ａ遺跡は、川辺川を見下ろす（比高差約80～70ｍ）緩やかな傾斜地の丘陵の先端部（標高約320～310ｍ）に位置し、早期全般期の土器が出土している。早期前葉では岩本式・前平式・中原式土器、中葉の押型文（早水台式・下管生Ｂ式・沈目式）・中原式土器、後葉の手向山式・平栫式・塞ノ神式土器などである。また、狸谷遺跡では、８軒の竪穴住居跡が検出されている。

前期・中期では、曽畑式土器や船元式土器を出土した鼓ヶ峰遺跡（人吉市）、並木式土器が出土した射場ノ本遺跡などがある。

後期から晩期では、矢黒前遺跡、アンモン山遺跡、天道ヶ尾遺跡、七地遺跡、中堂遺跡（以上人吉市）などがあり、遺跡の立地として台地や丘陵上に営まれる場合と低位河岸段丘上の低地に営まれる場合がある。中でも中堂遺跡は、低地に立地しており、30軒の竪穴住居跡が検出されている。

【弥生時代】（約2,300年前～1,700年前）

人吉・球磨地方の弥生時代は、後期に特徴が見られ、独特な文様を持つ免田式土器が多く出土している。その例として本目遺跡、市房隠遺跡（あさぎり町）、夏女遺跡（錦町）などがある。

【古墳時代】（約1,700年前～1,400年前）

古墳時代の中心舞台は、人吉盆地の中央部にあった。そのことは、前方後円墳である亀塚古墳群（錦町）、大型の円墳がみられる四塚古墳群、才園四塚古墳群、鬼ノ釜古墳（以上あさぎり町）のような有力古墳が、この一帯に広がっていることからも窺われる。(1)

一方、盆地の周辺部には、小型石室を持つ小円墳群や横穴群が点在する。その中で特殊な例として、装飾文様をもつ大村横穴墓群（人吉市）、京ヶ峯横穴墓群（錦町）、小原横穴墓群（相良村）が挙げられる。大村横穴墓群は、村山遺跡が立地する台地の裾部にある阿蘇４溶結凝灰岩の崖面に築造されている。

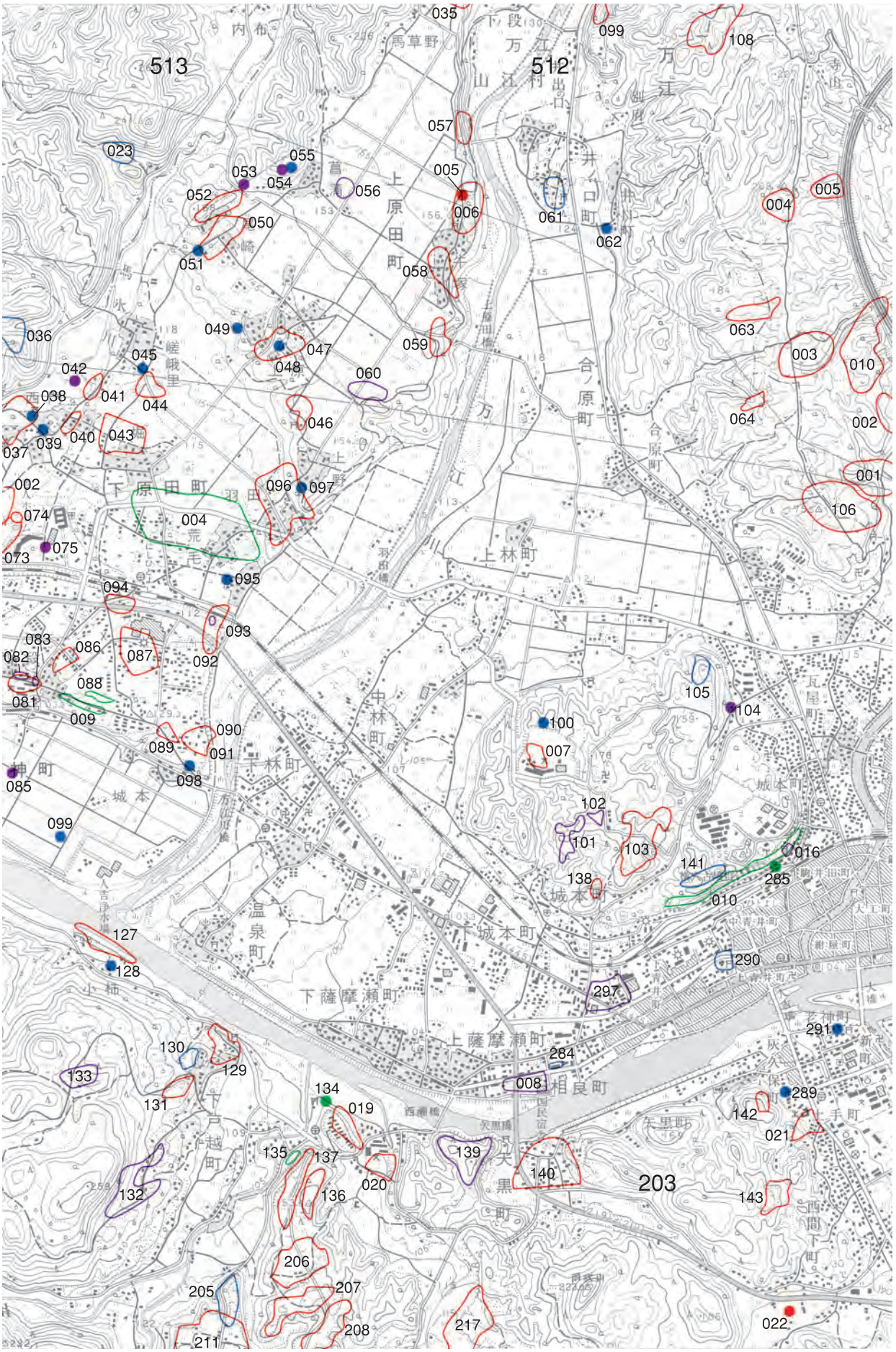
大村横穴墓群では、幅約550ｍの所で26基の横穴墓が確認されている。第４.５.７.11.13.14.15ｂ号横穴墓には、浮き彫り・線刻や彩色による装飾が見られる。装飾文様は、盾・靫・剣・刀子・弓・三角文・円文・馬などである。これらの装飾が施されるのは、15ｂ号横穴墓以外はすべて横穴墓の外壁である。このような横穴墓の外壁に装飾を持つ横穴墓は、県北の菊池川流域に多く分布しており、その関連性が注目される。今回発見された中原横穴墓群47号墓は、大村横穴墓群の15ｂ号墓と同様に横穴墓の内壁に装飾が施されている。(4)

また、特殊な事例として、南九州に分布の中心を持つ地下式板石積石室墓の北限地として荒毛遺跡（人吉市）などが挙げられる。(5)

【歴史時代】（約1,400年前～　）

古代の球磨郡は、『古事記』『日本書紀』の中で、熊襲征伐の「熊縣」に否定されているが、この時代の遺跡に下り山古窯址群（錦町）や高山古窯址群（あさぎり町）などがある。

一方、『和名類聚抄』は古代の球磨郡に「人吉・西村・東村・久米・球玖・千脱」の６郷があった事を伝えている。しかし、郷と郡衙の比定地は以前から諸説あり、今日に至るまで確定してしていない。



図(Fig)1　中原横穴墓群周辺遺跡地図　S:1/25,000　●縄文　●古墳　●中世　●その他

熊本県（43）人吉市（203）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
002	アンモン山	下原田町　高千穂	縄文・古墳	包蔵地		縄文晩期土器・成川式土器・須恵器・竪穴式住居
004	荒毛	下原田町　小国ほか	弥生・古墳墳墓			石包丁・重弧文土器・V字溝・土壙墓・地下式板石積石室墓
005	牛塚古墳	上原田町　牛塚	縄文	古墳		牛塚神社境内
006	牛塚	上原田町　牛塚	縄文	包蔵地		御領式土器・弥生土器
007	村山	上林町　蟹ケ谷	縄文	包蔵地		早期・晩期の土器・石鏃・石匙・磨石
008	相良家下屋敷跡	相良町	近世	包蔵地	市	昭和33年指定
009	中原横穴墓群	中神町　大木	古墳	古墳		23基確認
010	大村横穴群	城本町・村山・鳥ケ岡	古墳	古墳	国	26基、わらび手直刀・碗形土器、浮彫装飾・須恵器
016	城本焼窯跡及灰原	城本町　鳥ケ岡	近世	生産		窯体底部・灰原　陶器片 昭和37年指定
019	唐渡神	下戸越町　唐渡神	縄文	包蔵地		縄文土器、旧戸越坂遺跡
020	大坪	下戸越町　大坪	縄文	包蔵地		押型文土器・石鏃、旧戸越遺跡
021	蓬莱ケ迫	西間下町　蓬莱ケ迫	縄文	包蔵地		小玉・石鏃　旧「北野遺跡」
022	岩川内	西間下町　岩川内	縄文	包蔵地		縄文土器・磨製石斧
035	馬草野	上原田町　馬草野	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
036	原田城跡	上原田町　栗ノ平	中世	城		堀切４条・土塁２条
037	西門	下原田町西園 西ノ前	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧・須恵器片
038	元冶庵跡	下原田町　井龍	中世	寺社		
039	豊光院跡	下原田町　井龍	中世・近世	寺社		寛政６年薩摩瀬に移転
040	井龍	下原田町　井龍	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
041	山二田	下原田町　山二田	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
042	快泉坊跡	下原田町　山二田	近世	包蔵地		
043	堀	下原田町 堀 久保園	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧、原田地頭館推定地
044	野間	下原田町　野間	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
045	普門院跡	下原田町　嵯峨里	中世	寺社		別名普門軒
046	八王子	上原田町　八王子	縄文	包蔵地		縄文土器
047	天宝	上原田町　天宝	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
048	天宝院跡	上原田町　天宝	中世	寺社		五輪搭
049	内村院跡	上原田町　内村	中世	寺社		五輪搭、内村地蔵堂の旧位置
050	清来寺	上原田町　清来寺	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
051	清来寺跡	上原田町　清来寺	中世	寺社		
052	尾崎	上原田町　尾崎	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
053	大正寺跡	上原田町　大正寺	不明	寺社		
054	長喜庵跡	上原田町　石場	不明	寺社		阿弥陀堂あり
055	眞福寺跡	上原田町　石場	中世・近世	寺社		寛永18年昆沙門天像を山江村高寺院に移す
056	六地蔵	上原田町　六地蔵	縄文	包蔵地		石斧・石鏃
057	羽田口	上原田町　羽田口	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
058	広瀬	上原田町　広瀬	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
059	平ノ上	上原田町　平ノ上	室町	包蔵地		縄文土器・石斧
060	原田平城跡	上原田町　平ノ上	中世・近世	城		「ひらんじょう」という伝承あり
061	愛染院跡,宝地寺院	井ノ口町　中棚	中世・近世	寺社	県	五輪搭群、昆沙門堂・薬師堂・井口八幡宮本殿
062	井口寺跡	井ノ口町　滝ノ下	縄文	寺社		井口八幡宮の別当寺・井口八幡神社神殿と木造薬師如来
063	奥山入	合ノ原町　奥山入	縄文	包蔵地		黒曜石片・縄文土器、山江村境
064	下山入	合ノ原町　下山入	縄文	包蔵地		黒曜石片・縄文土器、山江村境
073	若宮	下原田町　若宮	近世	包蔵地		土器片
074	若宮神社跡	下原田町　若宮	近世	寺社		
075	天下大明神跡	下原田町　天下山	縄文	寺社		
076	瓜生田	下原田町 瓜生田平草	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧・須恵器
081	石坂	中神町　石坂	近世	包蔵地		縄文土器・石鏃
082	中神御蔵跡	中神町　石坂	近世	包蔵地		
083	中神御仮屋敷跡	中神町　大木	近世	包蔵地		
085	天子神社跡	中神町　大坪	縄文	寺社		
086	段	中神町　段	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧・石器
087	上ノ段	中神町　上ノ段	古墳	包蔵地		縄文土器・石斧
088	平田	中神町　平田	縄文	包蔵地		土師器
089	石原	中神町　石原	縄文	包蔵地		縄文土器・石鏃
090	桜ノ前	中原町　桜ノ前	中世	包蔵地		石鏃、公園造成
091	中神城跡	中原町　桜ノ前		城		公園造成

表(Tab)１　中原横穴墓群周辺遺跡一覧表（１）

熊本県（43）人吉市（203）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
092	山王	下原田町　山王	縄文	包蔵地		縄文土器・石鏃・石斧
093	山王権現社跡	下原田町　山王	近世	寺社		
094	無田原	下原田町　無田原	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
095	石室寺跡	下原田町　迫田	中世	寺社		石搭
096	馬場平	下原田町　馬場平	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧
097	長福寺跡	下原田町　上野	中世・近世	寺社	市	阿弥陀堂現存、五輪搭群
098	龍門寺跡	中神町　桜ノ門	中世	寺社		不動堂あり、弘治元年再建の寺か
099	龍門寺跡	中神町　小丸	中世	寺社		五輪搭
100	井野木田砦跡	上林町　炭焼谷	中世	城		土塁
101	村山闇谷	上林町　村山	旧石器・縄文	集落		集石・炉穴、平地住居、貝殻条痕文、押型文、塞ノ神式・垂飾
102	千手院跡	上林町　村山	近世	寺社		経筒発見地(寛政10年)石搭・中国製白磁・青磁
103	尾園	城本町　観音堂ほか	縄文	包蔵地		押型文土器・手向山式土器・青磁
104	独慎庵跡	城本町　高木	近世	寺社		瑞祥寺住職の墓
105	観琳寺跡	瓦屋町　尾原	中世	寺社		一部消滅
106	永田	瓦屋町　永田	縄文	包蔵地		黒曜石片・チャート片・土師皿
127	中堂	中神町　中堂	縄文	集落		埋甕・古閑･黒川･石鏃･石斧･石匙･管玉･丸玉
128	長立寺跡	中神町　中堂	中世	寺社		六地蔵・五輪搭・観音堂跡・石鍋・八王子大明神別当寺
129	三日ヶ原	下戸越町　三日ヶ原	縄文	包蔵地		打製石斧・磨製石斧・十字形石器・押型文
130	三日ヶ原城跡推定地	下戸越町　三日ヶ原	中世	城		独立丘
131	今村	下戸越町　今村	縄文	包蔵地	跡	縄文土器・石鏃・黒曜石片
132	高山	下戸越町　高山	旧石器・縄文	包蔵地		細刃器・縄文土器
133	中尾	下戸越町　中尾	旧石器	包蔵地		槍先形尖頭器
134	唐渡神横穴墓	下戸越町　唐渡神	古墳	古墳		神社裏崖面に３基
135	内ノ原横穴墓群	下戸越町　内ノ原	古墳	古墳		２基を確認
136	内ノ原Ａ	下戸越町　内ノ原	縄文	包蔵地		黒曜石片
137	内ノ原Ｂ	下戸越町　内ノ原	縄文	包蔵地		押型文土器
138	浜川	下城本町　浜川	縄文	包蔵地		押型文・塞ノ神式・手向山式・撚糸文
139	矢黒城跡	矢黒町　西園	室町	城		中国製青白・土師皿・石鍋
140	矢黒	矢黒町 西園・下矢黒	縄文	包蔵地		石刀・石斧・石鏃・御領式土器
141	村山城跡	城本町　城本	中世	城		明確な遺構ない、現在一部消滅、青磁・土師器
142	稲荷山	西間下町　蓮来ヶ迫	縄文	包蔵地		石鏃
143	拾君畑	西間下町　拾君畑	縄文	包蔵地		石鏃.黒曜石片.縄文土器.土師器.古墳
205	戸越城跡	下戸越町　古城	中世	城		
206	高栗栖	下戸越町　高栗栖	縄文	包蔵地		縄文土器・石鏃
207	永葉	上戸越町　永葉	縄文	包蔵地		押型文土器・晩期土器
208	瓜生迫	下永野町　瓜生迫	縄文	包蔵地		石槍・縄文土器・黒曜石片
211	大原	上戸越町　大原	縄文	包蔵地		石鏃
217	下天ヶ野	下永野町　天ヶ野	縄文・古墳	包蔵地		晩期土器・黒曜石片・土師器
284	年ノ神	相良町　年ノ神	中世	包蔵地		石鍋
285	萩原	中青井町　萩原	古墳	包蔵地		蕨手鉄刀・須恵器（明治40年頃出土）
289	石造五重塔	土手町	中世	建造物	市	永国寺境内
291	老神神社本殿	老神町	中世	寺社	国	重文（建）
297	人吉庄政所推定地		不明			

熊本県（43）山江村（512）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
001	白鳥	山田　白鳥	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片
002	北峰	山田　北峰	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片
003	石坂	山田　石坂	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片
004	一本松	山田　一本松	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片
005	高中	山田　高中	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片
010	漬谷	山田　漬谷	縄文	包蔵地		土器片・黒曜石剥片

熊本県（43）球磨村（513）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
023	原田城跡	渡　西門	中世	城		

表(Tab)２　中原横穴墓群周辺遺跡一覧表（２）

鎌倉時代に入ると、球磨郡の田数と領主を書き上げた建久八年（1197）の『肥後国球磨郡図田帳写』がある。これによれば球磨郡は人吉・須恵・永吉庄に分かれ、公田として豊冨・豊永郷があり、領主は在地勢力の久米・須恵・人吉・平川氏などであった事がわかる。

西遷御家人の相良氏の球磨郡下向は、元久二年（1205）の相良永頼「人吉庄地頭職」補任後と思われる。しかし、寛元二年（1244）に永頼は「下知違背之咎」として人吉庄地頭職が中分され、北方は北条得宗家に奪われている。

南北朝時代の球磨郡は多良木の上相良氏（経頼）と人吉の下相良氏（定頼・前頼）が敵対し、これに国人の平川・須恵・岡本・永里・宮原・橘氏などが加わって激しい内乱となった。この様な状況の中で、下相良氏の前頼・氏頼兄弟が「ながとみとの」宛へ契状を出すなど、庶子の勢力も大きなものがあった。

室町時代に入ると、人吉城主の相良前続が死去し、幼主の尭頼が家督を継いだ。しかし、上相良氏はすぐさま人吉へ押し寄せ、幼主尭頼を追放した。続いて山田城主と伝えられる永留長続が、上相良氏を人吉から追い払い、自ら人吉城に入城した。さらに、文安五年（1448）八月には、多良木の上相良頼仙・頼観を滅亡させ、これに加担した久米・平川・須恵・岡本・永里氏など有力国人を滅ぼし、郡内を一挙に統一した。その後、永留氏が「相良」姓を名乗り、長続は薩摩と肥後の芦北・八代へ勢力を伸ばし、その子為続の時代には、球磨・芦北・八代を支配下に置くなど版図を広げた。

為続から長毎・長祇へと家督が譲られ、長唯の代で初めて庶民の上村氏から晴広を迎え入れたが、晴広の代で本家の上村三兄弟が氾濫を起こした。さらに、人吉での動揺が続き、相良氏による球磨郡支配の弱さを露呈した。結果として、相良氏は本拠を八代の麓から人吉へと移すことになる。義陽の代には、日向の伊東氏と薩摩の島津氏の勢力が除々に球磨郡へ延びており、義陽は真幸・大口へ軍隊を差し向けるなど、領内の警戒を強めた。しかし、天正九年（1581）肥後の水俣城の落城を機に、義陽は戦わずして島津義久に軍門を降り、八代・芦北郡を放棄し、球磨郡のみが安堵された。そして、同年十二月に義陽は島津氏の先陣として、阿蘇氏の家臣・甲斐宗運と響野原にて戦い、討ち死にしている。

その後、島津政権下で忠房が家督を継ぎ、やがて豊臣秀吉の九州征伐で、島津･相良氏とも秀吉の支配下に入ることとなる。天正十五年（1587）には、秀吉から相良長毎に「旧領球磨郡安堵」がなされ、以後、二万二千石の外様大名として相良氏は、明治時代の廃藩置県まで永きに渡って球磨郡を支配した。(6)

【註】

(1) 木崎康弘　『狸谷遺跡』
熊本県文化財調査報告第90集　1987年

(2) 県文化課の馬場正弘氏のご教示による。

(3) 宮田栄二　「九州南東部の地域編年」安斎正人・佐藤宏之編『旧石器時代の地域編年的研究』同成社　2006

(4) 西住欣一郎　『天道ヶ尾遺跡（1）』
熊本県文化財調査報告第103集　1989年

(5) 西健一郎氏のご教示によれば「布留式土器」段階に属するということである。

(6) 大田幸博　『城・馬場遺跡、高城跡Ⅶ郭』
熊本県文化財調査報告第110集　1990年

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　はじめに

本調査区の工事施行方法は、コンクリートの吹きつけと道路沿いに擁壁を建てる部分に分かれる。

コンクリートの吹きつけ範囲は、横穴墓等が消滅してしまうために発掘調査を行ったが、道路沿いの擁壁を建てる部分（10号～33号）は、横穴墓等の消滅は免れるので、現状での実測のみを行った。しかし、横穴墓の残存状況は非常に悪く、ほとんどが崩落しており、１/２残存していれば良い方であった。

調査区は、横穴墓、防空壕、横穴墓が防空壕に転用されたもの、後世の掘削によるものなどが混在していた。発掘調査は、横穴墓、防空壕、横穴墓が防空壕に転用されたものを対象とし、「横穴墓」

図(Fig)2　中原横穴墓群遺構配置図(S=1/800)

と「防空壕」に分けて記録保存を行った。

第２節　調査の方法

調査区は南北に約400ｍにわたる崖面である。横穴墓や防空壕は、標高約105ｍ～118ｍの高さの阿蘇４溶結凝灰岩を掘って作られている。

調査は、平成18年度（2006）に球磨地域振興局土木部が当該予定地の地形測量を実施した際に作成した平面図の中に、横穴墓の可能性がある掘り込みを西側から順に１号から53号まで番号を付けることから始めた。そして、崖面周辺にある樹木や草を刈り清掃を行った後で、再度横穴墓か防空壕かを検討した。そこで後世の掘削や崩落による窪みなどは欠番（3，4，5，18,20,28,30,31,32,34,35,36,37,39,42,43,44,53）とした。

コンクリートの吹きつけが及ぶ範囲の横穴墓や防空壕（１号～９号、38号～53号）は、発掘調査後実測等を行ったが、実際に土砂が埋没して発掘が可能な横穴墓は、７,46,47,48号だけであった。

７,46,47,48号については、奥壁に対して垂直に土層観察用のベルトを残して、左右を約40cmの小グリッドに設定して掘り下げを行った。また、掘削した土は全て１mmの網でふるいをかけ、微細な遺物も逃さないようにした。また、状況に応じて35mmや中判カメラのモノクロやリバーサルフィルムで撮影を行った。

遺構及び遺物出土状況は、1/20の縮尺で図面を作成した。更にこれらの遺構図は、球磨地域振興局土木部が作成した平面図の中に当時の基準杭のデータを基に組み入れて、遺跡の平面図や立面図を作成した。

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　はじめに

【遺　構】

この遺跡で確認された遺構は、以下のとおりである。表３を参照されたい。

①横穴墓：27基（うち、純粋な横穴墓：20基、防空壕として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：４基、防空壕の通路として改変されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：２基、お堂として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：１基）。

②元々は横穴墓と考えられるが、防空壕のために全ての掘削を受けて、プランのみ残存するもの：２基。

③防空壕：12基（純粋な防空壕：４基、横穴墓を掘削し、防空壕として転用したもの：４基、横穴墓を掘削し、防空壕の通路として利用しているもの：1(2)基、元々は横穴墓だったと考えられるが防空壕としての掘削が全てにわたっているもの：２基、防空壕の入り口部分のみの作りかけ：１基）

④横穴墓を祠などとして転用したもの：１基

⑤不明：１基

なお、先述したように１～53号のうち、欠番は、後世の掘削または自然崩壊箇所と判断したもの（18基）である。

遺構の説明は、（１）横穴墓、（２）防空壕、（３）その他の順に取り扱うことにした。

（１）横穴墓：27基＋（２基）

①純粋な横穴墓：20基

（１，２，６，７,21,22,23,24,25,26,27,29,33,38,40,41,45,47,51,52号墓）

②防空壕として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：４基（８,13,14,15号墓）

③防空壕の出入口として改変されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：２基

（12【11号壕の出入口のみ】,48号墓）

④お堂として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：１基（46号墓）

⑤元々は横穴墓と考えられるが、防空壕築造のために全面にわたり掘削を受けて、プランのみ残存するもの：２基（10,16号墓）

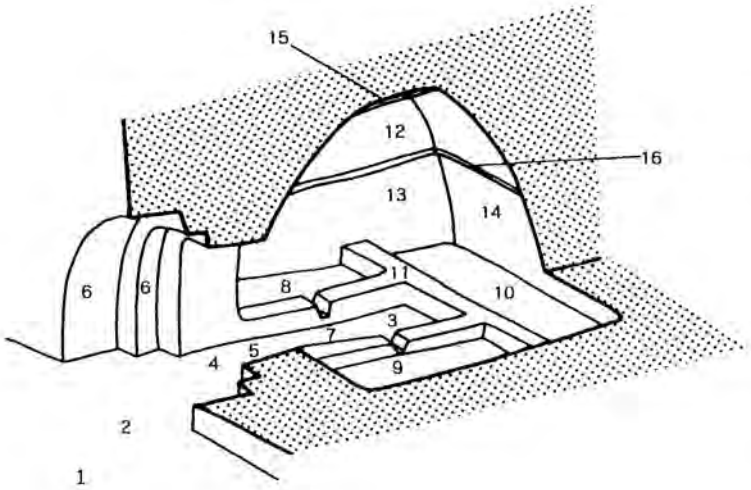
（２）防空壕：12基

①純粋な防空壕：４基（９,11,17,49号壕）

②横穴墓を掘削し、防空壕として転用したもの：４基（８,13,14,15号壕）

③横穴墓を掘削し、防空壕の出入口等として利用しているもの：1(2)基（11号壕の出入口のみ【12号墓】,48号壕）

④元々は横穴墓だったと考えられるが防空壕としての掘削が全てにわたっているもの：２基



1.前庭部
2.羨道
3.玄室
4.羨門
5.玄門
6.飾縁
7.通路
8.左屍床
9.右屍床
10.奥屍床
11.仕切
12.天井部
13.左側壁
14.奥壁
15.棟線
16.軒先線

図（Fig）３　横穴墓の部分名称

番号	横穴墓等	防空壕	その他	備　　考
1	○	×	×	
2	○	×	×	
6	○	×	×	
7	○	×	×	
8	○	○	×	横穴墓を防空壕に転用
9	×	○	×	
10	△	○	×	横穴墓を全て掘削?現状から横穴墓であった可能性大
11	×	○	×	
12	○	（○）	×	横穴墓を防空壕の通路として掘削（11号壕の出入口のみ）
13	○	○	×	横穴墓を防空壕に転用
14	○	○	×	横穴墓を防空壕に転用
15	○	○	×	横穴墓を防空壕に転用
16	△	○	×	横穴墓を全て掘削?現状から横穴墓であった可能性大
17	×	○	×	出入口が2ヶ所あり
19	×	○	×	防空壕の入り口部のみの掘りかけ
21	○	×	×	
22	○	×	×	
23	○	×	×	崩落の危険性が高く実測不可能。写真のみ
24	○	×	×	崩落の危険性が高く実測不可能。写真のみ
25	○	×	×	
26	○	×	×	
27	○	×	×	
29	○	×	×	
33	○	×	×	
38	○	×	×	
40	○	×	×	
41	○	×	×	
45	○	×	×	ほとんどが土砂で埋まる
46	○	×	○	横穴墓をお堂に転用
47	○	×	×	
48	○	○	×	横穴墓を防空壕の通路等として掘削
49	×	○	×	
50	×	?	○	防空壕の掘りかけ?下層は不明の掘り込みあり
51	○	×	×	
52	○	×	×	
○	27	12	2	
△	2			

※欠番は、後世の掘削または自然崩壊箇所と判断。（18基）
※横穴墓は○号墓、防空壕は○号壕、その他は○号と呼称する。
※△は、横穴墓を全て掘削し、防空壕に転用したもので、現状から横穴墓であった可能性が高いことを示す。

表（Tab）３　横穴墓と防空壕等の番号

（10,16号墓）

⑤防空壕の入り口部分のみの掘りかけ：１基

（19号壕）

（３）その他：２基

①横穴墓を祠等として転用したもの:１基（46号）

②不明：１基（50号）

【遺　物】

遺物は、遺構からの出土遺物及び周辺の表採遺物を含めて、網コンテナ（46cm×61cm×20cmの大きさ）に約２箱分の量であった。

横穴墓から出土した遺物については、その遺構毎に説明する。又、主な表採遺物についても、第３節（4）で述べたい。

第２節　遺跡の立地と分布及び横穴墓の部分名称

（１）立地（図１参照）

中原横穴墓群は、人吉市中神町字大木に所在する。万江川と球磨川が合流する地点の右岸に広がる河岸段丘上にあり、阿蘇4溶結凝灰岩の崖面に横穴墓群が形成されている。この段丘上には古墳時代の包蔵地が存在することから当時の集落と推定される。

また、東南東の約３km付近には、同じ阿蘇4溶結凝灰岩に堀り込まれた大村横穴墓群が所在する。

（２）分布（図２参照）

今回調査した横穴墓群は、高さ約８ｍ（標高約106～114ｍ）長さ約380ｍに渡り確認された。しかしこの段丘は約900m続くことから、この他にも横穴墓が発見される可能性が高い。

（３）横穴墓の部分名称（図３参照）

本報告において、利用する横穴墓の基本的な部分名称については、図３を参照されたい。（松本・西住編1989を転載）。

第３節　検出遺構と出土遺物

（１）横穴墓

①純粋な横穴墓：20基

（1，2，6，7，21,22,23,24,25,26,27,29,33,38,40,41,45,47,51,52号墓）

【１号墓】（図４参照）

［確認位置］西側。標高約106.1ｍ。

［残存状況］1/4以下。崩落により天井部や屍床部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N48°E

［玄室規模と状況］幅：268cm～、奥行き：136cm～、高さ：103cm～。

［平面の形態］やや幅広の長方形。平面形の大分類ではⅠ類か？（以下図28参照）

［天井の形態］軒先線のないドーム形か？

［出土遺物］なし。残存屍床部にピンポン玉大～拳大の大きさの河原石が20個程残る。

【２号墓】（図４参照）

［確認位置］西側。標高約105.1ｍ。

［残存状況］1/4以下。崩落及び後世の掘削により天井部や屍床部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N1°E

［玄室規模と状況］幅：254cm、奥行き：70cm～、高さ：130cm～。

［平面の形態］やや幅広の長方形か？

［天井の形態］ドーム形か？

［出土遺物］なし。

【６号墓】（図４参照）

［確認位置］西側。標高約107ｍ。

［残存状況］約1/3。崩落により天井部や屍床部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。また、仕切はない。軒先線は存在する。

［主軸方向］N11°W

［玄室規模と状況］幅：133cm、奥行き：83cm～、高さ：97cm。玄室の床面は約1/3残存しているが、その中央部は後世の掘削が及んでいる。側面にも後世の掘削が確認される。

［平面の形態］やや小さめの長方形か？大分類ではⅡ？かⅢ？

［天井の形態］軒先線のあるドーム形。

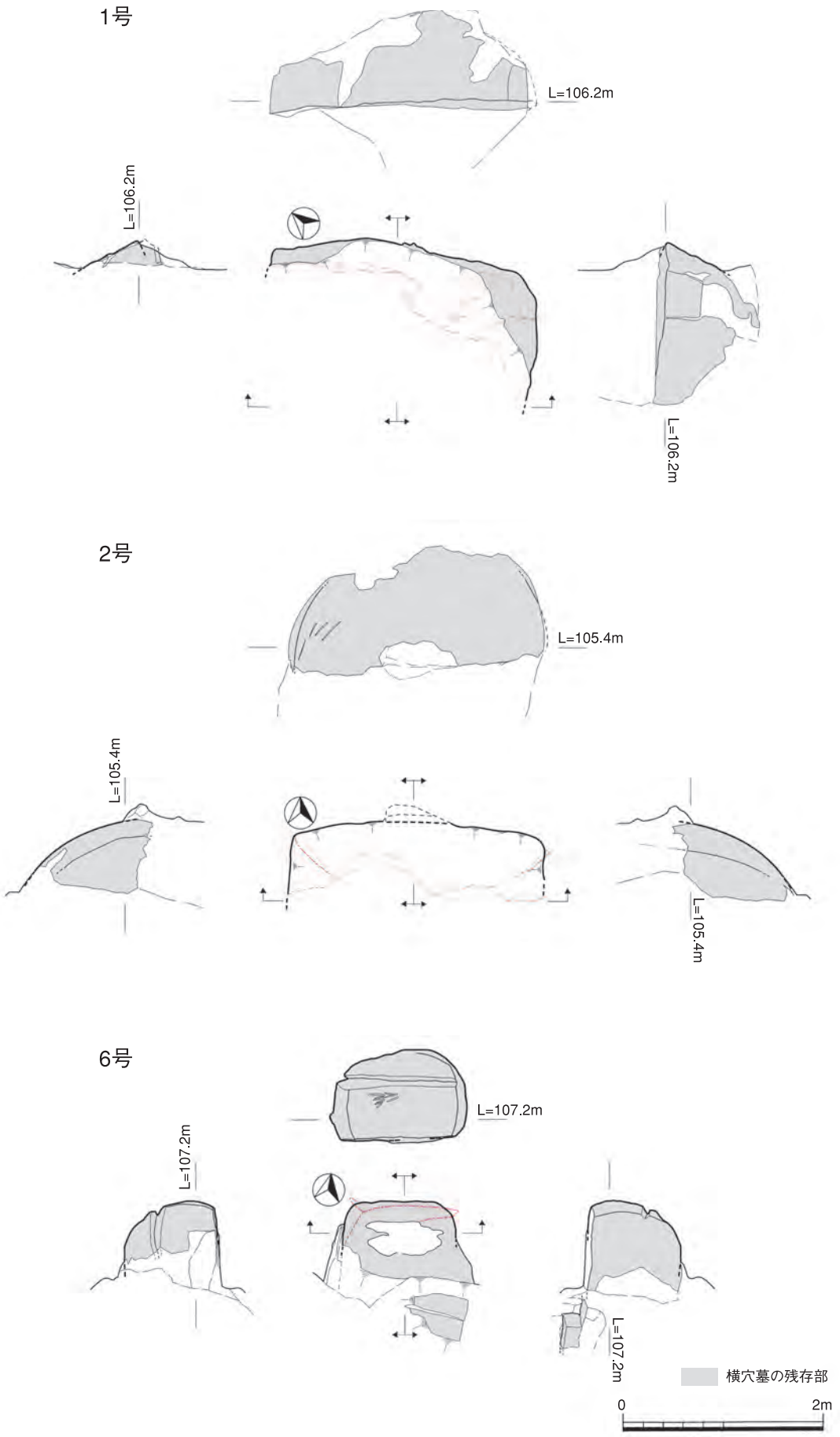
［出土遺物］なし。

【７号墓】（図５参照）

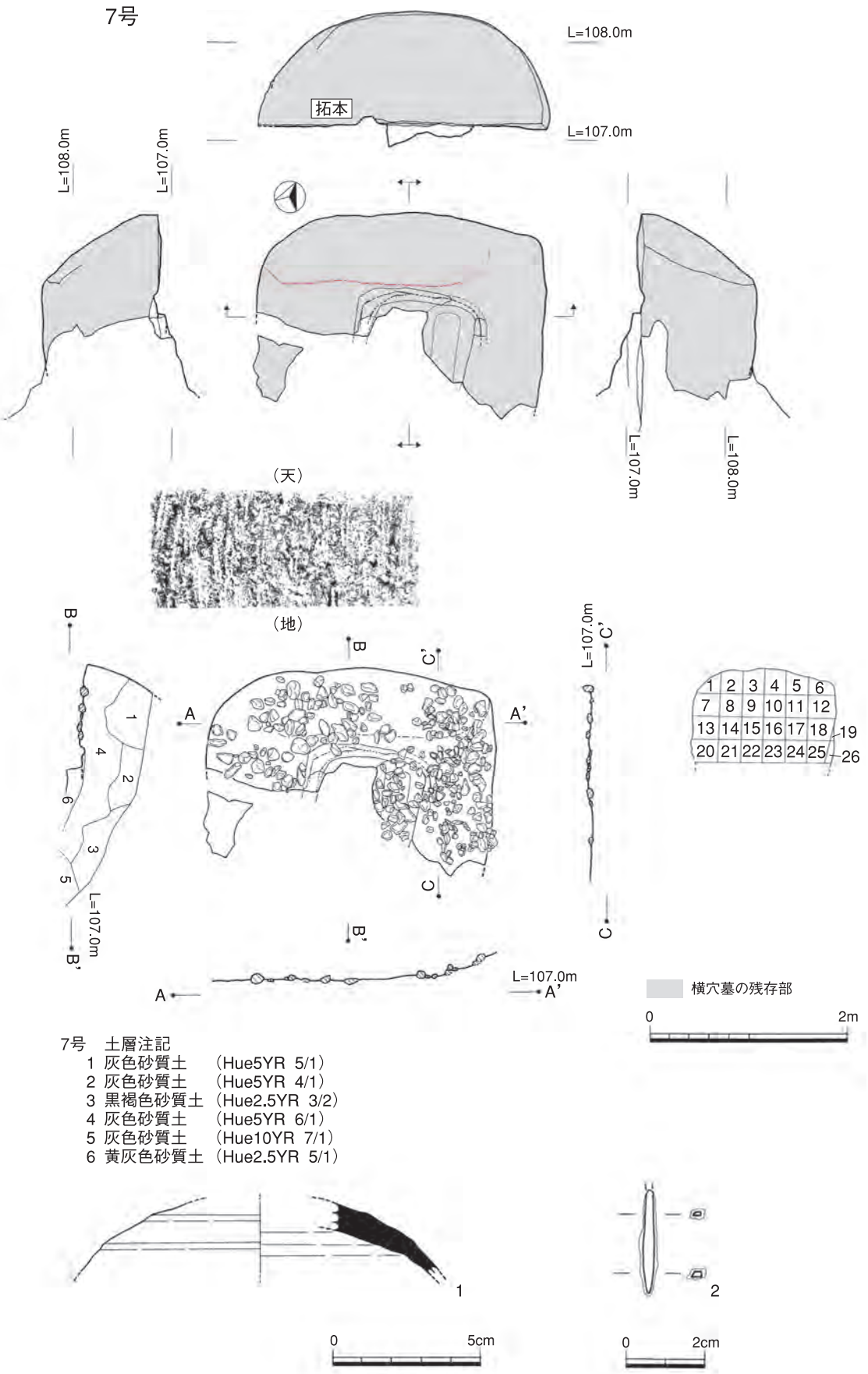
［確認位置］西側。標高約107ｍ。

［残存状況］約1/3。崩落により天井部や屍床部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N24°W



図(Fig)４　1,2,6号横穴墓実測図



図(Fig)5　7号横穴墓実測図・礫出土状況図及び出土遺物実測図

［**玄室規模と状況**］幅：292cm、奥行き：210cm～、高さ：122cm。石室内に最大厚約70cmの堆積土があり、47号墓、48号墓と共に掘り下げが実施できた横穴墓である。石室内を約40cm毎に区切って１～26のグリッドを設けて掘り下げを行い、排土をふるいにかけて微細遺物の見落としがないかを確認した。床面には拳大から両拳大の丸みを帯びた河原石が敷き詰められていた。おそらく下層にある人吉層、あるいは球磨川から採取した河原石を敷き詰めたものであろう。床面のほぼ中央部には、仕切と考えられる約５cmの高まりが見られ、通路とみられる溝状のへこみも観察された。軒先線は存在しない。幅約１cmのノミ状の掘削痕跡が残る。東側は８号墓及び８号壕と接しており径約20cmの穴が開いていた。おそらく防空壕の明り取り用の穴と推定される。なお、７号墓の堆積土は６層に分層される。１層：灰色砂質土（Hue5YR5/1）木の根と凝灰岩の崩落土が混じる目の粗い砂質土。２層：灰色砂質土（Hue5YR4/1）１層と酷似しているが、より目の細かい砂質土。３層：黒褐色砂質土（Hue2.5YR3/2）木の根と凝灰岩の崩落土が混じるやや目の細かい砂質土。４層：灰色砂質土（Hue5YR6/1）目の細かい凝灰岩の崩落土が混じる砂質土。下層は、人為的に持ってきた河原石を含んでおり、部分的にプライマリーな石室内堆積土と推定される。５層：灰色砂質土（Hue10YR７/1）３層より目の細かい砂質土。石室外の崩落土。６層：灰色砂質土（Hue2.5YR5/1）目の細かい砂質土。石室外の崩落土。

［**平面の形態**］長方形か？大分類ではⅦ類。

［**天井の形態**］軒先線がないドーム形。

［**出土遺物**］排土をふるいにかけた中から、須恵器片1点、土器片１点と鉄製品1点が出土している。土器片は土師器片と考えられるが、小片のため、写真のみ掲載することにする。

１は、須恵器で、杯の身か蓋の一部と考えられる。16グリッドの床面直上からの出土である。ここでは蓋としての復元図を描いた。残存高2.4cm、復元口径は、12.0cm以上である。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ切り後ナデを行っている。時期は６世紀末～7世紀初頭と推定される。

２は、鉄鏃の茎部の一部と考えられる。１グリッドの床面直上からの出土である。残存長2.7cm、幅は0.3cmである。

【21号墓】（図６参照）

［**確認位置**］西側。標高約107.5ｍ。

［**残存状況**］1/4以下。崩落及び後世の掘削により屍床部の大半や天井部の約半分、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［**主軸方向**］N31°E

［**玄室規模と状況**］幅：265cm～、奥行き：194cm～、高さ：118cm～。石室の床面はほとんど残存していない。側面に仕切りの痕跡が残る。

［**平面の形態**］長方形？大分類ではⅢ類。

［**天井の形態**］軒先線のないドーム形。

【22号墓】（図６参照）

［**確認位置**］西側。標高約107.25ｍ。

［**残存状況**］1/4以下。崩落及び後世の掘削により屍床部の全てや天井部の約半分、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［**主軸方向**］N20°E

［**玄室規模と状況**］幅：235cm、奥行き：164cm～、高さ：122cm～。石室の床面は、全て残存していない。

［**平面の形態**］長方形？大分類ではⅠ類。

［**天井の形態**］軒先線のあるドーム形。

【23号墓】

崩落の危険性があるために実測不可能。写真のみ掲載。略測で幅：255cm、奥行き：210cm～、高さ：110cm～を測る。残存状況は非常に悪く、天井部は全て崩落している。側面は約1/2残存しており、床面も1/2近く残存している可能性がある。平面の大分類ではⅣ類か？標高は約107ｍ程度と考えられる。

【24号墓】

崩落の危険性があるために実測不可能。写真のみ掲載。略測で幅：315cm、奥行き：320cm、高さ：135cm～を測る。高い位置にあり、標高は

約108ｍを越えると考えられる。残存状況は中原横穴墓群の中では非常に良好で、玄室全体の約2/3程度が残存する。軒先線と奥壁に平行する形状の仕切線が左右の側壁に残存する。平面形の大分類ではⅣか。地元の方の話では、25年程前までは50cm四方の小窓（羨門）も残存していたようだ。また、明治10年（1877）の西南戦争では薩摩軍が敗走中、馬を隠したとの伝承が残る横穴墓である。しかし、入り口が50cm四方の大きさでは馬は隠せないだろう。何れにせよ、この周辺は西南戦争時「中神の戦い」があった激戦地の近くのため、馬を隠したという伝承が残ったものと考えられる。

【25号墓】（図７参照）

［**確認位置**］西側。標高約107.8ｍ。

［**残存状況**］1/3以下。崩落により屍床部の約半分や天井部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［**主軸方向**］N36°E

［**玄室規模と状況**］幅：228cm、奥行き：182cm～、高さ：68cm～。現状での実測のみであるため、詳細は不明。

［**平面の形態**］長方形？大分類ではⅠ類か？

［**天井の形態**］軒先線のあるドーム形。

【26号墓】（図７参照）

［**確認位置**］西側。標高約107.3ｍ。

［**残存状況**］1/8以下。崩落及び後世の掘削により屍床部、天井部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。奥壁と左側壁がわずかに残存しているのみである。

［**主軸方向**］N27°E

［**玄室規模と状況**］幅：185cm、奥行き：69cm～、高さ：45cm～。

［**平面の形態**］長方形？

［**天井の形態**］不明。

【27号墓】（図７参照）

［**確認位置**］西側。標高約106.7ｍ。

［**残存状況**］1/10以下。崩落及び後世の掘削により屍床部と天井部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。奥壁と右側壁がわずかに残存しているのみである。

［**主軸方向**］N27°E

［**玄室規模と状況**］幅：54cm～、奥行き：15cm～、高さ：110cm～。

［**平面の形態**］不明。

［**天井の形態**］不明。

【29号墓】（図８参照）

［**確認位置**］西側。標高約107.5ｍ。

［**残存状況**］1/4以下。崩落により屍床部の全てや天井部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。仕切り線が奥壁に残存する。

［**主軸方向**］N34°E

［**玄室規模と状況**］幅：190cm～、奥行き：120cm～、高さ：114cm～。奥壁に仕切線の一部が残存している。

［**平面の形態**］長方形？大分類ではⅢ類。

［**天井の形態**］軒先線のあるドーム形。

【33号墓】（図８参照）

［**確認位置**］西側。標高約106.9ｍ。

［**残存状況**］1/10以下。崩落により屍床部の全てや天井部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。奥壁と左側壁がわずかに残るのみである。

［**主軸方向**］N13°E

［**玄室規模と状況**］幅：55cm～、奥行き：36cm～、高さ：143cm～。幅約１cmのノミ状の掘削痕跡が残る。

［**平面の形態**］不明。

［**天井の形態**］不明。

【38号墓】（図８参照）

［**確認位置**］中央部。標高約106.8ｍ。

［**残存状況**］1/10以下。崩落及び後世の掘削により屍床部の全てや天井部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［**主軸方向**］N16°E

［**玄室規模と状況**］幅：138cm～、奥行き：49cm～、高さ：98cm～。

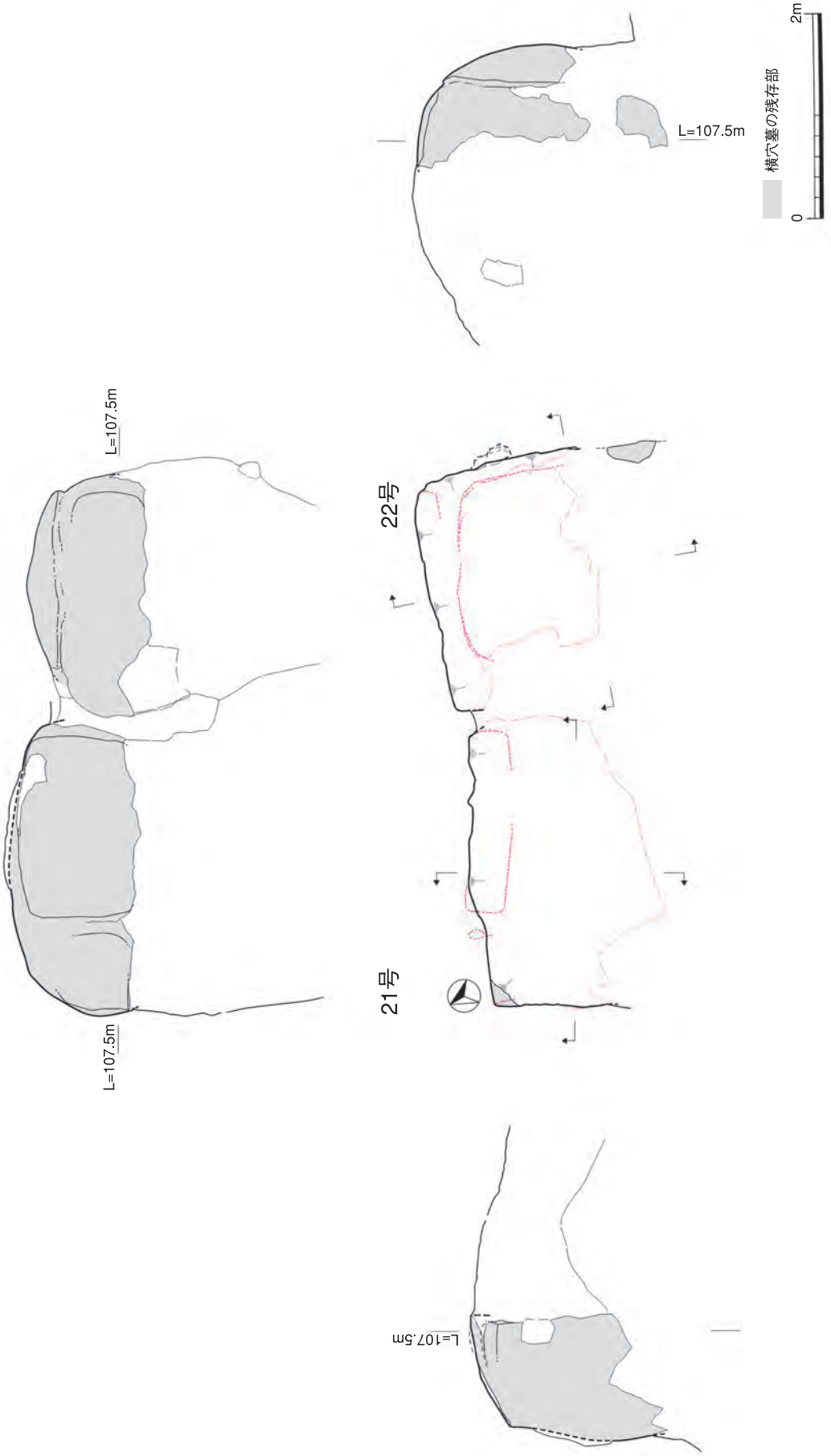
［**平面の形態**］長方形？大分類ではⅠ類か？

［**天井の形態**］軒先線のあるドーム形。

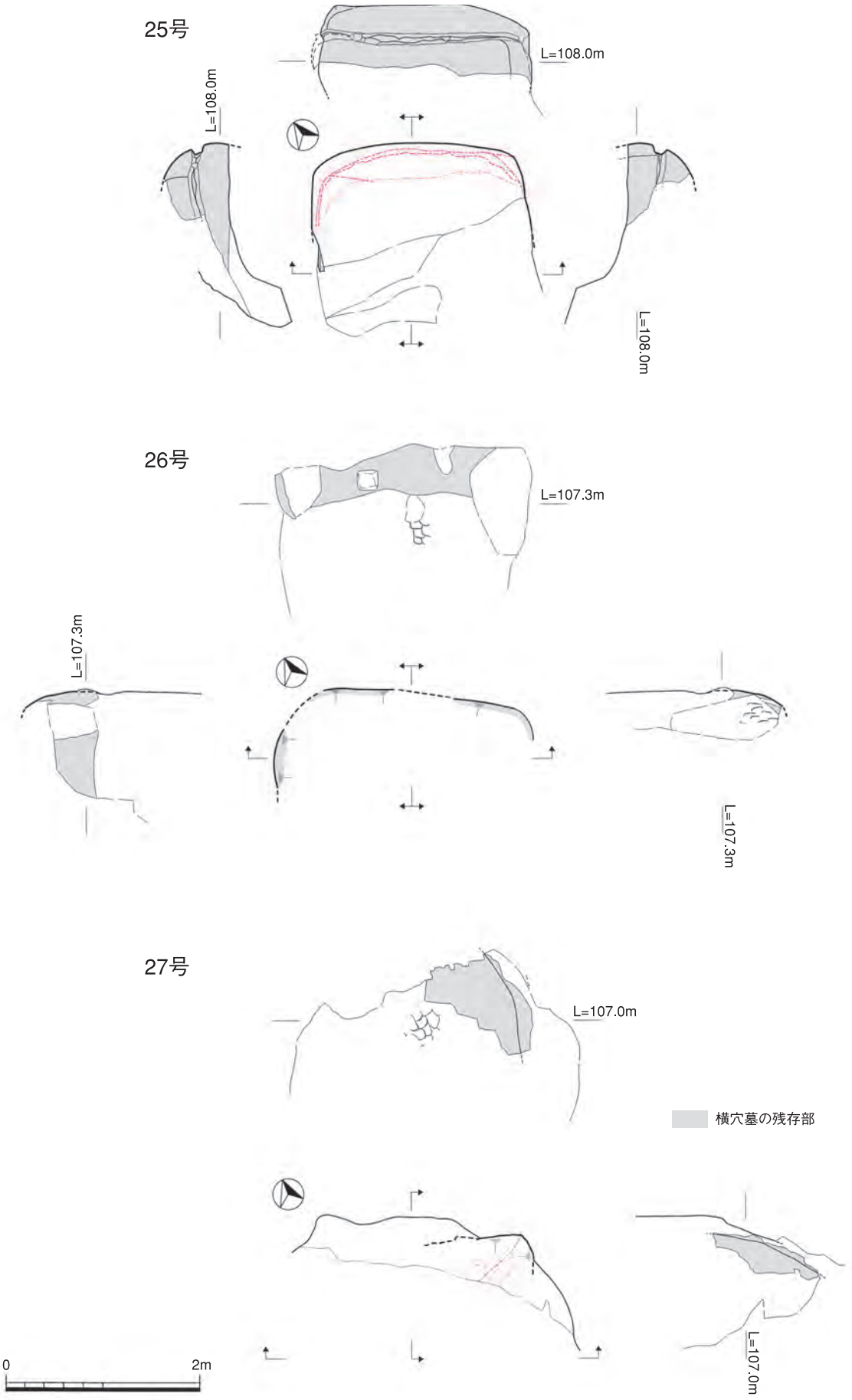
【40号墓】（図９参照）

［**確認位置**］中央部。標高約106ｍ。

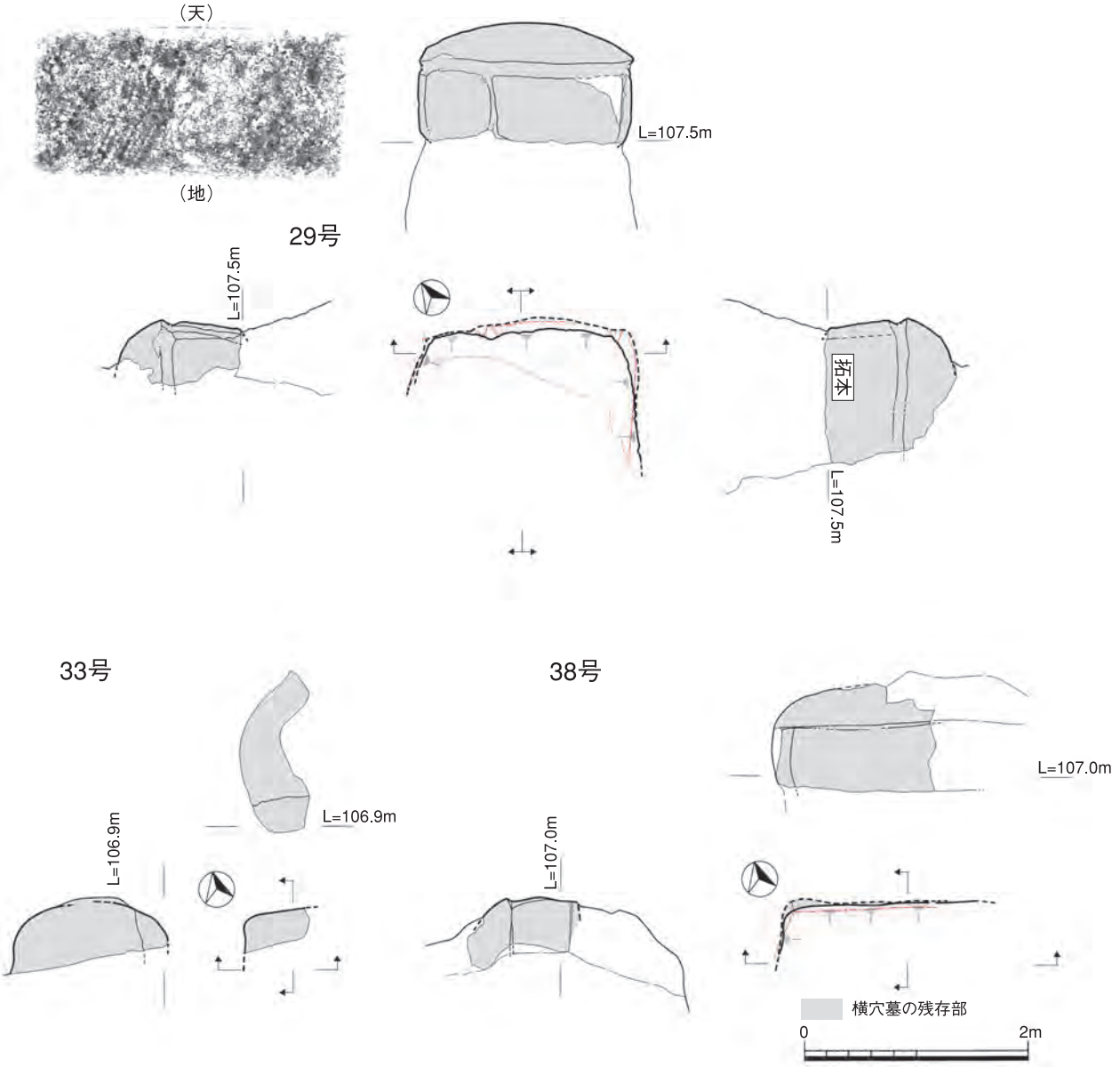
［**残存状況**］1/10以下。崩落及び後世の掘削により屍床部の全てや天井部の大半、羨道部や



図(Fig)6　21,22号横穴墓実測図



図(Fig)7　25,26,27号横穴墓実測図



図(Fig)８　29,33,38号横穴墓実測図

羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N18°E

［玄室規模と状況］幅：205cm～、奥行き：135cm～、高さ：144cm～。

［平面の形態］長方形？大分類ではⅧ類か？

［天井の形態］ドーム形。

【41号墓】（図９参照）

［確認位置］中央部。標高約106.1ｍ。

［残存状況］1/10以下。崩落により屍床部、天井部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N67°E

［玄室規模と状況］幅：46cm～、奥行き：48cm～、高さ：177cm～。

［平面の形態］不明。

［天井の形態］不明。

【45号墓】（図10参照）

［確認位置］中央部。標高約107.8ｍ。

［残存状況］1/10以下。崩落により天井部の一部しか確認できない。

［主軸方向］N35°E

［玄室規模と状況］幅：117cm～、奥行き：61cm～、高さ：65cm～。

［平面の形態］不明。

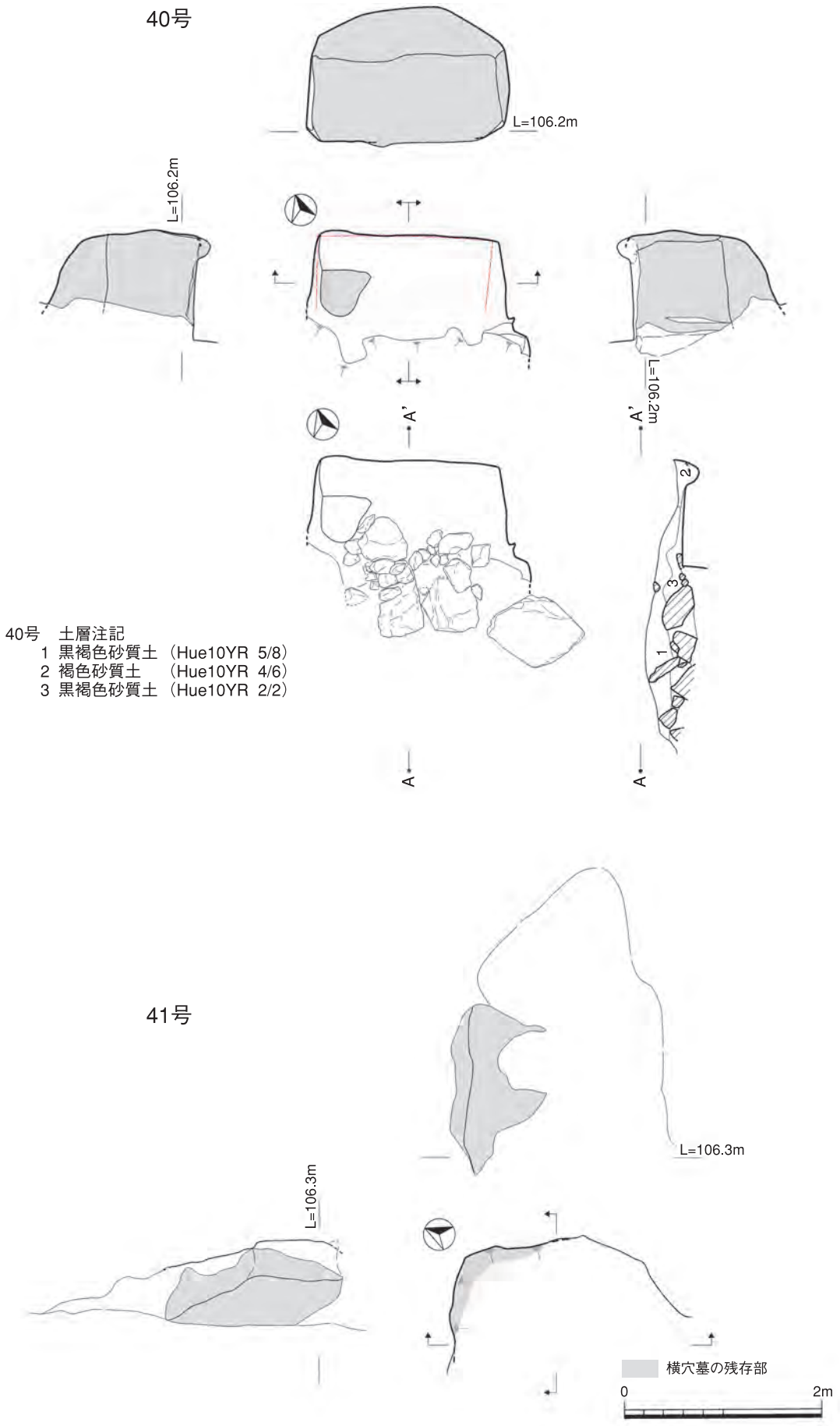
［天井の形態］不明。

【47号墓】（図11参照）

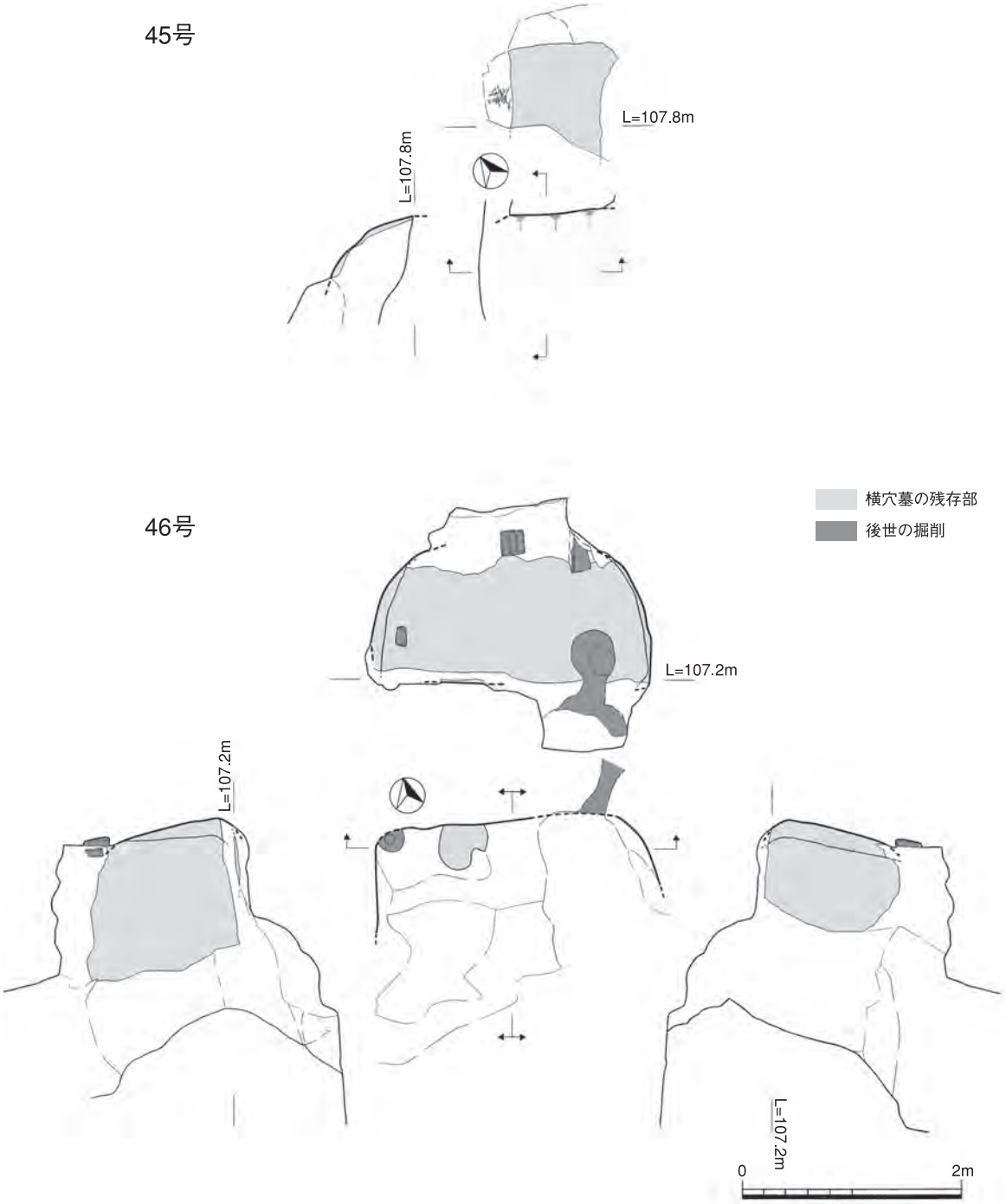
［確認位置］中央部。標高約107.5ｍ。

［残存状況］約1/2以下。崩落及び後世の掘削により天井部や屍床部の約半分、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N24°E



図(Fig)9　40,41号横穴墓実測図及び礫出土状況図



図(Fig)10　45,46号横穴墓実測図

［玄室規模と状況］幅：269cm、奥行き：202cm～、高さ：200cm～。石室内に最大厚約40cmの堆積土があり、７号墓、48号墓と共に掘り下げが実施できた横穴墓である。石室内を約40cm毎に区切って１～30のグリッドを設けて掘り下げを行い、排土をふるいにかけて微細遺物の見落としがないようにした。その結果多くの鉄製品が確認された。

床面には拳大から両拳大の丸みを帯びた河原石や凝灰岩の角礫が敷き詰められていた。河原石は、おそらく下層にある人吉層あるいは球磨川から採取したものを敷き詰めたもので、凝灰岩の角礫は、付近の崖下で採取したものを敷き詰めたものであろう。凝灰岩及び床面から浮いた河原石は、後世に敷かれたものであろうが、床面に置かれた河原石は、当時のものが一部残存しているものと考えられる。このことは、７号墓、48号墓にも河原石が敷

き詰められていたことからも窺える。

床面の左側壁側90cmには、幅約20cm、高さ約10cmの屍床の仕切が確認された。軒先線も存在する。

また、左側壁と奥壁の一部に線刻による連続三角文と考えられる装飾文様が確認された。幅が約１～1.5cm、深さが約0.5cmの太さで刻まれていた。線刻内の軽石にも鋭い掘削痕跡が残存しており、おそらく鋭利な工具で線刻したものであろう。しかし、左側壁や奥壁の凝灰岩は劣化が激しく脆弱な状況であり、装飾文様の線刻を切る形で縦や弧状の後世の線刻も観察される。大村横穴墓群にも１基だけ玄室内の装飾が見られる。

奥壁側は48号防空壕と接しており縦62cm、横45cm、長さ約100cmの穴が開いていた。おそらく防空壕中への明り取り用の穴と推定される。

47号墓の堆積土は３層に分層される。

１層：暗褐色土（Hue10YR3/3）表土及び崩落土。木の根と凝灰岩の崩落石を含むフカフカした軟らかい土。

２層：黒色砂質土（Hue7.5YR2/1）石室内堆積土と考えられ、ややしまる。凝灰岩の崩落土が細かく砕け、砂質土になっている。床面には一部当時敷かれた河原石が残存する。

３層：黒褐色土（Hue10YR3/2）やや粘性があり、パサパサしている。後世に持ち込まれた大きな凝灰岩の角礫や河原石を含む。

［年代測定］石室外の凝灰岩の崩落土３層のカーボン及び26グリッド下の崩落土中のカーボンで14C年代測定（AMS法）を行ったところ、それぞれ210±30、170±30BPという結果が出た。このことから推測すれば、凝灰岩の角礫は江戸時代後期に持ち込まれたと考えることもできよう。

［平面の形態］長方形か？大分類ではⅢ類。

［天井の形態］軒先線があるドーム形。

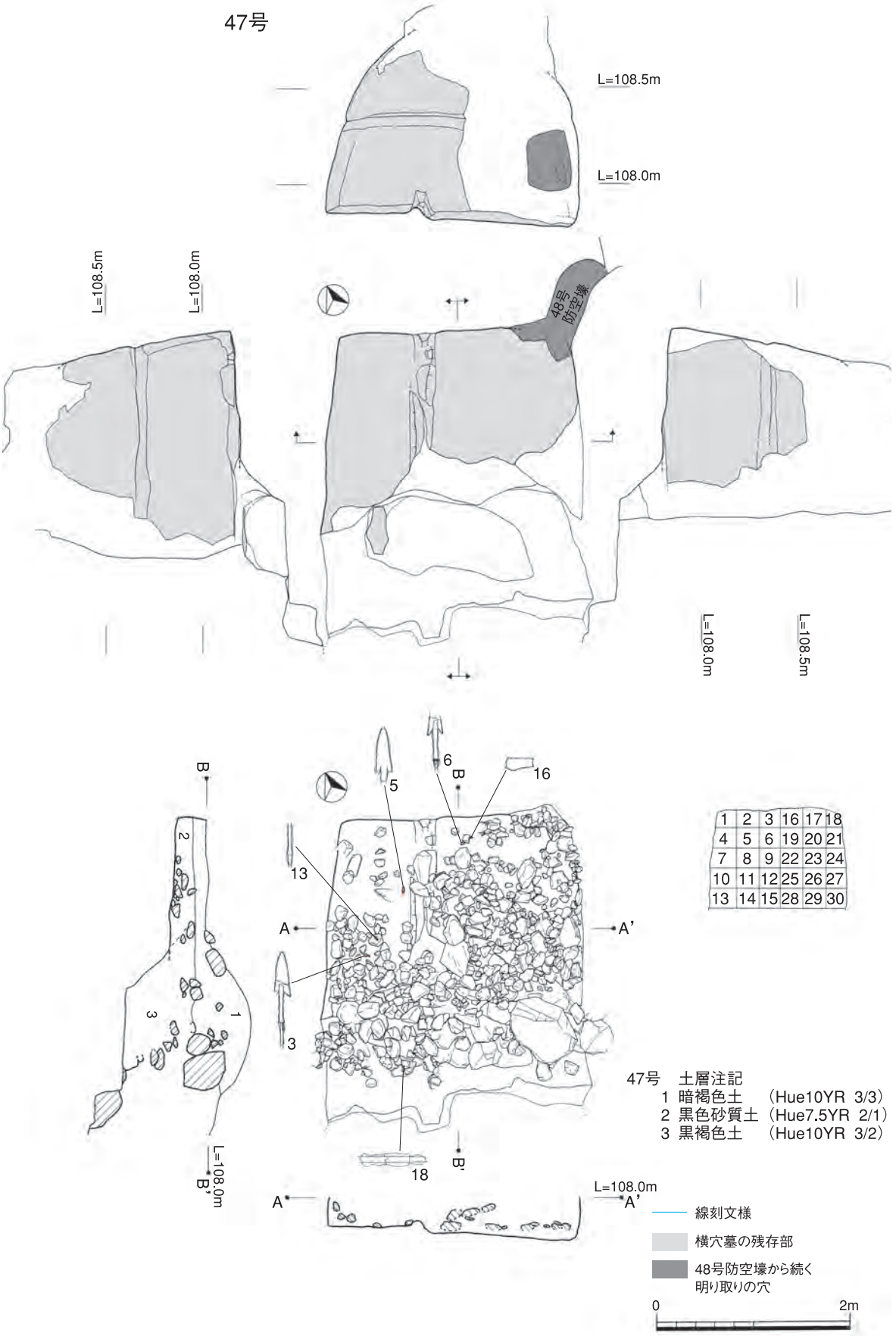
［出土遺物］掘り下げ中に確認した鉄製品が７点、排土のフルイ土の中から鉄製品14点の合計21点の鉄製品が出土している。石室外の１点については、当初鉄釧ではないかと思われたが、両側２ヵ所に径２～３mmの穴があり、きれいな左右対称形であること、内部に木質が残ることから、後世の鉄製品と判断した。ここでは20点の鉄製品を紹介する。９、12、17、18は、床面が崩壊した石室外の遺物であることから完全に元位置から移動している。また、その他の遺物についても元位置から移動している可能性も否定できない。また、３、５、６、13、16、18以外は、排土のフルイ土中から発見した遺物であり、９、12、17を除いて、いずれも２層からの出土である。

３～15は、鉄鏃である。３、６、７は、鏃身から茎部である。いずれも完形ではないが、両刃で両側に返しが見られる。鏃身の断面形態は、ほぼレンズ状に膨らむが、６はやや片側に片寄っている。厚さ約1.5～3mmである。３の鏃身長は、4.5cm、残存頸部長は、3.2～3.5cm、残存茎部0.8～2.3cmである。また、３、６の茎部には、矢柄に巻いた樹皮の痕跡が残存している。４、５、８は、鏃身から頸部である。いずれの鏃身も完形ではないが、3.5～4.6cm残存。５、８は両側に返しがみられるが、４は片方のみに返しがみられる。鏃身の断面形態は、ほぼレンズ状に膨らみ、厚さ約２mmである。９は、頸部の一部である。残存長は3.5cm、幅約４mm、厚さ１～２mmである。10、12、13、14は、頸部から茎部である。残存頸部長は、1.8～3.3cmであり、残存茎部長は、0.7～1.4cmである。10の茎部には、矢柄に巻いた樹皮の痕跡が残存している。11、15は、茎部の一部である。残存長は、2.1～2.3cmで、幅約2.5～3mm、厚さ約１～2.5mmである。

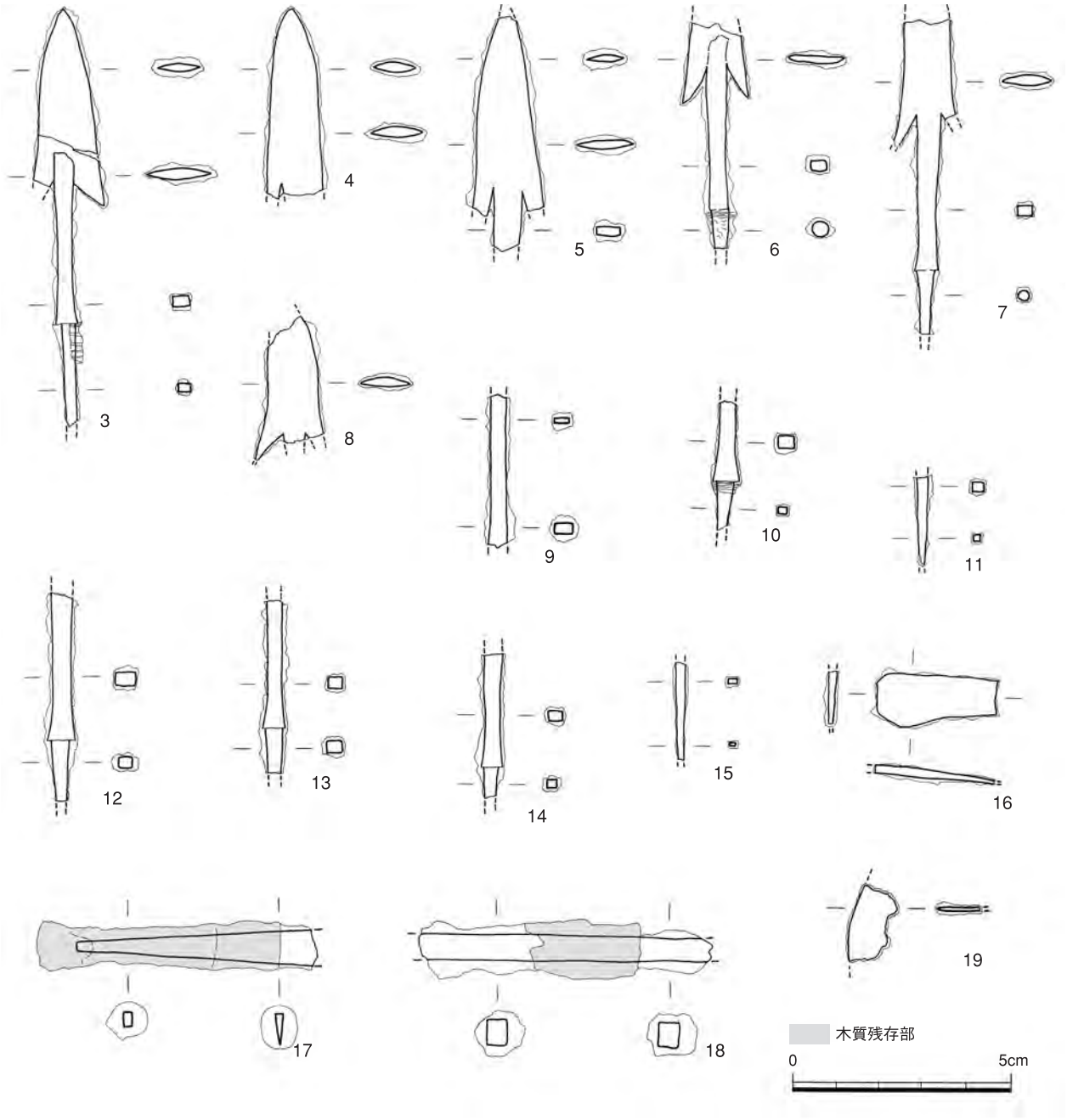
16、19は、不明の鉄片の一部である。いずれも厚さが１～２mmと薄い。

17は、刀子の茎部から刀身部の一部である。茎部には木質部が残存している。茎部長は4.7cm、幅２～７mm、厚さ２mm、残存刀身部長は８mm、幅７～９mm、厚さ２mmである。

18は、刀子の茎部から刀身部の一部と考えられる。茎部の真中にのみ木質部が残存しており、他の鉄製品の可能性も否定できない。



図(Fig)11　47号横穴墓実測図及び出土遺物状況図



図(Fig)12　47号横穴墓出土遺物実測図

残存長6.8cm、幅約６mm、厚さ約4.5mmである。

【51号墓】（図13参照）

［確認位置］東側。標高約111.4ｍ。

［残存状況］1/2以下。崩落及び後世の掘削により屍床部や天井部の一部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。当時の掘削痕跡が残存している。斜め上から斜め下方向に幅約3～4cm、長さ約14～24cmの大きさである。

［主軸方向］N23°E

［玄室規模と状況］幅：196cm、奥行き：160cm～、高さ：166cm～。

［平面の形態］長方形？大分類ではⅠ類か？

［天井の形態］軒先線のないドーム形か？

【52号墓】（図13参照）

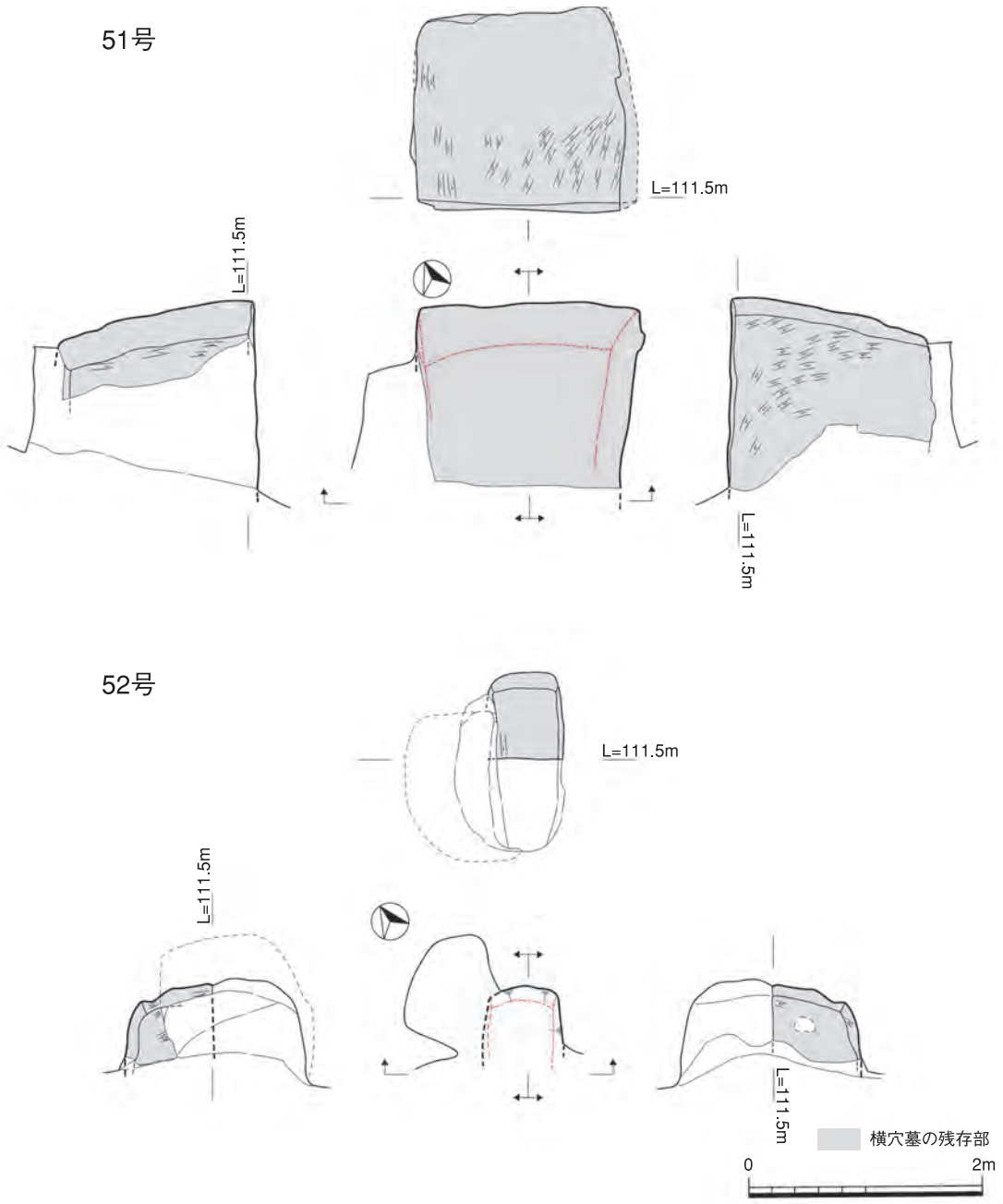
［確認位置］東側。標高約111.5ｍ。

［残存状況］1/3以下。崩落及び後世の掘削により屍床部や天井部の一部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［主軸方向］N33°E

［玄室規模と状況］幅：62cm～、奥行き：60cm～、高さ：76cm。

［平面の形態］小振りの長方形？



図(Fig)13　51,52号横穴墓実測図

［天井の形態］軒先線のないドーム形。

②防空壕として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：４基（８,13,14,15号墓）

【８号墓】（図14参照）

［確認位置］西側。標高約107.3ｍ。

［残存状況］約1/10以下。防空壕の掘削により天井部や屍床部、羨道部や羨門部のほとんどが残存しない。また、仕切線や軒先線の存在は不明である。開口部は判然としないが、羨道部や羨門部が一部残存している可能性が高い。そうであれば、羨門は高さ約67cm、幅約55cm程度である。

［主軸方向］N15°W

［玄室規模と状況］幅：185cm～、奥行き：205cm～、高さ：92cm。石室の床面は左側が一部残存、側面や天井部も一部残存している。

［平面の形態］長方形か？

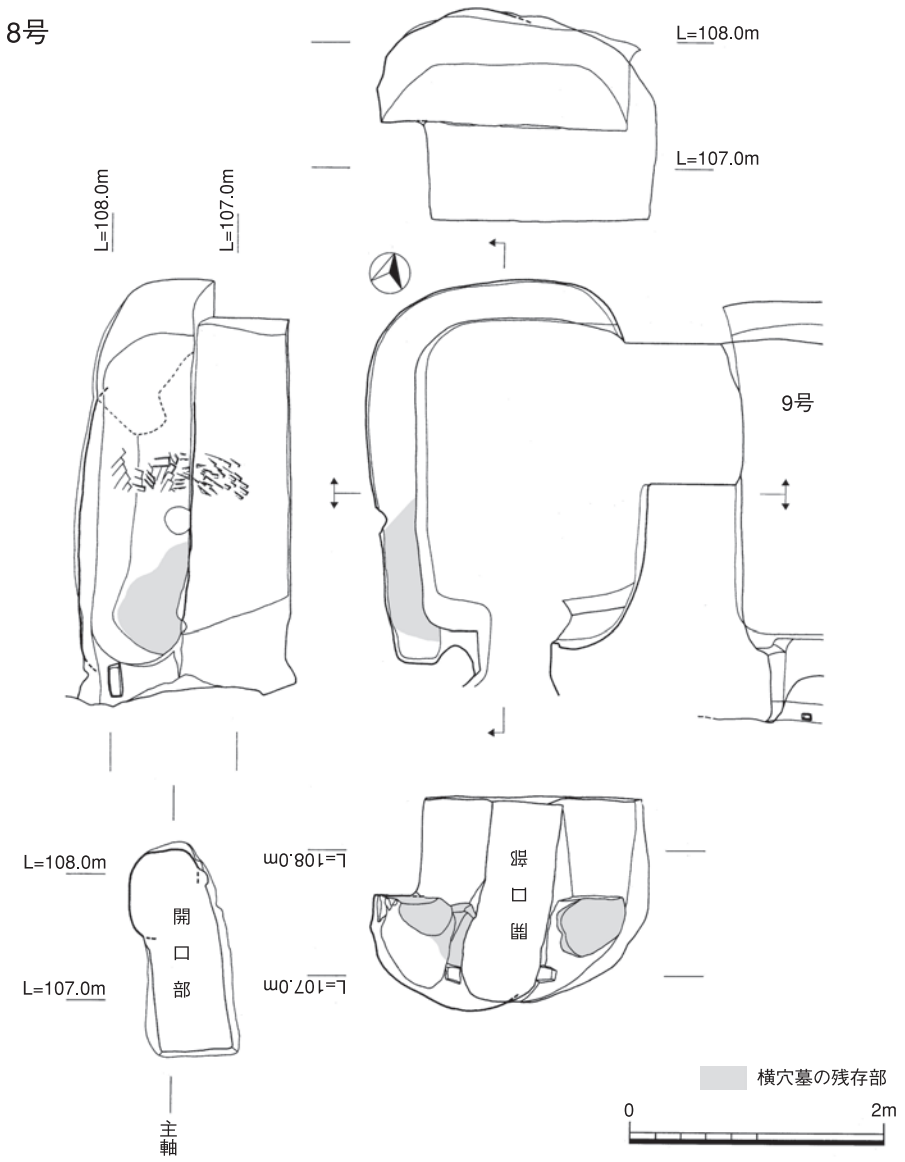
［天井の形態］軒先線のないドーム形。

［出土遺物］なし。

【13号墓】（図15参照）

［確認位置］西側。標高約107.1ｍ。

［残存状況］約3/5。防空壕の掘削により屍床部、



図(Fig)14　8号横穴墓実測図

羨道部や羨門部のほとんどが残存しない。天井部は一部剥落しているが、約半分が残存する。また、側面は崩落や防空壕の掘削により約１/3が失われている。

［主軸方向］N7°E

［玄室規模と状況］幅：270cm、奥行き：260cm、高さ：154cm～。仕切は、存在しないと考えられる。

［平面の形態］ほぼ正方形。大分類ではⅠ類。

［天井の形態］軒先線のないドーム形。

［出土遺物］なし。

【14号墓】（図15参照）

［確認位置］西側。標高約107ｍ。

［残存状況］約2/3。防空壕の掘削により屍床部、羨道部や羨門部のほとんどが残存しない。天井部はほぼ全面が残存する。また、側面は崩落や防空壕の掘削により約１/3が失われている。

［主軸方向］N33°E

［玄室規模と状況］幅：262cm、奥行き：232cm～、高さ：130cm～。仕切は、存在しないと考えられる。

［平面の形態］ほぼ正方形。大分類ではⅠ類。

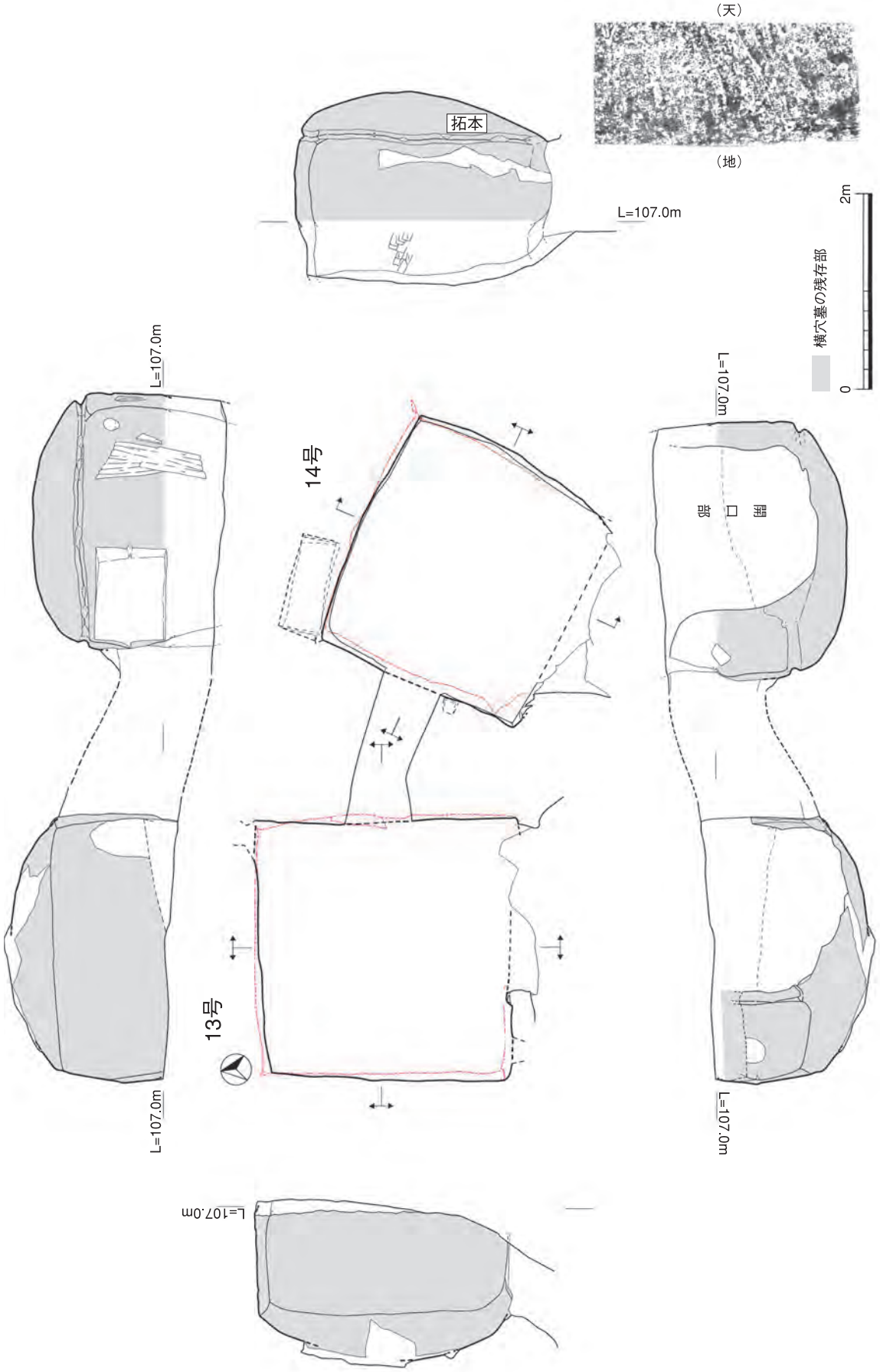
［天井の形態］軒先線のあるドーム形。

［出土遺物］なし。

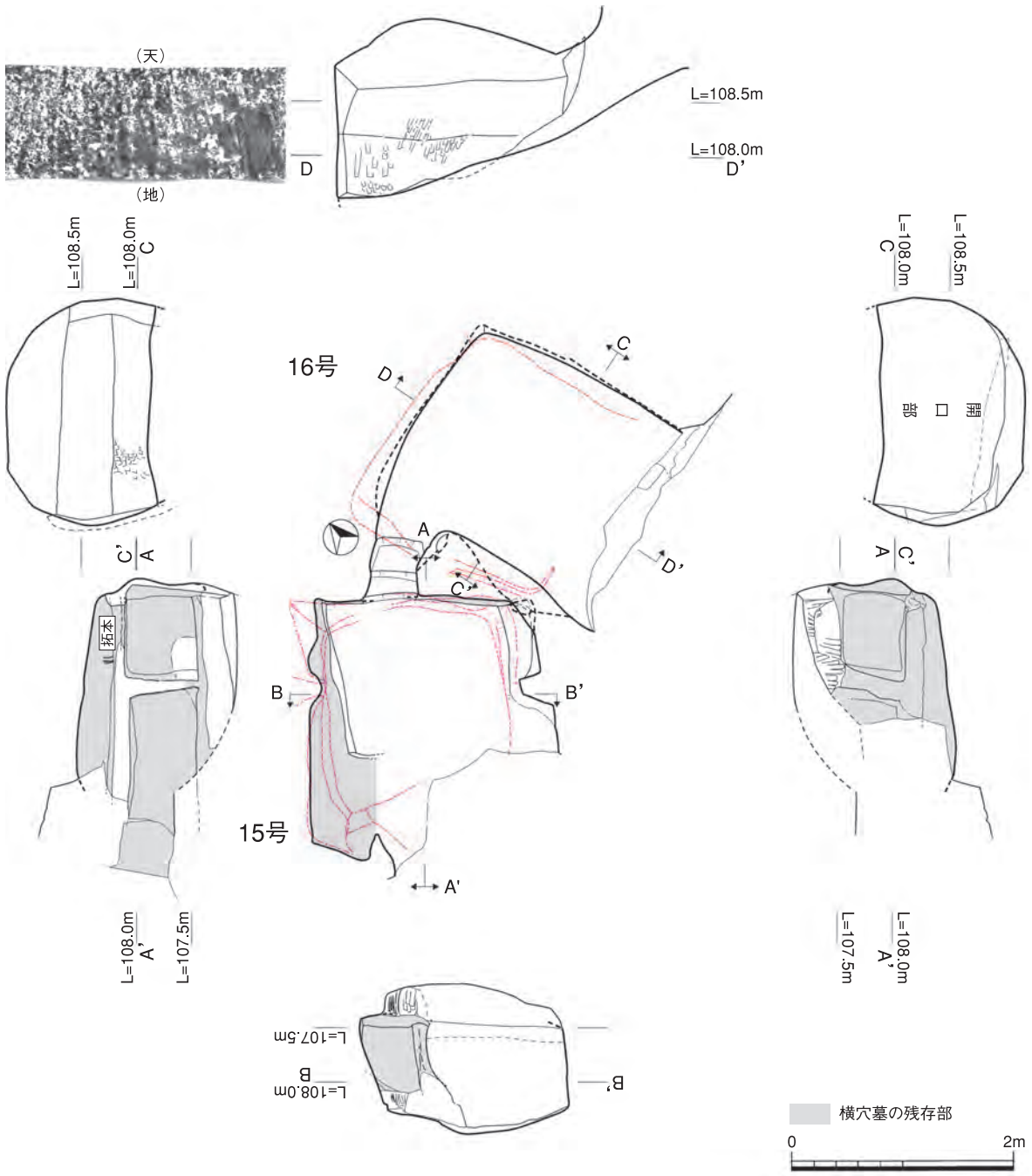
【15号墓】（図16参照）

［確認位置］西側。標高約107.4ｍ。

［残存状況］約2/3。防空壕の掘削により屍床部、羨道部や羨門部のほとんどが残存しない。天



図(Fig)15　13,14号横穴墓実測図



図(Fig)16　15.16号横穴墓実測図

井部はほぼ全面が残存する。また、側面は崩落や防空壕の掘削により約１/3が失われている。

［主軸方向］ N39°E

［玄室規模と状況］ 幅：240cm、奥行き：230cm、高さ：100cm。仕切が２つ確認されるが、もう１つ存在した可能性が高い。よって３体の埋葬が可能である。

［平面の形態］ 大分類ではⅣ類。

［天井の形態］ 軒先線のあるドーム形。

［出土遺物］ なし。

③防空壕の通路として改変されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：２基

（12【11号壕の第二通路】,48号墓）

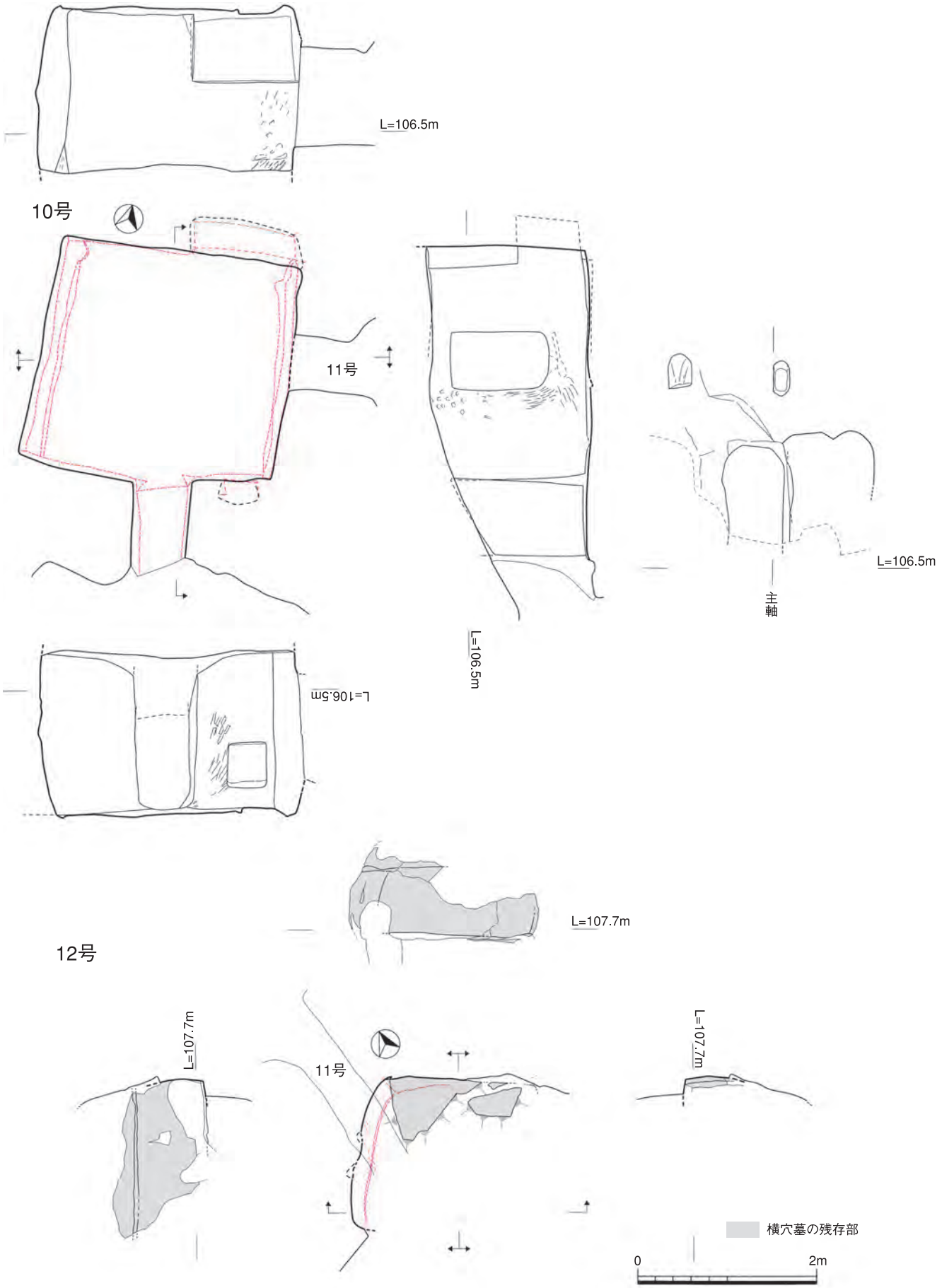
【12号墓】（図17参照）

［確認位置］ 西側。標高約107.6ｍ。

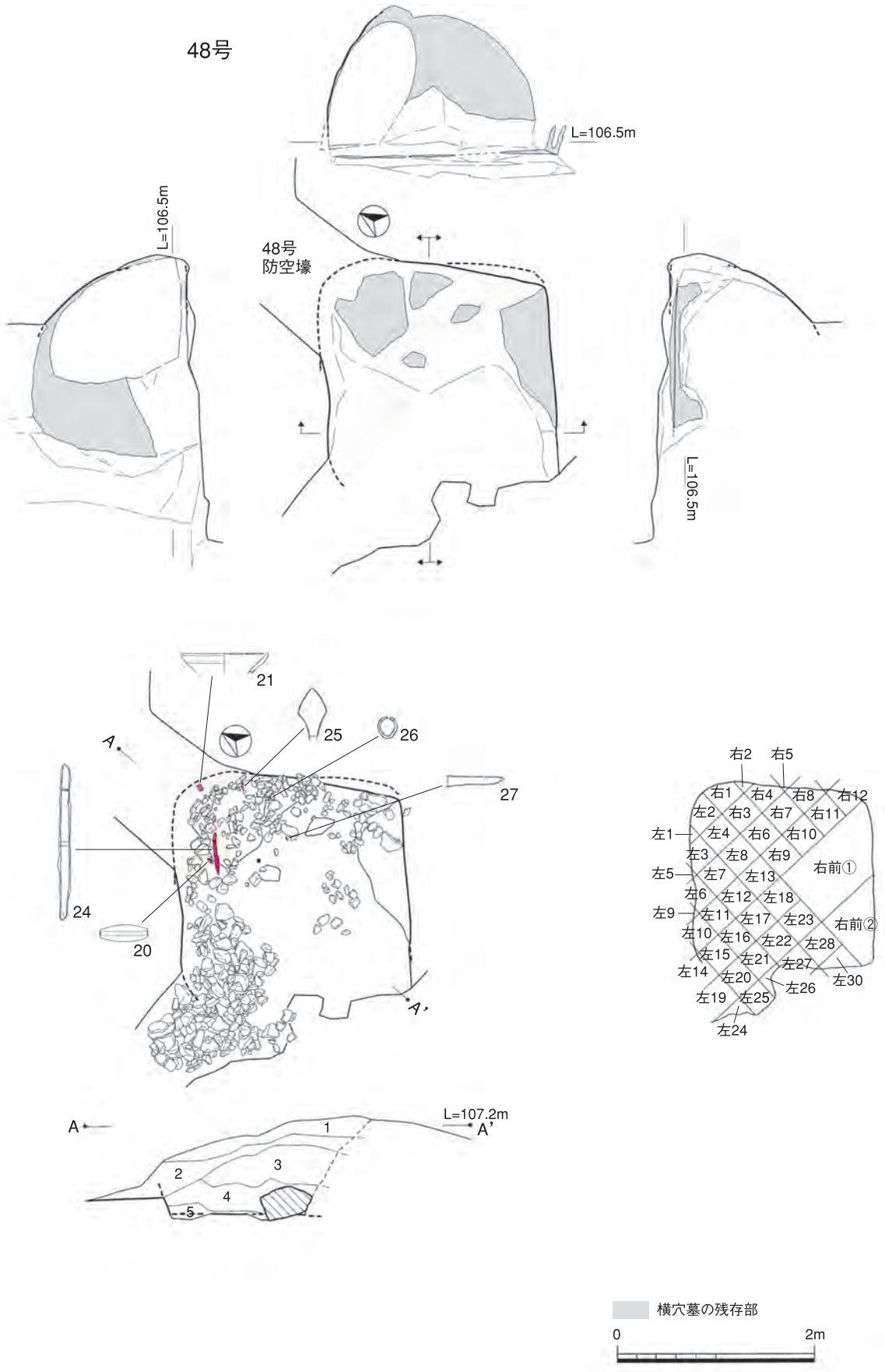
［残存状況］ 約1/5。崩落や防空壕の掘削により屍床部のほとんど、天井部、羨道部や羨門部の全てが残存しない。側面は約1/3が残存する。

［主軸方向］ N25°E

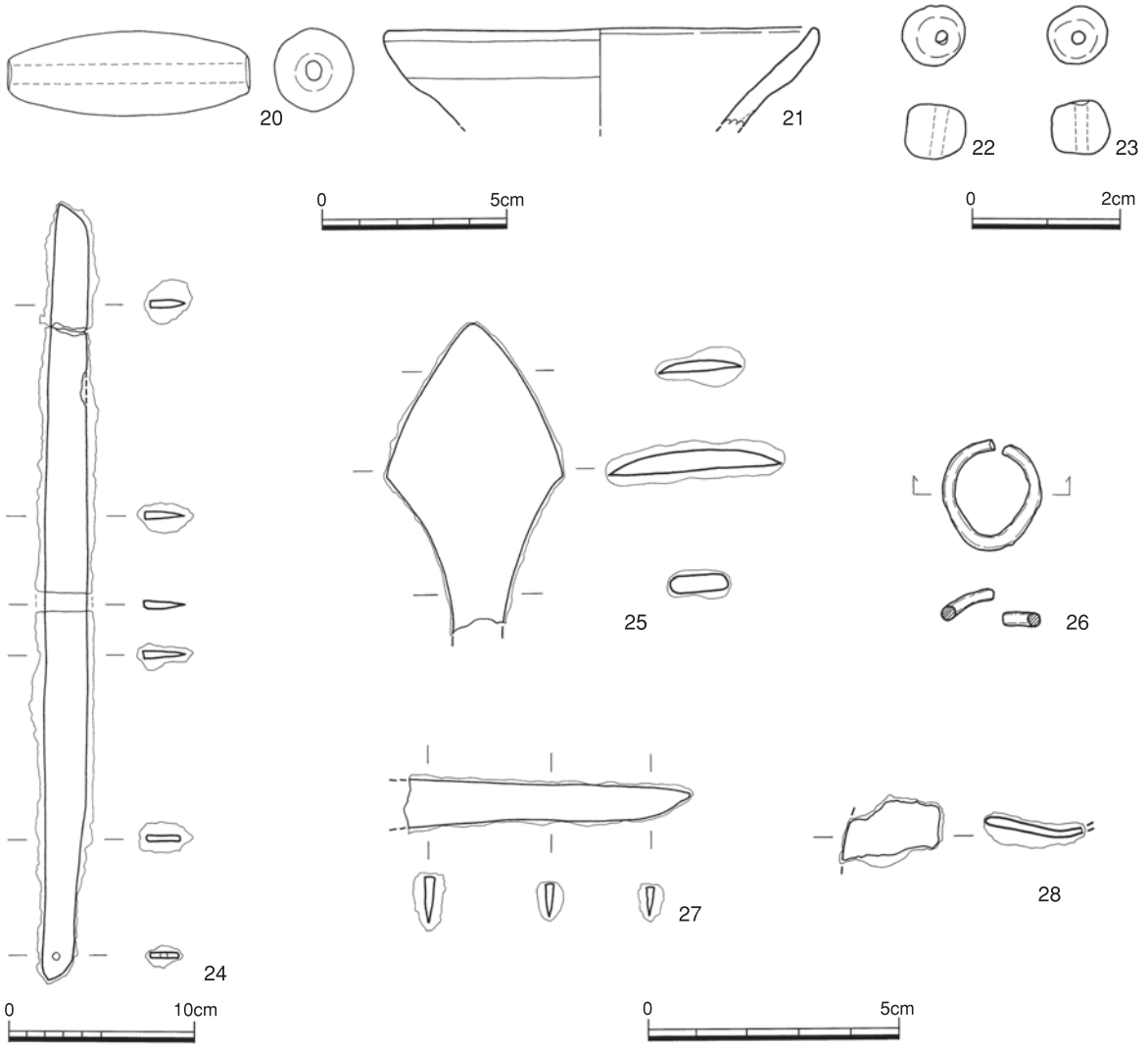
［玄室規模と状況］ 幅：210cm～、奥行き：



図(Fig)17　10,12号横穴墓実測図



図(Fig)18　48号横穴実測図及び出土遺物状況図



図(Fig)19　48号横穴墓出土遺物実測図

172cm～、高さ：105cm～。仕切は、存在しないと考えられる。

［**平面の形態**］正方形？大分類ではⅠ類か？

［**天井の形態**］軒先線のあるドーム形？

［**出土遺物**］なし。

【48号墓】（図18参照）

［**確認位置**］中央部。標高約106.4ｍ。

［**残存状況**］約1/3。崩落及び後世の掘削により天井部や屍床部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。

［**主軸方向**］N59°E

［**玄室規模と状況**］幅：232cm、奥行き：200cm～、高さ：160cm～。石室内に最大厚約70～100cmの堆積土があり、７号墓、47号墓と共に掘り下げが実施できた横穴墓である。石室内を約40cm毎に区切って１～30のグリッドを設けて掘り下げを行い、排土をふるいにかけて微細遺物の見落としがないようにした。

床面には拳大から両拳大の丸みを帯びた河原石が敷き詰められていた。河原石は、おそらく下層にある人吉層あるいは球磨川から採取したものを敷き詰めたものであろう。床面に置かれた河原石は、奥壁に近い部分は、当時のものがほぼそのまま残存しているものと考えられる。このことは、遺物の出土状況や７号墓、47号墓にも河原石が敷き詰められていたことからも窺える。また、床面は地下水により、そのほとんどが侵食されていたが、ほぼ正方形のプランが確認された。

しかし、南西側の入り口部分は47号墓と同様に河原石や凝灰岩の角礫が敷き詰められており、特に凝灰岩の角礫は、後世に付近の崖

下で採取したものを敷き詰めたものであろう。

仕切や軒先線は確認されなかった。

奥壁と左側壁の隅は、防空壕の入り口となっている。

47号墓の堆積土は５層に分層される。

１層及び２層：表土及び崩落土。

３層及び４層：。凝灰岩の崩落土が主体で所々に凝灰岩の角礫が混じる。

４層：当時のままの覆土。プライマリーと考えられる。

［年代測定］石室内の８グリッドの礫と同レベル（４層下部）にあったカーボンで14C年代測定（AMS法）を行ったところ、320±30BPという結果が出た。このことから推測すれば、江戸時代前期に凝灰岩の角礫が持ち込まれたり、何らかの撹乱等が起きたと考えることができよう。

［平面の形態］長方形か？大分類ではⅠ類。

［天井の形態］軒先線のないドーム形か？

［出土遺物］掘り下げ中に確認した６点、排土のフルイ土の中から出土した３点の合計９点の遺物が出土している。ここでは９点の遺物を紹介する。

22、23、28以外は床面の５層から出土している。元位置を保っていると考えられることから、被葬者の１人の頭位は北東方向を向けて埋葬されたと推定される。

20は、土錘である。長さ6.5cm、幅2.3cm、厚さ2.1cm、穿孔径0.5cmである。

21は、土師器の壺の口縁部である。復元口径は、11.8cm、残存高は、2.6cmである。

22と23は土玉である。それぞれ左５グリッドの床面と右２グリッドの床面のフルイ土の中から出土した。径約7.5～8.5mm、厚さ7～8.5mm、穿孔径1.5mmである。

24は、鉄製の直刀である。全長42cm、最大幅2.3cm、最大厚4mm、重量299ｇである。柄部分に径約４mmの目釘穴が確認される。

25は、鶏頭符箋鏃の鏃身部である。残存長6.3cm、幅3.6cm、最大厚４mmである。断面形態は半月状になっている。

26は、耳環である。福岡市埋蔵文化財センターの比佐氏、片多氏の分析により、銅製でありメッキはないことが判明した。径約20～22mm、厚さ2.5mm、重量1.4ｇである。

27は、鉄製の刀子の刀身部である。残存長5.8cm、最大幅1.0cm、厚さ0.2cmである。

28は、不明の鉄片の一部である。残存長1.5cm、残存幅1.9cm、最大厚0.15cmである。

④お堂として転用されたが、横穴墓の痕跡が残存するもの：１基（46号墓）

【46号墓】（図10参照）

［確認位置］西側。標高約107.2ｍ。

［残存状況］約1/4。崩落、侵食や後世の掘削により屍床部のほとんど、天井部の大半、羨道部や羨門部の全てが残存しない。奥壁や側面は約1/2が残存する。

［主軸方向］Ｎ14°Ｅ

［玄室規模と状況］幅：259cm、奥行き：135cm～、高さ：118cm～。仕切は、存在しないと考えられる。

［平面の形態］正方形か？大分類ではⅠ類。

［天井の形態］軒先線のないドーム形？

［出土遺物］なし。

⑤元々は横穴墓と考えられるが、防空壕築造のために全面にわたり掘削を受けて、プランのみ残存するもの：２基（10,16号墓）

【10号墓】（図17参照）

［確認位置］西側。標高約106.5ｍ。

［残存状況］防空壕により全て掘削が及んでいる。平面形が横穴墓と酷似していることから、横穴墓であった可能性が高いと判断した。断面形態も全て掘削が及んでおり、復元不可能である。

［主軸方向］Ｎ15°Ｗ

［推定される玄室規模］幅：322cm以下、奥行き：280cm以下、高さ：183cm以下。

［平面の形態］正方形か長方形？

［天井の形態］不明。

［出土遺物］なし。

【16号墓】（図16参照）

［確認位置］西側。標高約108.2ｍ。

［**残存状況**］防空壕により全て掘削が及んでいる。平面形と断面形が横穴墓と酷似していることから、横穴墓であった可能性が高いと判断した。

［**主軸方向**］Ｎ17°Ｗ

［**推定される玄室規模**］幅：188cm以下、奥行き：210cm前後、高さ：135cm以下。

［**平面の形態**］正方形か？

［**天井の形態**］ドーム形か？

［**出土遺物**］なし。

（２）防空壕：12基

①純粋な防空壕：４基（９,11,17,49号壕）

【９号壕】（図20参照）

［**確認位置**］西側。標高約106.4ｍ。

［**入口・壕内部の方位**］Ｎ12°Ｗ・Ｎ75°Ｅ

［**壕の規模と状況**］壕は、幅：221cm、奥行き：278cm、高さ：165cmである。形状が８号壕と酷似して、２段式になっている。断面形態は、上段がかまぼこ形で、下段は棚状に周囲を約30cm残して、約80cm垂直に掘り下げている形状である。上段のかまぼこ形は、８号壕と同様に元々横穴墓であった可能性も捨てきれないが、平面形で見るといびつな形状になることや、出入口の位置が元々羨門であったとするならば、中央に位置していないことから横穴墓であった可能性が低いと考えた。掘削痕跡も全て新しいので、おそらく８号壕に形状を似せて掘削したものと考えられる。掘削痕跡は左斜め上から右斜め下方向へ多数確認でき、少なくとも２種類の工具を使用したと考えられる。１種類はおそらく鍬であろう。

出入口は、幅：60cm、奥行き：68cm、高さ：130cm、通路は、８号壕へ続いており、幅：110cm、奥行き：70～80cm、高さ：132cmである。

【11号壕】（図21参照）

［**確認位置**］西側。標高約106.3ｍ。

［**入口・壕内部の方位**］Ｎ15°Ｗ・Ｎ85°Ｅ

［**壕の規模と状況**］壕は、幅：330cm、奥行き：135cm、高さ：165cmである。形状は、断面形態が楕円形で、平面形は台形状を呈する。

出入口は２ヵ所あり、幅：50～60cm、奥行き：210～230cm、高さ：130～140cmである。通路は、10号壕へ続いており、幅：60cm、奥行き：60～95cm、高さ：110cmである。東側の出入口は12号墓を壊して作られている。また、西側の出入口の上には３ヵ所、東側の出入口の上には１ヵ所の穴があるが、防空壕の出入口を覆う施設に伴うものと考えられる。

【17号壕】（図22参照）

［**確認位置**］西側。標高約108.7ｍ。

［**入口・壕内部の方位**］Ｎ11°Ｗ・Ｎ79°Ｅ

［**壕の規模と状況**］壕は、幅：520cm、奥行き：275cm、高さ：90～150cmである。形状は、断面形態が楕円形で、平面形は台形状を呈し、11号壕に酷似する。

出入口も２ヵ所あり、幅：70～80cm、奥行き：160～200cm、高さ：105～145cmである。他の防空壕に続く通路はない。東側の出入口の形状は上段が２段になっており、おそらく防空壕の出入口を覆う施設に伴うものと考えられる。掘削痕跡は、幅3.5cm、長さ約５～８cmで上から下方向へ多数確認できる。おそらく仕上げの痕跡で手鍬かチョウナ状の工具で掘削されたものと考えられる。

聞き取り調査により、この防空壕は戦時中、段村弥太郎氏（体が非常に大きい方）が掘られたことが判明した。

【49号壕】（図23参照）

［**確認位置**］西側。標高約108.0ｍ。

［**入口・壕内部の方位**］Ｎ31°Ｅ・Ｎ35°Ｗ

［**壕の規模と状況**］壕は、幅：65cm、奥行き：213cm、高さ：135cmである。形状は、断面形がかまぼこ形で、平面形は長方形を呈する。

出入口は、幅：70cm、奥行き：220cm、高さ：125cmである。他の防空壕に続く通路はない。掘削痕跡は、幅３～3.5cm、長さ約５～８cmで上から下方向へ多数確認できる。17号壕と同様な工具による掘削だと考えられる。この横穴墓群の前にお住まいの中矢野コナミ氏（大正８年11月4日生まれ：写真115参照）の証言によれば、空襲警報が鳴る度にこの防空壕に入った記憶があるそうだ。当時夫の修氏（大正４年生まれ）は戦争に行かれており、残さ

れた家族が利用されたということである。

②横穴墓を掘削し、防空壕として転用したもの：4基（8,13,14,15号壕）

【8号壕】（図20参照）

［確認位置］西側。標高約106.6ｍ。

［入口・壕内部の方位］N15°W・N75°E

［壕の規模と状況］壕は、幅：205cm、奥行き：285cm、高さ：170cmである。形状が9号壕と酷似して、2段式になっている。断面形態は、上段がかまぼこ形で、下段は棚状に周囲を約30～40cm残して、約80cm垂直に掘り下げてある形状である。上段のかまぼこ形は、元々横穴墓であった形状をうまく利用して、更に新しい掘削が加えてあり、横穴墓造営時の掘削痕跡の上に新しい掘削痕跡が見られる。

出入口は、幅：55cm、奥行き：50cm、高さ：165cm、通路は、9号壕へ続いており、幅：110cm、奥行き：70～80cm、高さ：132cmである。また、7号墓へ径約20cmの穴が開いており防空壕掘削の際に開けられた明り取りの穴と考えられる。出入口の上部には左右に2ヵ所の穴が開けられているが、防空壕の出入口を覆う施設に伴うものであろう。

【13号壕】（図24参照）

［確認位置］西側。標高約106.8ｍ。

［入口・壕内部の方位］N7°E・N62°W

［壕の規模と状況］壕は、幅：265cm、奥行き：250cm、高さ：180cm以上である。床面を除き、横穴の形状をほぼそのまま生かして防空壕にしている。床面の掘削は少なくとも20cm以上に及んでいる。断面形態は、上段はドーム形で、平面形はほぼ正方形である。

出入口は崩落しており、現状での幅：170cm、奥行き：30cm、高さ：140cm、通路は、14号壕へ続いており、幅：55～65cm、奥行き：180cm、高さ：90～120cmである。また、岩盤へ向かって幅約20cm、高さ55cm、長さ70cm以上の穴が開いている。何のために開けられたなのかは不明である。天上部は崩落が激しい。

【14号壕】（図24参照）

［確認位置］西側。標高約106.4ｍ。

［入口・壕内部の方位］N33°E・N62°W

［壕の規模と状況］壕は、幅：240cm、奥行き：280cm、高さ：195cm以上である。床面と棚を除き、横穴の形状をほぼそのまま生かして防空壕にしている。床面の掘削は少なくとも60cm以上に及んでいる。断面形態は、上段はドーム形で、平面形はほぼ正方形である。

出入口は崩落しており、現状での幅：160cm、奥行き：70cm、高さ：160cm、通路は、13号壕へ続いており、幅：55～65 cm、奥行き：186 cm、高さ：90～120cmである。棚は、幅：100cm、奥行き：45cm、高さ：75cmの大きさであり、板を差し込み2段になるような工夫が見られる。

聞き取り調査（中間靖氏）により、この防空壕は戦時中、段村亀太郎氏（左官屋さんだった方）が掘られたことが判明した。写真112の中間靖氏（昭和4年9月5日生まれ）の奥さんであるハルエ氏（昭和8年3月22日生まれ）が小学校6年生の頃、空襲警報が鳴る度にこの防空壕に入られた経験があるということである。近くの外山病院のおじいちゃんやおばあちゃんも入られたという証言を得た。また、防空壕の出入口については、掘った土を壕の出入口の前に土塁状に置いた後、板を立てかけて出入口をふさいだということである。

【15号壕】（図25参照）

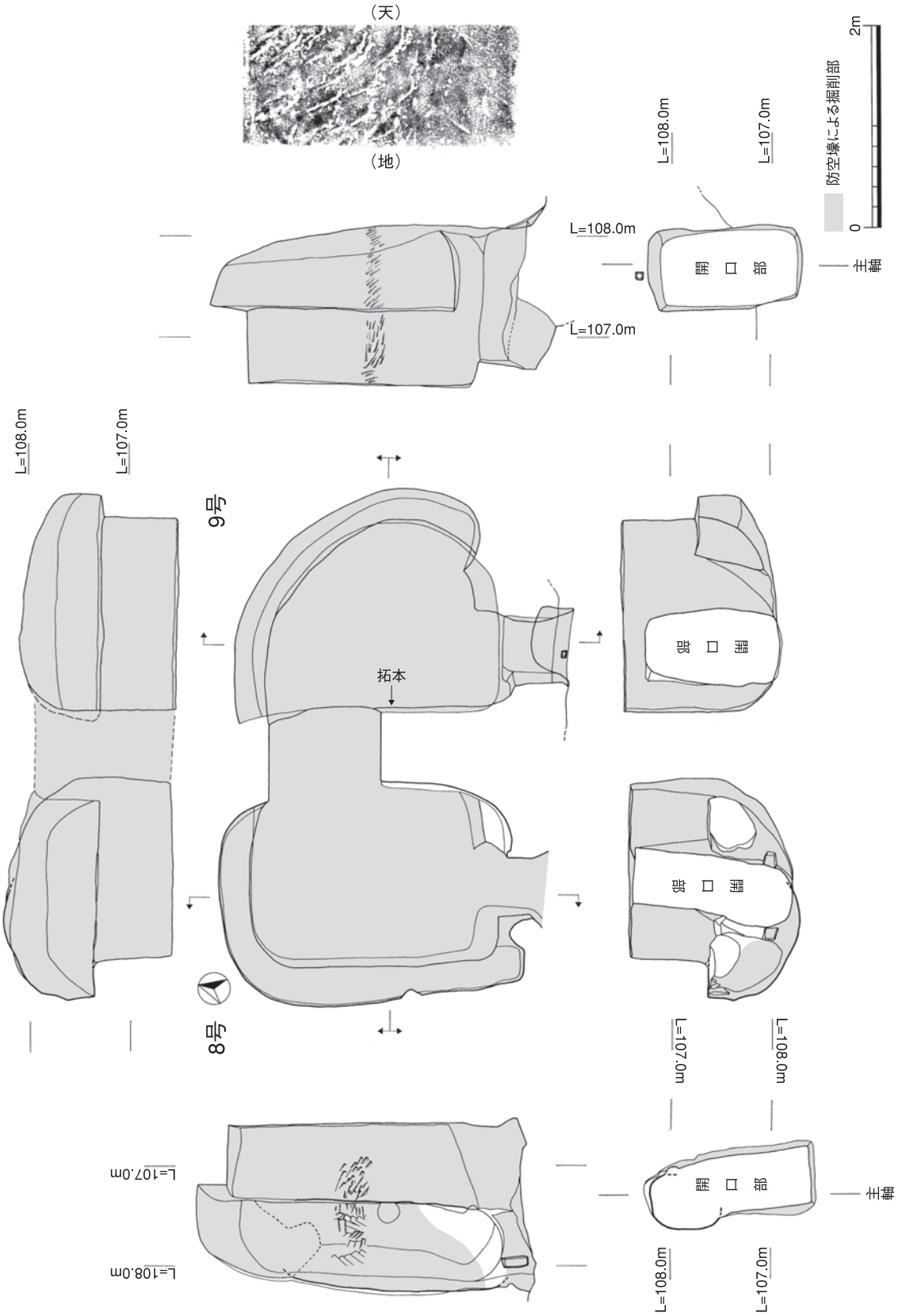
［確認位置］西側。標高約107.1ｍ。

［入口・壕内部の方位］N39°E・N56°E

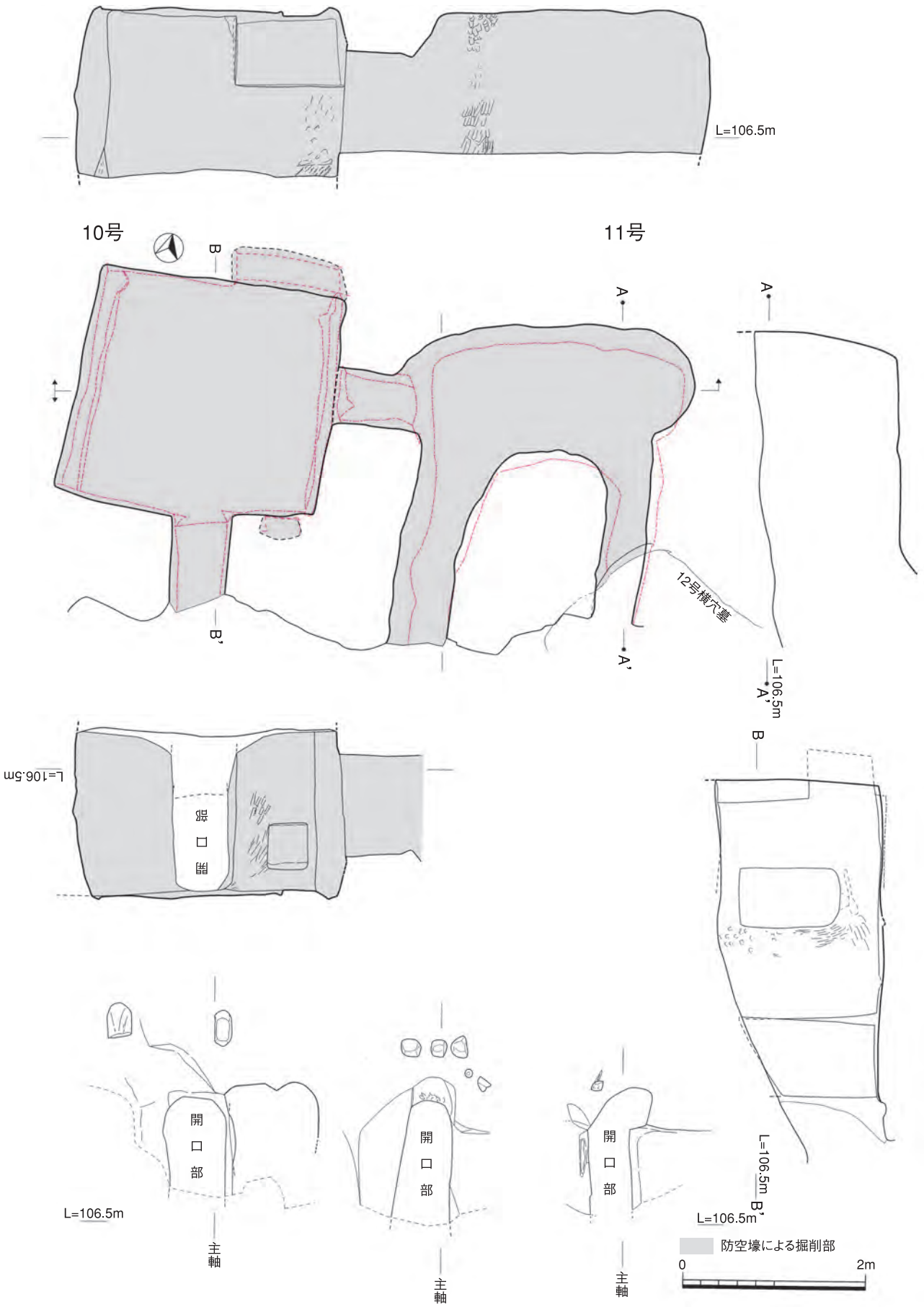
［壕の規模と状況］壕は、幅：230cm、奥行き：245cm、高さ：140cmである。床面と一部の奥壁の一部を除き、横穴の形状をほぼそのまま生かして防空壕にしている。床面の掘削は高さ約142cm、幅約155cm、深さ約45cmの範囲である。

出入口は崩落して開口しており、現状での幅：127cm、奥行き：42cm、高さ：100cm、通路は、16号壕へ3段の階段となって続いており、幅：50cm、奥行き：120cm、高さ：90cmである。

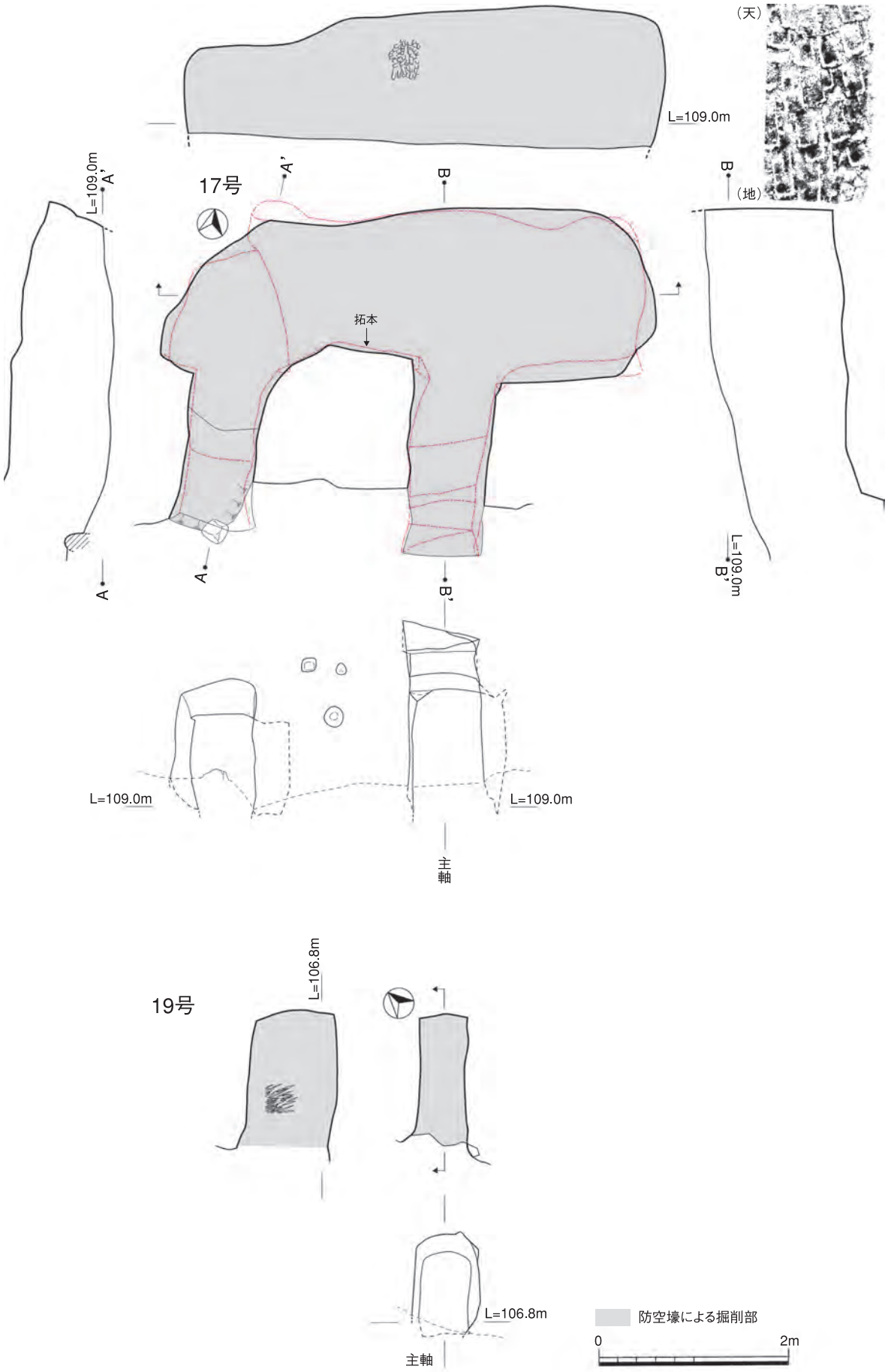
③横穴墓を掘削し、防空壕の出入口として利用しているもの：1（2）基（11号壕の東側出入口【12



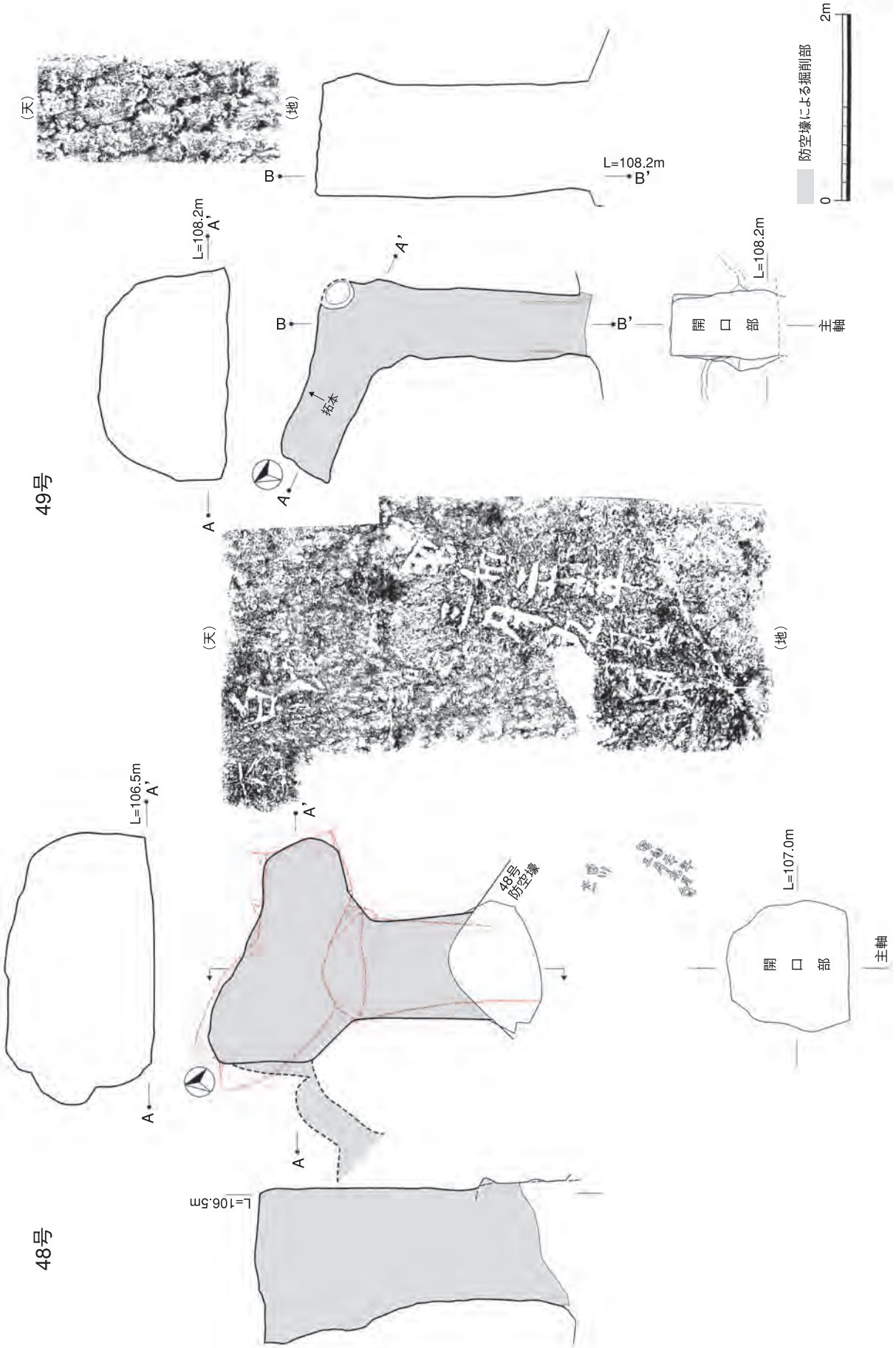
図(Fig)20　8,9号防空壕実測図



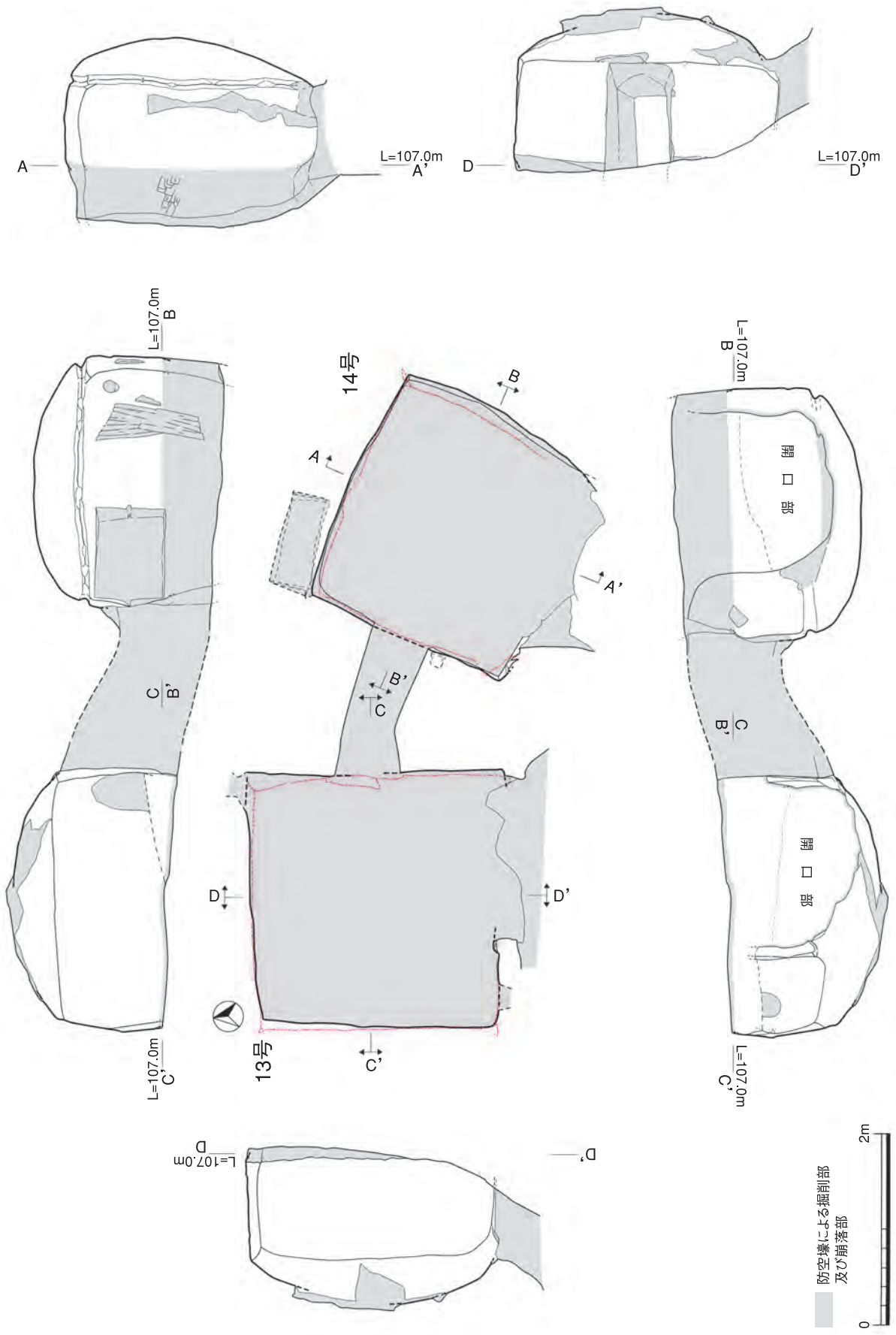
図(Fig)21　10,11号防空壕実測図



図(Fig)22　17,19号防空壕実測図



図(Fig)23　48,49号防空壕実測図



図(Fig)24　13,14号防空壕実測図

号墓】,48号壕）

【11号壕の東側出入口】（図21参照）

［確認位置］西側。標高約106.3ｍ。

［入口・壕内部の方位］N15°W・N85°E

［東側出入口の規模と状況］東側の出入口は12号墓を壊して作られており、幅：50cm、奥行き210cm、高さ：135cmである。また、東側出入口の上には１ヵ所の穴があるが、防空壕の出入口を覆う施設に伴うものと考えられる。

【48号壕】（図23参照）

［確認位置］西側。標高約106.5ｍ。

［入口・壕内部の方位］N10°E・N80°W

［壕の規模と状況］壕は、48号墓の左側壁と奥壁の部分を壊して作られており、出入口となっている。大きさは、幅：90～130cm、奥行き：260cm、高さ：165cmである。形状は、断面と平面形はいびつな楕円状を呈する。

出入口は、幅：140cm、奥行き：192cm、高さ：130cmである。通路はないが、47号墓へ続く明り取りの穴が見られる。この出入口の上約140cmの所に凝灰岩に「白川太一　昭和二十年三月九日自」と刻まれた文字が確認された。防空壕を掘った記念に刻まれたものであろう。白川太一氏とは、中間靖氏の父親である。中間氏の証言によると当時中間氏も一緒にこの防空壕を掘られたそうだ。休みの日に「ツルハシ」等で掘削を行い、完成後は空襲警報が鳴れば、１日に２、３回はこの防空壕に入られたという。床には藁等を敷いて寝る準備もしてあったそうだ。

④元々は横穴墓だったと考えられるが防空壕としての掘削が全てにわたっているもの：２基（10,16号墓）

【10号壕】（図21参照）

［確認位置］西側。標高約106.1ｍ。

［入口・壕内部の方位］N15°W・N85°E

［壕の規模と状況］壕は、幅：280cm、奥行き：265cm、高さ：180cm以上である。全ての面に新しい防空壕築造時の加工痕跡がみられるが、平面の形状から元々は横穴墓であったと推察される。

出入口は崩落しており、現状での幅：60～70cm、奥行き：100cm、高さ：150cm以上、通路は、11号壕へ続いており、幅：60cm、奥行き：60～95cm、高さ：110cmである。また、作り付けの棚が２つ確認される。1つは北側の右隅約１ｍの場所に幅：110cm、奥行き：45cm、高さ：80cm、もう１つは南側の左隅約1ｍの場所に幅：45cm、奥行き：25cm、高さ：50cmの大きさである。

【16号壕】（図25参照）

［確認位置］西側。標高約107.8ｍ。

［入口・壕内部の方位］N17°W・N56°E

［壕の規模と状況］壕は、幅：188cm、奥行き：210cm、高さ：135cmである。全ての面に新しい防空壕築造時の加工痕跡がみられるが、平面と断面の形状から元々は横穴墓であったと推察される。

出入口は崩落して開口しており、現状での幅：195cm、奥行き：30cm、高さ：135cm以上、通路は、15号壕へ３段の階段となって続いており、幅：50cm、奥行き：120cm、高さ：90cmである。また、出入口の外面上40～230cm上には約50ヵ所の穴が開いていた。全面苔に覆われていたので清掃したところ、径約5～30cmの穴が集中して確認された。この横穴墓群の上は西南戦争時「中神の戦い」の舞台となった激戦地の近くに位置していることや薩軍が馬を隠したという伝承が残る横穴墓（24号墓）が存在することなどから、この約50ヵ所の穴は、砲弾の跡である可能性が考えられる。しかし、穴の中では砲弾を発見することはできなかった。作業員さんの話では小さい頃、この周辺で西南戦争で使われた鉄砲の弾を拾ったことがあると言われる方がおられた。

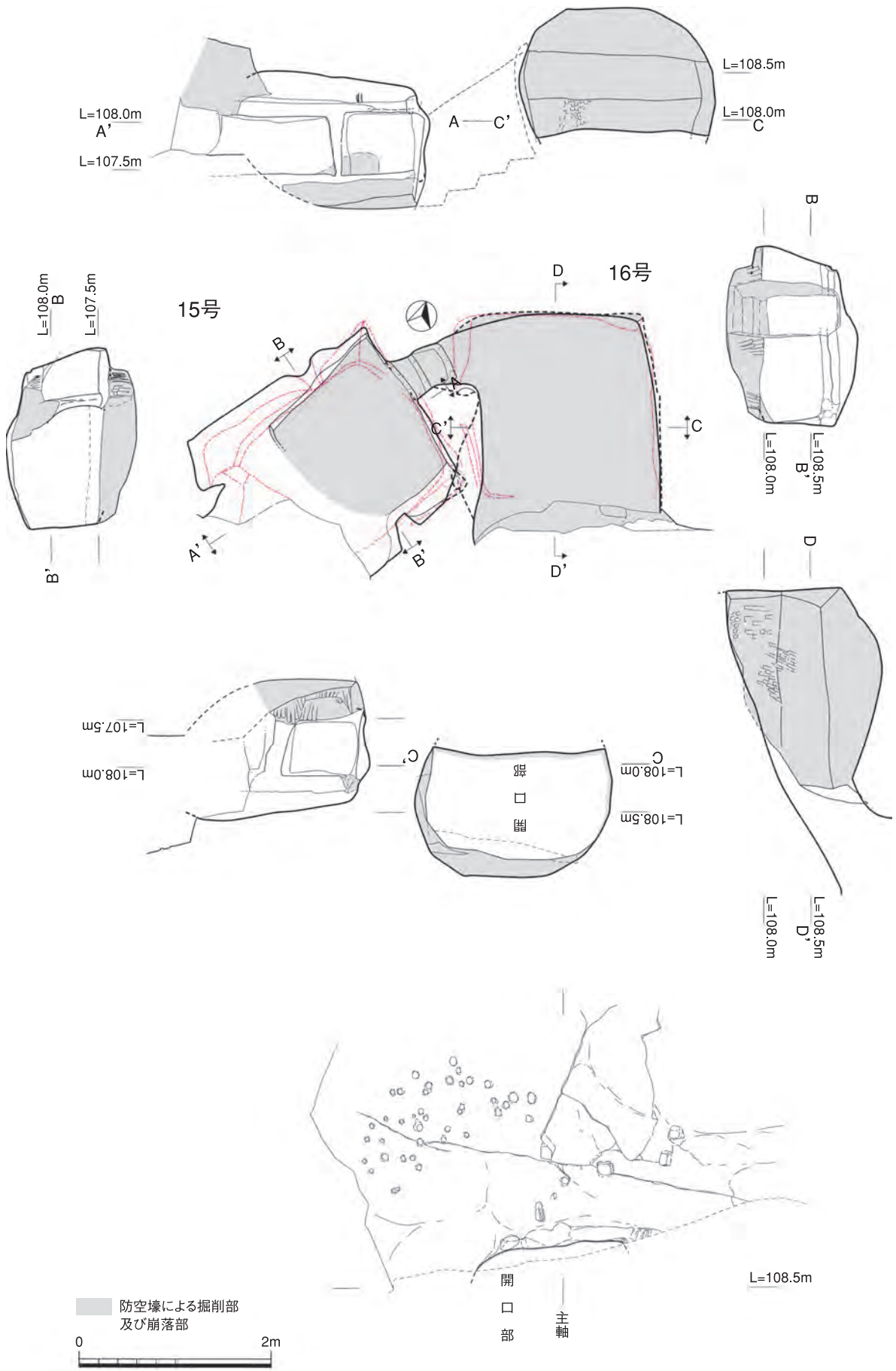
⑤防空壕の入り口部分のみの掘りかけ：1基（19号壕）

【19号壕】（図22参照）

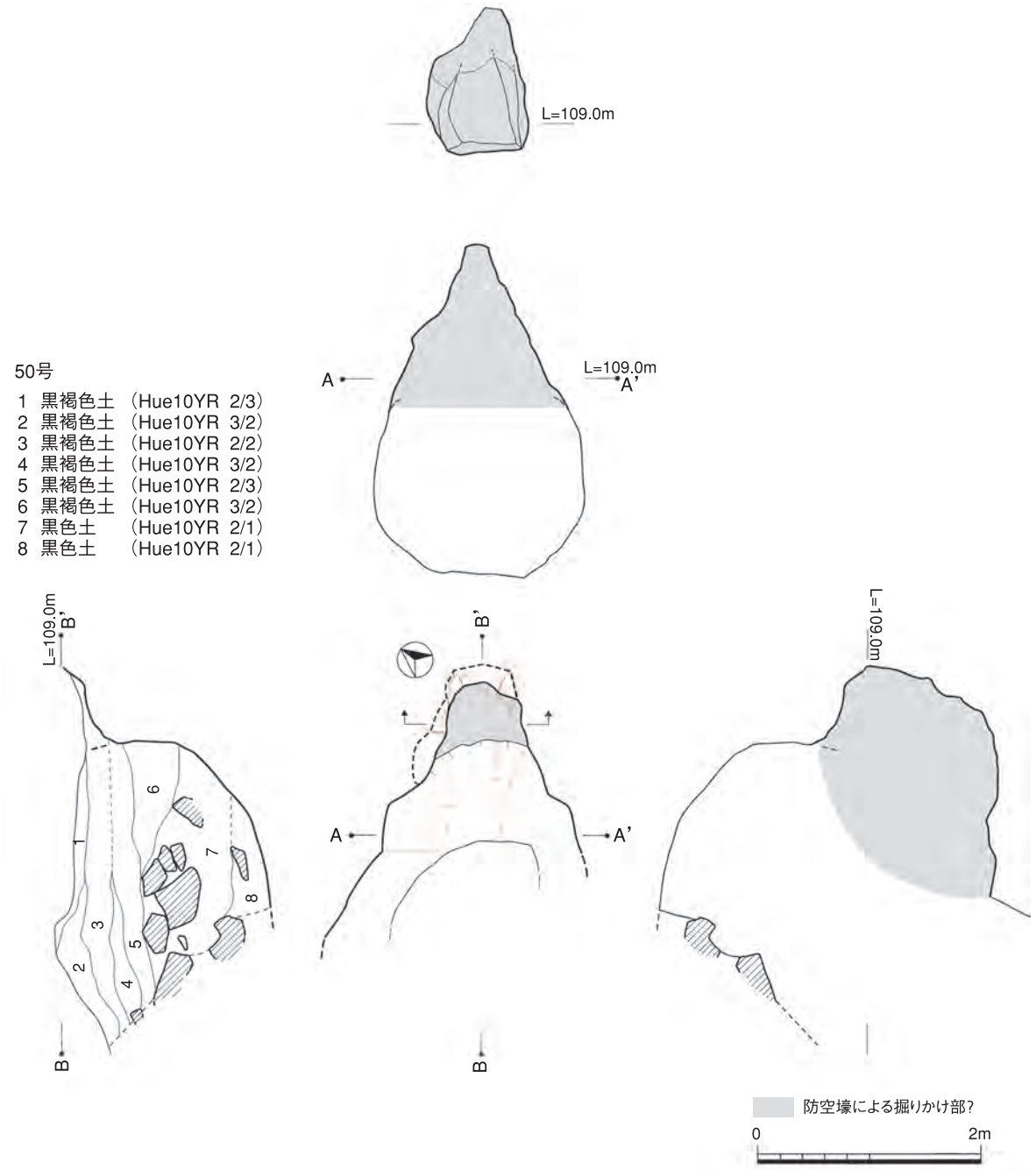
［確認位置］西側。標高約106.7ｍ。

［入口・壕内部の方位］N46°E

［壕の規模と状況］壕は、出入口だけの掘りかけと考えられる。幅：57cm、奥行き：143cm、



図(Fig)25　15,16号防空壕実測図



図(Fig)26　50号不明堀削実測図

高さ：103cmである。急な崖状の落ちになっていることから出入口を作った段階で防空壕の造営を諦めたのではないだろうか。

（3）その他：2基

①横穴墓を祠等として転用したもの:1基（46号）

②不明：1基（50号）

【46号】（図10参照）

［確認位置］西側。標高約107.2m。

［主軸方向］N14°E

［規模と状況］幅：259cm、奥行き：135cm、高さ：118cm。元々横穴墓であったものを、後にお堂または社として利用したと考えられる。奥壁の中央約170cm上に小さな祠状の掘り込みがある。大きさは、幅：20cm、奥行き：10cm、高さ：22cmである。またその約80cm右側に同様な掘り込みがあり、小さな仏像、神像またはお神酒を置くスペースに適している。大きさは、幅：18cm、奥行き：11cm、高さ：36cmである。その他にも奥壁の右下と左側壁の崩落した面にもそのような掘り込みが見ら

れる。

［出土遺物］右側壁手前の撹乱土の中から、肥前系磁器のお神酒徳利が出土した。瑠璃釉を塗布した明治以降の所産（写真127-43）と考えられる。このことからもお堂またはお社として利用されていたことが窺える。

【50号】（図26参照）

［確認位置］中央部。標高約109.0ｍ。

［主軸方向］N53°E

［規模と状況］上部は壕の出入口の作りかけと考えられる。幅：160cm、奥行き：210cm、高さ：160cmである。上部に崖のクラックが入っていることから危険を避けて、出入口を作りかけて諦めたのではないかと考えられる。

更に下層にはそれ以前の掘り込みが確認された。幅：190cm、奥行き：280cm以上、高さ：180cmである。層は８層に分層できるが、そのほとんどが凝灰岩の崩落土である。この掘り込みの目的や時期は不明だが、近くの47号墓や48号墓では江戸前期及び後期に凝灰岩などが敷き詰められていることから、同じ時期に掘り込まれたことも考えられる。

（４）調査区内での表採遺物（写真127参照）

調査区内で採集した遺物は、近世から現代までのものが中心で、網コンテナ（46cm×61cm×20cmの大きさ）に約１箱分の量であった。
ここでは代表的なものを巻末に写真で17点紹介するに留めた。

29は、41号墓と45号墓の間で採集した黒曜石の石核である。日東系黒曜石で上の台地から落ちてきたものだと考えられる。

30は、47号墓の後世に敷かれた礫の中に混じっていたもので、砂岩の両側がチョッピングトゥール状に剥離されている。礫器と考えられる。

31～36は、肥前系磁器の破片で18世紀後半から19世紀前半期の椀、皿、仏飯具の一部である。いずれも10号墓から22号墓前の竹林の中で採集した。

37～40は、球磨村一勝地に18世紀後半に開窯した一勝地焼の椀の一部と考えられる。相良藩窯と民窯の性格を持つ一勝地焼では、陶器ばかりではなく半磁器も焼いており、37～40は、いずれも灰色の半磁器である。これらの半磁器は人吉城の発掘調査では「灰色を色調とした在地産の陶器」として、紹介されており、「1820年～幕末の指標となる所産」とされている。（2005　鶴嶋・和田・村上）これらは、10号墓から22号墓前の竹林の中、及び42号の後世の撹乱土内で採集した。

41は、17号壕内で採集した湯飲みである。除隊記念などに作られる事が多い様で「○○かへる
古里の花　工兵六ノ一　段村」と書かれている。

42は、14号壕内で採集した猪口である。41と同様に除隊記念などに作られる事が多く、日章旗に馬の絵が描かれ「中神」と書かれている。41、42ともに昭和時代の所産である。

43は、46号の撹乱土の中から出土した肥前系磁器のお神酒徳利である。瑠璃釉を塗布した明治以降の所産である。

44、45は、鉛玉である。44は42号の後世の撹乱土内、45は50号の掘り下げ途中で採集した。44は、玉が当って平坦になっていることが窺える。使用時期は不明である。

第Ⅴ章　諸分析

1．中原横穴墓群の年代に関わる自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊本県人吉市中神町中原横穴墓群の発掘調査では32基の横穴墓が確認され、古墳時代後期～終末期の横穴群であるとされている。これらの横穴墓は、凝灰岩からなる台地の崖に構築されているが、現在ではそのほとんどが崩落により全体の形状をとどめていず、また数基は第二次世界大戦の際に防空壕として改変を受けているとされている。

今回の分析調査では、横穴墓崩落土中より採取された炭化材を対象として放射性炭素年代測定を行い、横穴墓の構築年代、あるいは炭化物が後代の崩落時に混入したものであれば、崩落の年代に関わる資料を作成することを目的とする。

1．試料

試料は、47号墓３層凝灰岩崩壊岩の上、47号墓26グリッド下崩落土中、および48号墓８グリッドの礫と同レベルの各箇所より１点ずつ採取された炭化材片計３点である。これらのうち、47号墓26グリッド下崩落土中の試料は針葉樹の炭化材、他の２点は広葉樹の炭化材であることが確認できたが、木材組織の保存状態が不良なために樹種までは判別できない。

2．分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC１により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC１によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3．結果

同位体効果による補正を行った測定結果を、表１に示す。47号墓３層凝灰岩崩壊岩の上試料は210±30BP、47号墓26グリッド下崩落土中試料は170±30BP、48号墓８グリッドの礫と同レベル試料は320±30BPを示す。

表１．放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	δ13C （‰）	測定年代 BP	Code No.
47号墓３層凝灰岩 崩壊岩の上	炭化材 （広葉樹）	210± 30	-22.74±0.79	170± 30	IAAA-62069
47号墓26グリッド下 崩落土中	炭化材 （針葉樹）	170± 30	-21.96±0.74	120± 30	IAAA-62070
48号墓８グリッド 礫と同レベル	炭化材 （広葉樹）	320± 30	-22.77±0.71	280± 30	IAAA-62071

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料名	補正年代 （BP）	暦年較正年代（cal）				相対比	Code No.
47号墓 ３層凝灰岩 崩壊岩の上	211 ± 29	σ	cal AD 1,651 ― cal AD 1,676	cal BP 299 ― 274		0.384	IAAA-62068
			cal AD 1,767 ― cal AD 1,771	cal BP 183 ― 179		0.042	
			cal AD 1,777 ― cal AD 1,799	cal BP 173 ― 151		0.426	
			cal AD 1,941 ― cal AD 1,951	cal BP 9 ― - 1		0.148	
		2σ	cal AD 1,646 ― cal AD 1,683	cal BP 304 ― 267		0.328	
			cal AD 1,735 ― cal AD 1,805	cal BP 215 ― 145		0.522	
			cal AD 1,931 ― cal AD 1,951	cal BP 19 ― - 1		0.150	
47号墓 26グリッド下 崩落土中	167 ± 29	σ	cal AD 1,668 ― cal AD 1,686	cal BP 282 ― 264		0.170	IAAA-62070
			cal AD 1,731 ― cal AD 1,781	cal BP 219 ― 169		0.520	
			cal AD 1,797 ― cal AD 1,808	cal BP 153 ― 142		0.106	
			cal AD 1,927 ― cal AD 1,948	cal BP 23 ― 2		0.199	
			cal AD 1,950 ― cal AD 1,951	cal BP 0 ― - 1		0.006	
		2σ	cal AD 1,662 ― cal AD 1,699	cal BP 288 ― 251		0.180	
			cal AD 1,722 ― cal AD 1,817	cal BP 228 ― 133		0.531	
			cal AD 1,833 ― cal AD 1,879	cal BP 117 ― 71		0.091	
			cal AD 1,916 ― cal AD 1,953	cal BP 34 ― - 3		0.198	
48号墓 ８グリッド 礫と同レベル	321 ± 29	σ	cal AD 1,518 ― cal AD 1,594	cal BP 432 ― 356		0.794	IAAA-62071
			cal AD 1,618 ― cal AD 1,638	cal BP 332 ― 312		0.206	
		2σ	cal AD 1,484 ― cal AD 1,645	cal BP 466 ― 305		1.000	

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
４）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
５）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

また、各試料の暦年較正結果を表２に示す。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。各試料ともに北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差をσとして計算させた結果、47号墓３層凝灰岩崩壊岩の上試料はcalAD1,651-1,951、47号墓26グリッド下崩落土中試料はcalAD1,668-1,951、48号墓８グリッドの礫と同レベル試料はcalAD1,518-1,638である。

４．考察

３点の炭化物が示す年代は、較正された暦年でみると、２点は17世紀後半以降、１点は16～17世紀であり、出土遺物等から推定されている古墳時代後期末～終末期という横穴墓の年代よりも遥かに新しい。おそらくこれらの炭化材３点は、いずれも後代における横穴墓の崩落時に混入した炭化材であると考えられる。この場合横穴墓の崩落は、すでに16世紀頃から生じていた可能性がある。

2．中原横穴墓群の基盤の溶結凝灰岩について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊本県人吉市中神町に所在する中原横穴墓群は、これまでの発掘調査により32基の横穴墓が確認され、古墳時代後期～終末期の横穴群であるとされている。横穴墓は、凝灰岩からなる台地の崖に構築されているが、人吉盆地内に分布する凝灰岩は、中部・南部九州の大カルデラに起源する複数の中・後期更新世火砕流堆積物が重なっていることが明らかにされている（例えば町田（1996）など）。現在では、下位より、樋脇（Hwk）、小林（Kb-Ks）、加久藤（Kkt）、阿蘇３（Aso-3）、阿多（Ata）、阿蘇４（Aso-4）、姶良入戸（A-Ito）の各火砕流堆積物が確認されている（町田ほか編,2001）。これらのうち、中原横穴墓群の基盤となっている凝灰岩は、発掘調査所見により、Aso-4の溶結凝灰岩に相当すると考えられている。

今回の分析調査では、上記所見の検証を目的として、凝灰岩中より角閃石を抽出し、その屈折率測定を行う。これは、Aso-4が有する、他の火砕流堆積物に比べて特異な性質として、斑晶鉱物に角閃石を多く含むことと、その角閃石の屈折率が有意に高いことが指摘されている（町田ほか,1985;町田・新井,2003）ことに基づくものである。

１．試料

試料は、47号墓前凝灰岩（試料番号１）および７号墓前凝灰岩（試料番号２）とされた２点である。いずれも黒灰色を呈する凝灰岩片であり、軽石粒や鉱物粒などが肉眼でも確認される。

２．分析方法

試料に水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm_1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離する。得られた重鉱物から、実体顕微鏡下で角閃石斑晶を拾い出し、屈折率測定試料とする。

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３．結果

処理後に得られた重鉱物粒は、斜方輝石と角閃石および不透明鉱物（磁鉄鉱などの鉄鉱物）の３者を主体とし、少量の単斜輝石が混在する。

角閃石の屈折率測定結果を図１に示す。47号墓前凝灰岩（試料番号１）は、n_2=1.684-1.690(mode 1.685-1.688)、７号墓前凝灰岩（試料番号２）は、n_2=1.684-1.692（mode　1.686-1.689）であった。

４．考察

今回の試料２点が採取されたそれぞれの溶結凝灰岩は、重鉱物組成の傾向と角閃石の屈折率がほぼ同様と言えることから、同一の溶結凝灰岩であるとしてよい。

前述した人吉盆地に分布する中・後期更新世火砕流堆積物のうち、町田・新井（2003）の記載に従えば、角閃石を多く含む重鉱物組成を有するテフラは、Hwk、Kb-Ks、Aso-4の３枚のみである。これらのうち、Kb-Ksは角閃石と黒雲母を主体とする重鉱物組成であり、また、Hwkは角閃石と単斜輝石を主主体とする重鉱物組成であり、かつ角閃石の屈折率はn_2=1.668-1.675である。一方、Aso-4は角閃石と斜方輝石および

単斜輝石を主体とする重鉱物組成であり、角閃石の屈折率はn_2=1.685-1.691である。

２点の試料が採取された溶結凝灰岩は、重鉱物組成および角閃石の屈折率ともに、Aso-4の特性とほぼ一致し、また、他の火砕流堆積物とはあきらかに異なっている。したがって、２点の試料が採取された溶結凝灰岩は、Aso-4の火砕流堆積物に相当すると判断される。

引用文献

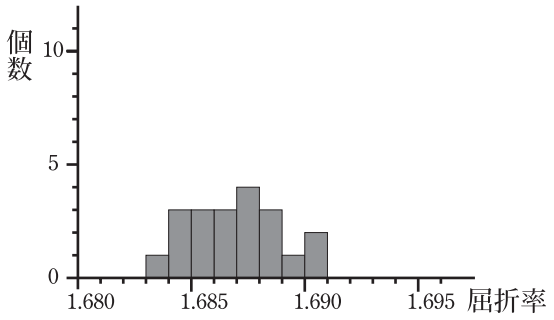
古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

町田　洋,1996,人吉盆地における阿蘇・阿多などの火砕流堆積物.第四紀露頭集-日本のテフラ.日本第四紀学会,75.

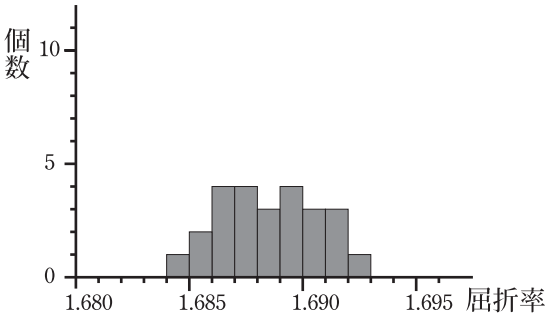
町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢,1985,阿蘇4火山灰ー分布の広域性と後期更新世示標層としての意義ー.火山,30,49-70.

町田　洋・太田陽子・河名俊男・森脇　広・長岡信治(編),2001,日本の地形７　九州・南西諸島,東京大学出版会,355p.



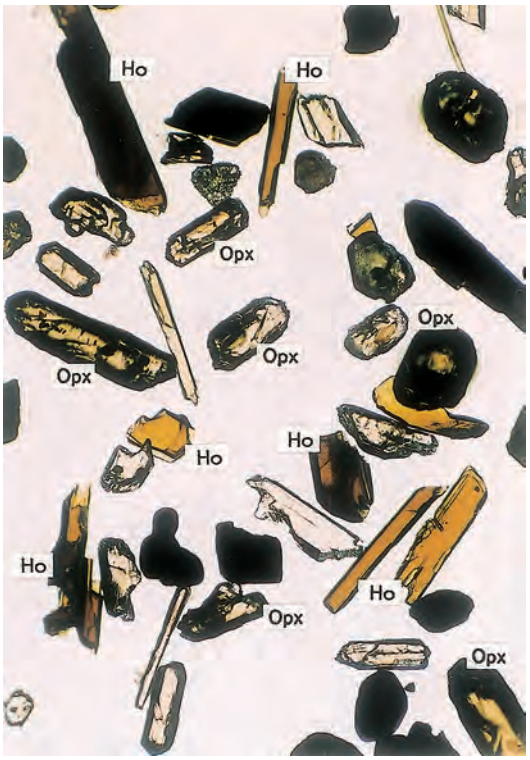
試料番号1：47号墓前　凝灰岩



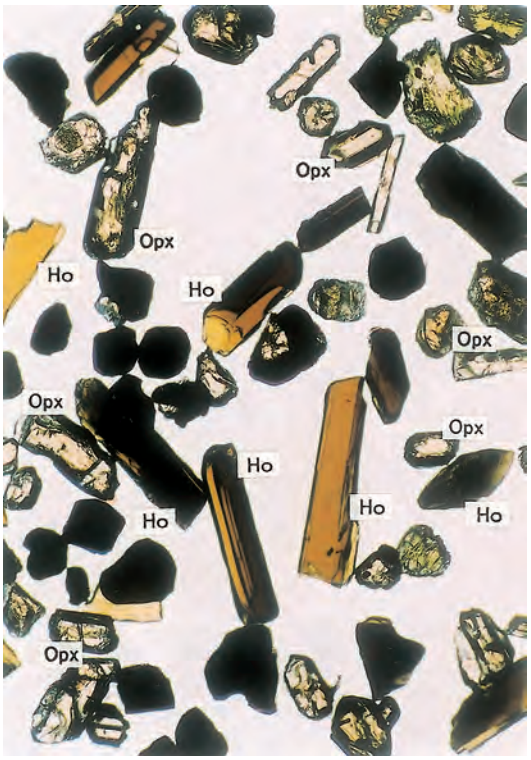
試料番号2：7号墓前　凝灰岩

図1.　角閃石の屈折率測定結果

図版１　試料中の重鉱物



１.47号墓前凝灰岩；１



２.７号墓前凝灰岩；２

Opx：斜方輝石　Ho：角閃石

0.5mm

第Ⅵ章　総　　括

第１節　はじめに

今回、中神総合流域防災事業（傾崩）に伴い、中原横穴墓群の発掘調査を実施した。今まで中原横穴墓群は、人吉・球磨地域では大村横穴墓群の26基に次ぐ23基の横穴墓群とされてきた。しかし、今回の発掘調査によって27基（他２基については、全面掘削を受けているが、形状から横穴墓であった可能性が高い）を確認。人吉・球磨地方では、最大の横穴墓群であることが判明した。

27基の横穴墓のうち、壁面吹付けのため発掘調査対象となった横穴墓は１、２、６、７、８、38、40、46、47、48、51、52号墓であり、その他の横穴墓は前面に擁壁を建てることにより、保存が可能になったため、現状での実測と写真撮影を行った。

ここでは調査結果を元に若干の考察を加え、まとめとしたい。

第２節　横穴墓の立地と分布

中原横穴墓群は、球磨川本流とその支流である万江川の合流地点の右岸に広がる阿蘇４溶結凝灰岩の台地の崖面に位置している。この凝灰岩の崖は、東西に約900ｍ続いており、その西側には八久保横穴墓群があり、総数４基が確認されている。

中原横穴墓群は、高さ約７～８ｍ、幅400ｍの範囲に27基確認されたが、残りの崖面にも残存している可能性が非常に高く、本来の数はもっと多かったと推定される。

ほとんどが標高約107ｍ前後に築造されており、目立った段築は見られない。しかし東側に位置する51号と52号は標高110ｍを越えており、明らかにやや高い位置に存在する。

第３節　横穴墓の構造と変遷

今回確認された27基の横穴墓は、全て原形を留めているものはなく、全体形状の約1/2以上を残したものでさえ、僅かであった。運良く全体形状が残る横穴墓でさえも第二次世界大戦の際に防空壕として転用され天井、床面、側壁や奥壁が掘削されており、原形を復元できる横穴墓は少なかった。

こうした中で、横穴墓の構造と変遷を考えることは容易ではないが、横穴墓玄室の軒先線の有無により大まかな変遷をつかむことができる。

ここでは、横穴墓の構造から考えた変遷過程を大別２期に区切って提示したい。

Ａ期：軒先線を有する横穴墓は、６、12、14、15、22、24、25、29、38、47号墓の10基である。ほとんどが軒先線の出っ張りが顕著なものであるが、38号墓はそれが退化している。また、12号墓は、凝灰岩の表面の風化がやや進んでおり、軒先線の出っ張りがやや退化している。ただ退化が、風化によるものか否かは不明である。29号墓は、軒先線の一部が剥落しているために詳細は不明である。

Ｂ期：軒先線を有しない横穴墓は、１、２、７、８、13、21、23、40、46、48、51、52号墓の12基である。

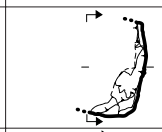
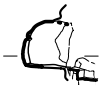
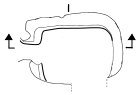
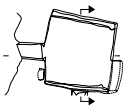
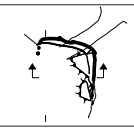
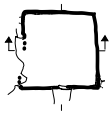
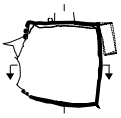
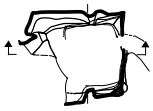
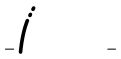
Ｃ期：軒先線の有無が不明な横穴墓は、10、16、26、27、33、41、45号墓の７基である。

軒先線の在り方は時間差を示す傾向にある（2001美濃口）ことや球磨川中流域の装飾横穴墓編年図（1999高木）を念頭において、６世紀におけるＡ期の軒先線を有する横穴墓からＢ期の軒先線を有しない横穴墓への時期的な変遷を提示したい。

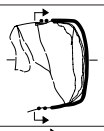
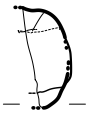
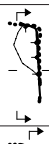
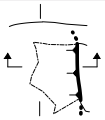
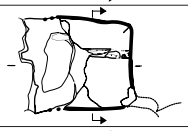
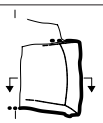
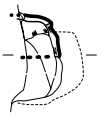
仕切りの在り方は、通常時間差を示さず、遺跡単位で検討すべき項目（2001美濃口）であることを考慮してみると、図28の様な大分類に区分することができる。大方がⅠ類の仕切りを持たないタイプだが、Ⅲ類やⅣ類の左か右に仕切りを持つタイプ（21、23？、29、47号墓）、Ⅵ類の様にコの字状に仕切りを持つタイプ（15、24？号墓）、Ⅶ類の様に通路あるいは排水路的な仕切りを持っていると考えられるタイプ（７号墓）があり、Ⅷ類の様に石屋形状にコの字形の仕切りを持つタイプ（６？、40？号墓）の存在も想定される。Ⅲ類やⅣ類の左か右に仕切りを持つタイプは、南九州や東九州からの影響、Ⅵ類の様にコの字状に仕切りを持つタイプは白川及び菊池川流域の影響を受けているものと推定される。

中原横穴墓群の石室構造の特徴として、Ⅲ類やⅣ類の左か右に仕切りを持つこと、天井部までの高さが低いことや屍床に拳大前後の河原石を敷きつ

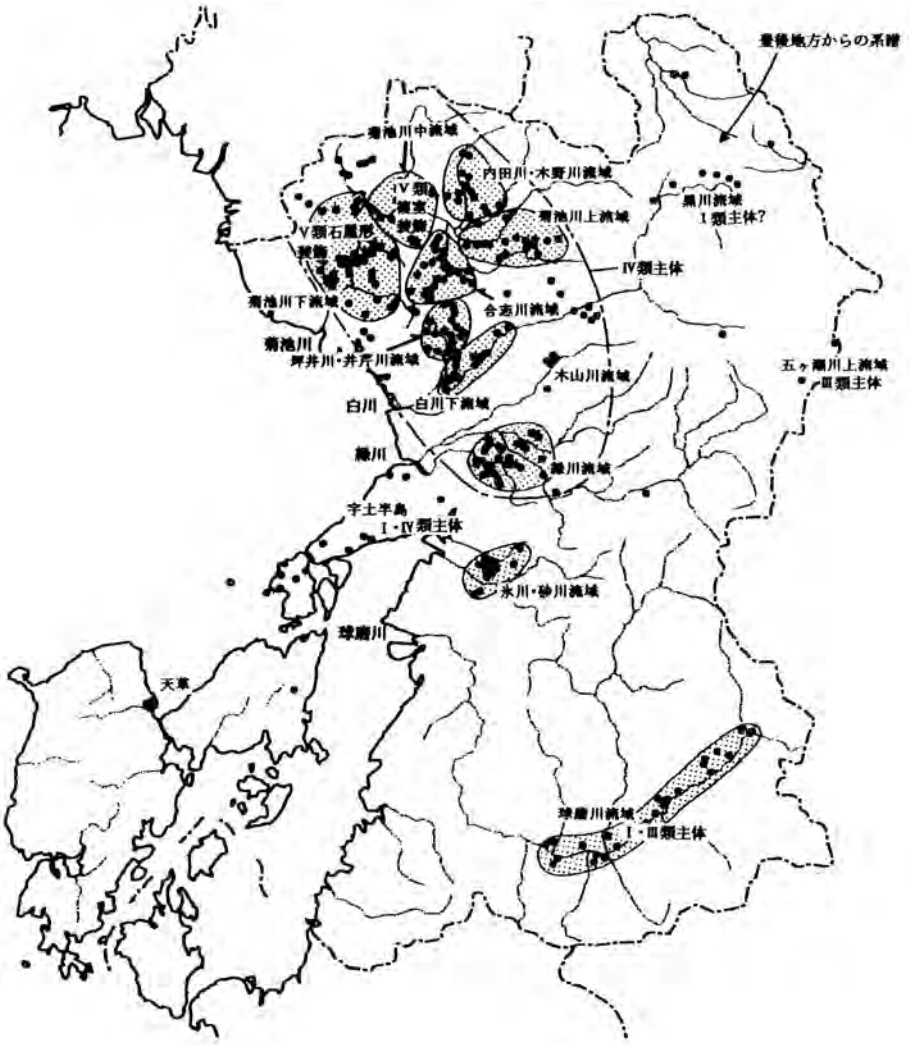
表(Tab)4　中原横穴墓群の横穴墓一覧表1

番号	平面模式図	断面模式図	平面形の大分類	確認高(m)	主軸方位	玄室規模			天井形態	軒先線	仕切	出土遺物
						幅(cm)	奥行(cm)	高さ(cm)				
1			Ⅰ?	106.1	N48°E	268～	136～	103～	ドーム?	×	不明	×
2			不明	105.1	N1°E	254	70～	130～	ドーム?	×	不明	×
6			Ⅱ? か Ⅲ?	107	N11°W	133	83～	97	ドーム	○	不明	×
7			Ⅶ	107	N24°W	292	210～	122	ドーム	×	○	須恵器1、 鉄鏃1
8			不明	107.3	N15°W	185～	205～	92	ドーム	×	不明	×
⑩			不明	106.5	N15°W	322以下	280以下	183以下	不明	不明	不明	×
12			Ⅰ?	107.6	N25°E	210～	172～	105～	ドーム?	○	×	不明
13			Ⅰ?	107.1	N7°E	270	260	154～	ドーム	×	不明	不明
14			Ⅰ?	107	N33°E	262	232～	130～	ドーム	○	不明	不明
15			Ⅳ	107.4	N39°E	240	230	100	ドーム	○	○	×
⑯			不明	108.2	N17°W	188以下	210前後	135以下	ドーム?	不明	不明	不明
21			Ⅲ	107.5	N31°E	265～	194～	118～	ドーム	×	○	不明
22			Ⅰ	107.25	N20°E	235	164～	122～	ドーム	○	×	不明
23	 (略測)	 (略測)	Ⅳ?	—	—	255	210～	110～	不明	×	不明	不明
24	 (略測)	 (略測)	Ⅳ?	—	—	315	320	135～	ドーム	○	○	不明

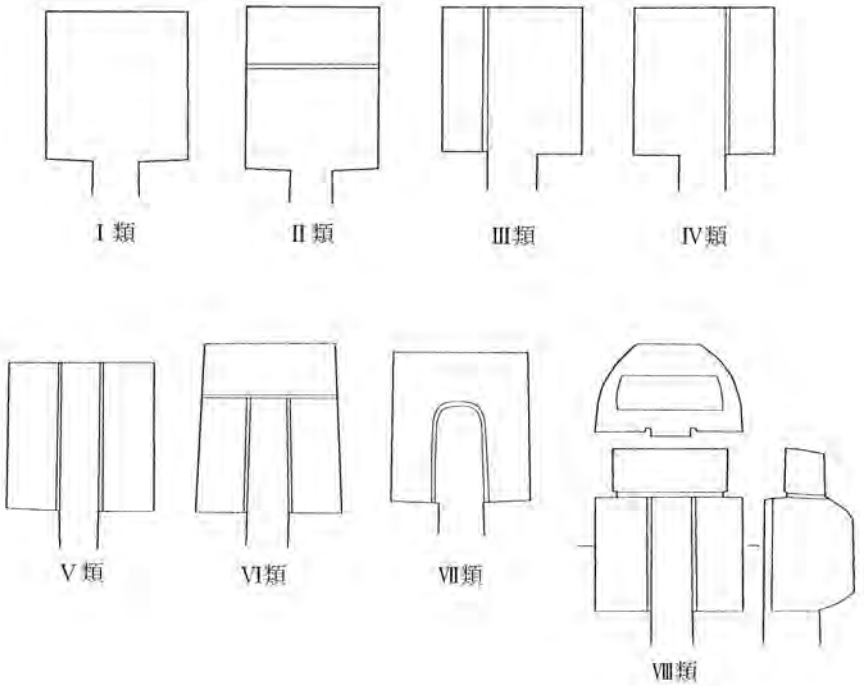
表(Tab)5　中原横穴墓群の横穴墓一覧表2

番号	平面模式図	断面模式図	平面形の大分類	確認高(m)	主軸方位	玄室規模			天井形態	軒先線	仕切	出土遺物
						幅(cm)	奥行(cm)	高さ(cm)				
25			Ⅰ?	107.8	N36°E	228	182～	68～	ドーム	○	不明	不明
26			不明	107.3	N27°E	185	69 ～	45～	不明	不明	不明	不明
27			不明	106.7	N27°E	54～	15～	110～	不明	不明	不明	不明
29			Ⅲ	107.5	N34°E	190～	120～	114～	ドーム	○	○	不明
33			不明	106.9	N13°E	55～	36～	143～	不明	不明	不明	×
38			Ⅰ?	106.8	N16°E	138～	49～	98～	ドーム	○	不明	×
40			Ⅶ?	106	N18°E	205～	135～	144～	ドーム	×	○	×
41			不明	106.1	N67°E	46～	48～	177～	不明	不明	不明	×
45			不明	107.8	N35°E	117～	61～	65～	不明	不明	不明	不明
46			Ⅰ	107.2	N14°E	259	135～	118～	ドーム?	×	×	×
47			Ⅲ	107.5	N24°E	269	202～	200～	ドーム	○	○	鉄鏃17、 刀子2、 不明鉄片2
48			Ⅰ	106.4	N59°E	232	200～	160～	ドーム?	×	×	直刀1、鉄鏃1、 刀子1、耳環1、 土師器1、土錘1、 土玉2、 不明鉄片1
51			Ⅰ?	111.4	N23°E	196	160～	166～	ドーム?	×	不明	×
52			不明	111.5	N33°E	62～	60～	76	ドーム	×	不明	×

※○の付いた番号は、「元々は横穴墓と考えられるが、防空壕築造のために全面にわたり掘削を受けて、プランのみ残存するもの」を示す。



図(Fig)27　熊本県横穴墓位置図(九州の横穴墓と地下式横穴墓2001より転載)



図(Fig)28　平面形による大分類図(九州の横穴墓と地下式横穴墓2001を加筆修正)

つめることが考えられる。

第４節　横穴墓の装飾

ここでは47号墓の左側面及び奥壁の一部で確認された装飾文様について述べたい。

この装飾文様は、軒先線の上部に線刻された連続三角文である。左側壁に４辺、奥壁に１辺観察できる。長さは51～58cm、幅約１～1.5cm、深さ約３～５mmである。（図11及び写真92参照）脆弱な凝灰岩に線刻されているために左側壁と奥壁の一部及び右側壁の全面には風化のため観察できない。左側壁の線刻内にある軽石にも鋭利な掘削痕跡が観察されることから、鋭い工具により刻まれたものと考えられる。

周辺にある大村横穴墓でも装飾文様が７基確認されているが、１基を除いて石室外の飾り縁や右外壁に連続三角文、大形の三角文、靫、弓、馬、円文等がレリーフ状に刻まれている。石室内に装飾文様を持つ横穴墓は、15ｂ号であるが、軒先線の下部、石室内の奥壁に円文がレリーフ状に刻まれている。しかしながら石室内に装飾文様が刻まれているという点では、中原横穴47号墓との類似性は指摘できる。

軒先線の上部に連続三角文が線刻された例は、鍋田6号墓、52号墓、53号墓（山鹿市：菊池川中流域）などに見られ、コの字状に仕切りを持つ石室が熊本地方の影響を受けているとすれば、装飾文様も同様な関連性が考えられる。

第５節　横穴墓からの出土遺物

出土した遺物は、７号墓、47号墓、48号墓からの土器、武具、装身具などであった。このうち元位置を留めていると考えられるものは、47号墓と48号墓の一部の遺物と推定される。しかし、その遺物が初葬か追葬のいずれの時期のものであるのかを判断することもできない状況であった。

時期の決め手となる土器の出土は、２点のみで小片のため、時期の推測は出来なかった。１点は、７号墓から出土した須恵器片であるが、口縁部ではなく、杯の身か蓋であるかの断定もできない資料であった。もう１点は、48号墓から出土した土師器片で、壺の口縁部であり、胴部の形状が推測できない資料であった。

47号墓からは、鉄製品のみ17点が出土した。内訳は、鉄鏃が13点、刀子が２点、不明鉄片が２点、である。鉄鏃は全て長頸鏃で腸抉三角形鏃と考えられる。同形式の鉄鏃の存続時期は長いが、６世紀代と考えても問題ないと思われる。

48号墓からは、鉄の直刀１点、刀子１点、鶏頭形の鉄鏃の鏃身部が１点、不明鉄片１点、銅製の耳環１点、土玉２点、土錘１点、土師器１点の計９点が出土している。初葬か追葬のいずれの時期であるかは不明であるにしても、頭部を北東にしていたことや、石室内に２名以上の遺体を葬ったことが推測される。遺物は武具、装身具、日常品に分類でき、その中でも土錘が１点出土していることは、球磨川に近い当時の生活環境を示唆しているものと言えよう。

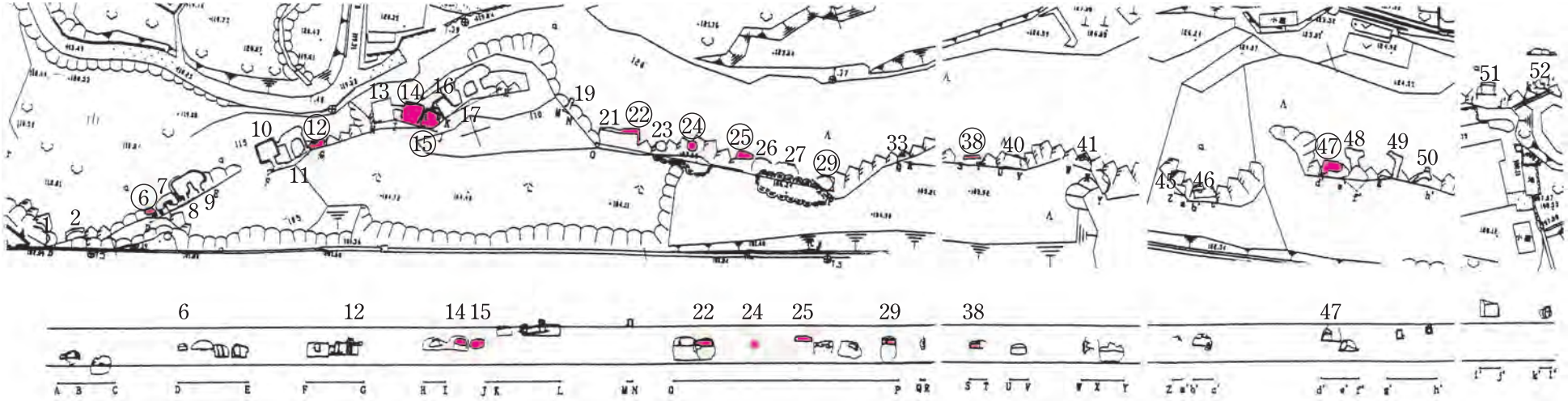
第６節　防空壕

今回の調査により12基の防空壕が発見された。この内訳は純粋な防空壕が４基、横穴墓を転用して横穴墓の痕跡が残存しているものが４基、横穴墓を壊して防空壕の通路等としたものが１（２）基、横穴墓を転用しているが横穴墓の痕跡が残存していないものが２基、防空壕の入り口部分のみの掘りかけが１基である。

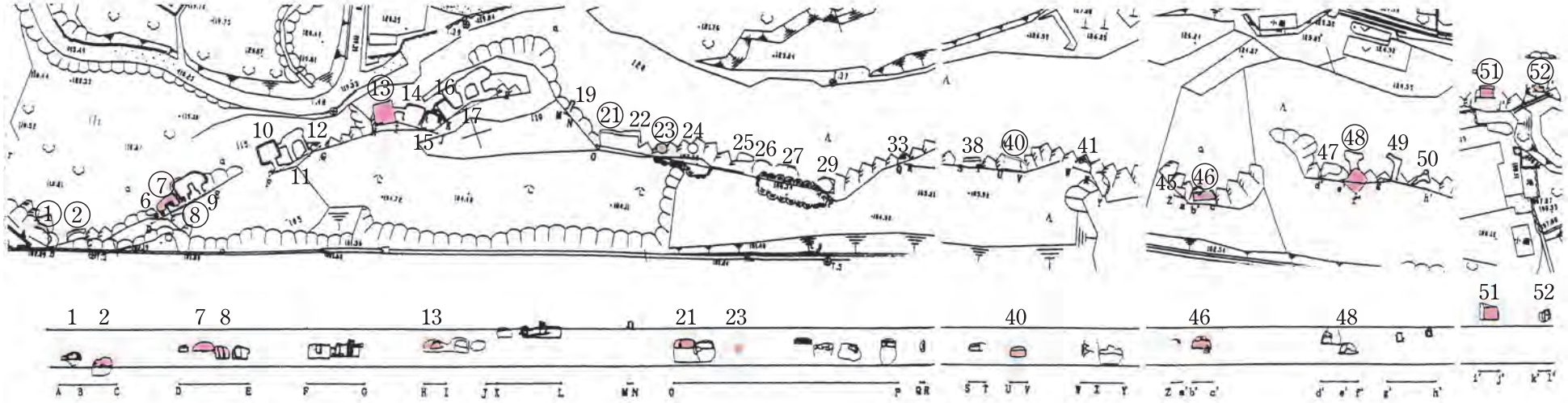
防空壕を掘る条件は、横穴墓を掘る条件と同様であり、やや軟質の凝灰岩地域の崖に、横穴を穿って作られていた。横穴墓を防空壕に転用してある例の他に、新たに掘られた防空壕も存在し、その防空壕を掘られた方や利用された方に直接お話を聞くことができ、当時の状況や48号壕を掘削した日時が判明したことは、戦跡遺跡の証言を得たという意味では大きな収穫であったと感じられる。

第７節　おわりに

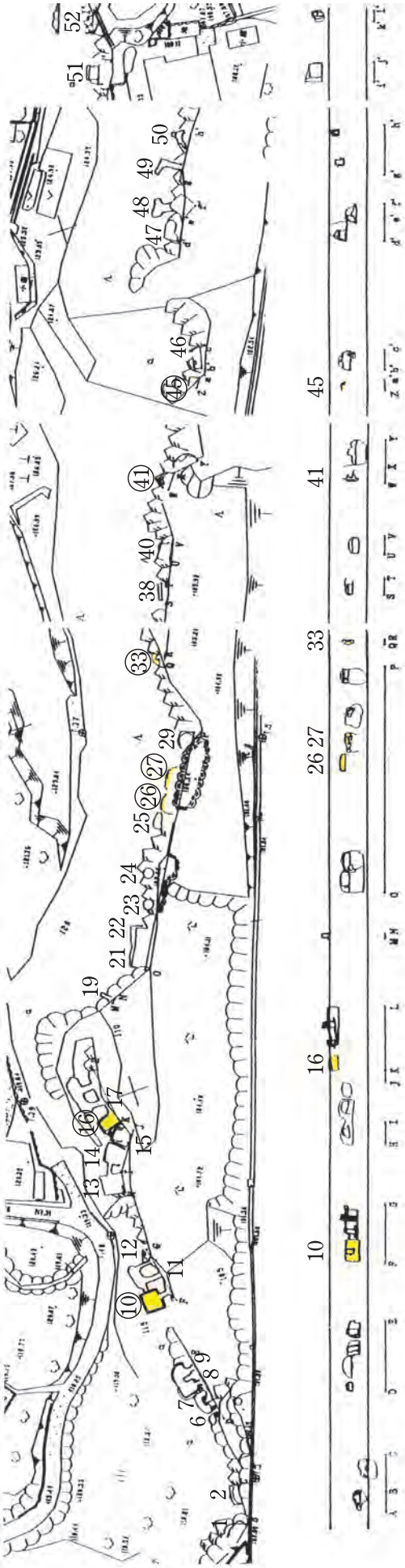
人吉・球磨地域は地下式横穴墓が確認された北限地域（1989西住）であり、宮崎平野と同様、横穴墓と地下式横穴墓の異なる墓制が混在する地域（図33参照）である。東北地方以北を除く汎日本列島に広がる横穴墓と南九州に特異な広がりを持つ地



図(Fig)29　横穴墓位置図:A期(軒先線を有する横穴墓)



図(Fig)30　横穴墓位置図:B期(軒先線を有しない横穴墓)



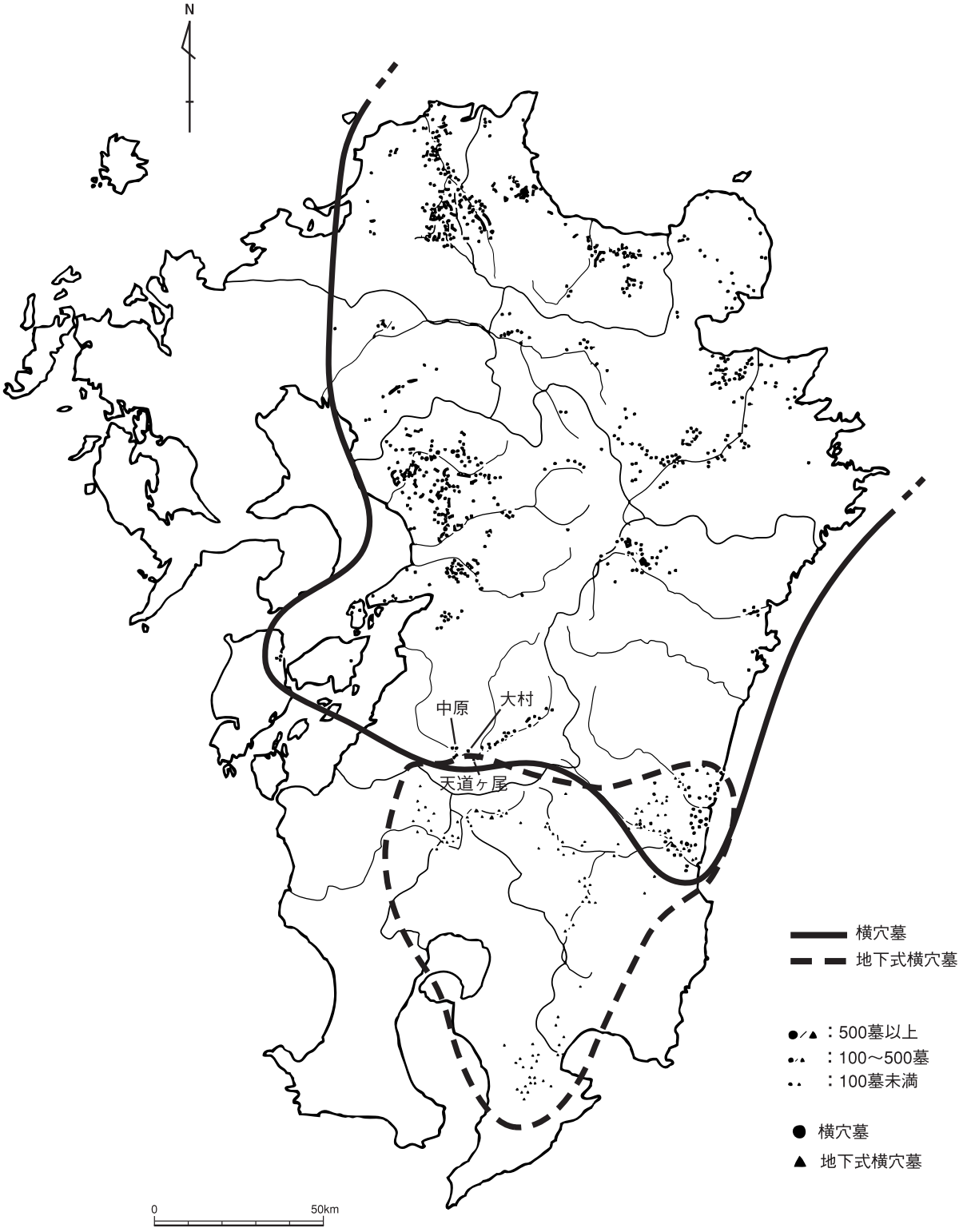
図(Fig)31　横穴墓位置図:C期(軒先線の有無が不明な横穴墓)

下式横穴墓である。

また、亀塚古墳（球磨郡錦町）は、人吉・球磨地域に唯一の前方後円墳である。大和政権が南九州勢力に対する楔的な役割を果たした一族の墓と推定される。

この様に人吉・球磨地方は、先史において墓制等における北の文化の南限地域であり、南九州の文化の北限地域でもあった。このことは縄文時代早期に北の文化とされる押型文土器、南九州地方の影響を受けた土器が出土することや古墳時代の地下式板石積石室墓や地下式横穴墓の広がりを考えれば一目瞭然である。

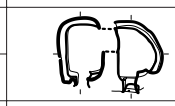
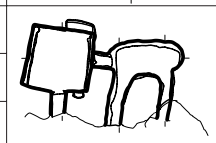
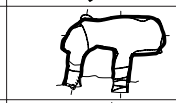
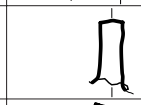
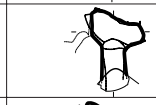
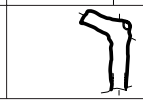
今後、人吉・球磨地方における埋蔵文化財の発掘調査が増加すれば、更なる北と南の文化交流の新たな事実が解明されることだろう。

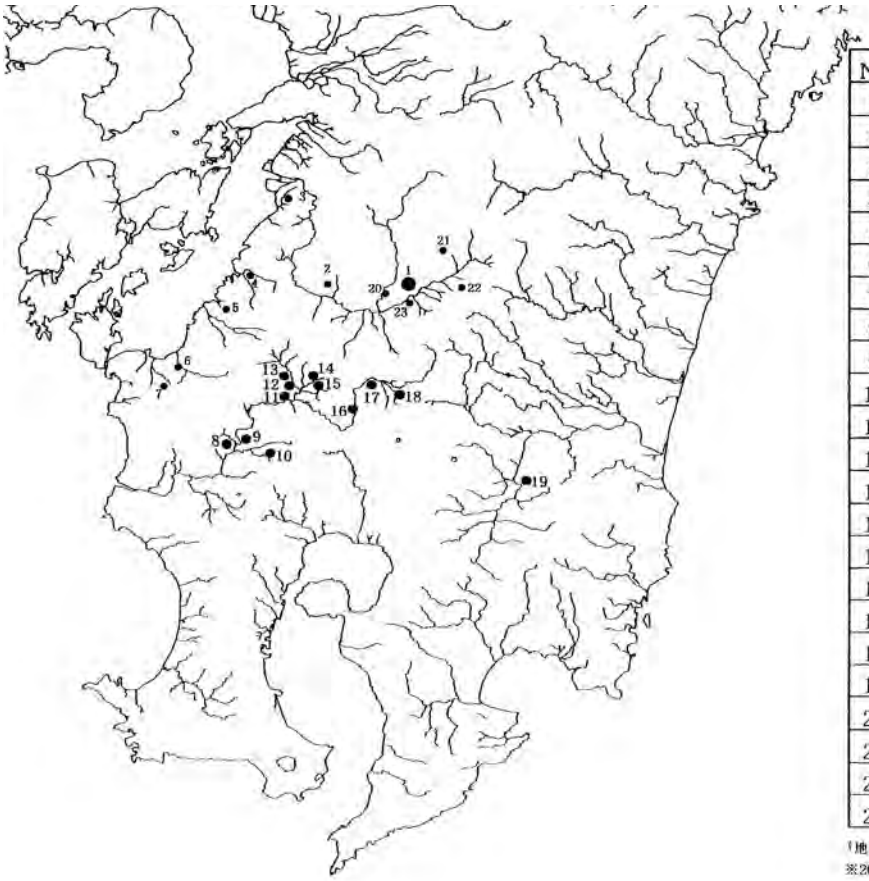


図(Fig)32　九州の横穴墓と地下式横穴墓の分布

（第4回前方後円墳研究大会「九州の横穴墓と地下式横穴墓」の追加資料に加筆）

表(Tab)6　中原横穴墓群の防空壕一覧表

番号	平面模式図	確認高(m)	入口の方位	壕内部の方位	壕の規模(cm)			出入口の規模(cm)			通路の規模(cm)			備考
					幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	幅	奥行	高さ	
8		106.6	N15°W	N75°E	205	285	170	55	50	165	110	70～80	132	横穴墓だった可能性あり
9		106.4	N12°W		221	278	165	60	68	130				
10		106.1	N15°W	N85°E	280	265	180～	60～70	100	150～	60	60～95	110	棚2つあり
11		106.3	N15°W		330	135	165	50～60	210～230	130～140				出入口が2ヵ所あり
11 出入口のみ		106.3	N15°W		－			50	210	135	－			
13		106.8	N7°E	N62°W	265	250	180～	170	30	140	55～65	180	90～120	不明の穴あり
14		106.4	N33°E		240	280	195～	160	70	160				棚あり
15		107.1	N39°E	N56°E	230	245	140	127	42	100	50	120	90	3段の階段
16		107.8	N17°W		188	210	135	195	30	135～				
17		108.7	N11°W	N79°E	520	275	90～150	70～80	160～200	105～145	－			出入口が2ヵ所あり
19		106.7	N46°E	－	－			57	143	103	－			出入口のみ掘りかけ
48		106.5	N10°E	N80°W	90～130	260	165	140	192	130	－			製作者と製作年月日あり
49		108	N31°E	N35°W	65	213	135	70	220	125	－			



No.	遺跡名	県名
1	新深田遺跡	熊本県
2	荒毛遺跡	熊本県
3	丸山古墳	熊本県
4	宮野浦遺跡	熊本県
5	初野遺跡	熊本県
6	溝下遺跡	鹿児島県
7	堂前遺跡	鹿児島県
8	小松原遺跡	鹿児島県
9	湯田原遺跡	鹿児島県
10	別府原遺跡	鹿児島県
11	大住遺跡	鹿児島県
12	焼山遺跡	鹿児島県
13	大田遺跡	鹿児島県
14	瀬ノ上・平田遺跡	鹿児島県
15	塞ノ神遺跡	鹿児島県
16	永山遺跡	鹿児島県
17	灰塚遺跡	宮崎県
18	小木原遺跡	宮崎県
19	香禅寺遺跡	宮崎県
20	農芸学院	熊本県
21	大久保	熊本県
22	福留	熊本県
23	本目	熊本県

「地下式板石積石室墓の基礎的研究」（西健一郎1988）より抜粋
※20～23は北川が追加した。

図(Fig)33　地下式板石積石室墓分布図(2000　北川)

表(Tab)7　　7号墓出土遺物観察表

〔鉄器〕

図版番号	遺物番号	器種	部位	全長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	最大厚(cm)	出土 層位	備　考
5	2	鉄鏃	茎部	2.7	0.3	0.7	0.15	埋土フルイ	1グリッドの7袋目より出土

〔土器〕

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径(cm)	残存高(cm)	調整		色調		胎土	出土層位	焼成
							内面	外面	内面	外面			
5	1	須恵器	蓋	体部	12.0～(復元)	2.4	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗ切後、ﾅﾃﾞ	灰(5Y6/1)	灰(5Y5/1)	長石・黒色粒	床面直上 16グリッド	良好

表(Tab)8　　47号墓出土遺物観察表

〔鉄器〕

図版番号	遺物番号	器種	部位	全長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	最大厚(cm)	出土 層位	備　考
12	3	鉄鏃	鏃身部～柄部	9.7	1.7	5.4	0.2～0.5	10グリッドⅡ層　点上げ	一部樹皮残存　茎部欠損
12	4	鉄鏃	鏃身	4.4	1.3	5.1	0.25	3グリッドⅡ層(25～30cm下)	頸部・茎部欠損
12	5	鉄鏃	鏃身部～頸部	5.4	1.6	6.8	0.15～0.2	5グリッドⅡ層　点上げ	鏃身・頸部欠損
12	6	鉄鏃	鏃身部～茎部	5.3	1.5	4.7	0.15～0.3	16グリッドⅡ層　点上げ	一部木質残存　鏃身・頸部欠損
12	7	鉄鏃	鏃身部～茎部	7.8	1.3	6.5	0.2	2グリッドⅡ層(25～30cm下)	鏃身・茎部欠損
12	8	鉄鏃	鏃身部～頸部	3.4	1.4	3.0	0.2	10グリッドⅡ層	鏃身・頸部欠損
12	9	鉄鏃	頸部	3.5	0.4	2.1	0.25	12グリッドⅢ層(25～30cm下)	上下欠損
12	10	鉄鏃	頸部～茎部	2.9	0.6	2.4	0.3	8グリッドⅡ層	茎部に樹皮の痕跡・欠損
12	11	鉄鏃	茎部	2.1	0.3	0.3	0.25	3グリッドⅡ層(25～30cm下)	上下欠損
12	12	鉄鏃	頸部～茎部	4.8	0.6	4.3	0.3	14グリッドⅢ層(20～30cm下)	頸部・茎部欠損
12	13	鉄鏃	頸部～茎部	4.0	0.5	11.0	0.25	11グリッドⅡ層　点上げ	頸部・茎部欠損
12	14	鉄鏃	頸部～茎部	3.4	0.5	2.2	0.2	5グリッドⅡ層	頸部・茎部欠損
12	15	鉄鏃	茎部	2.3	0.25	0.3	0.1	2グリッドⅡ層(25～30cm下)	上下欠損
12	16	鉄片	不明	2.9	1.3	2.4	0.2	16グリッドⅡ層　点上げ	上下欠損
12	17	刀子	茎部～刀身部	6.5	0.9	11.0	0.2	Ⅱ層　石室外　Ⅲ層	木質部 残存
12	18	刀子	茎部～刀身部	6.8	0.6	25.7	0.45	12グリッドⅢ層	木質部 残存
12	19	鉄片	不明	1.8	1.0	0.5	0.1	11グリッドⅡ層(20m下)	欠損

表(Tab)9　　48号墓出土遺物観察表

〔鉄器〕

図版番号	遺物番号	器種	部位	全長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	最大厚(cm)	出土 層位	備　考
19	24	直刀	刃部～柄部	42.0	2.3	299.0	0.4	点上げ	メタル部分　長:2.2cm 幅:0.4cm 3つに折れるも完形
19	25	鉄鏃	鏃身～頸部	6.3	3.6	25.3	0.4	右2グリッド	鶏頭符箋鏃・頸部欠損
19	27	刀子	刃部	5.8	1.0	6.0	0.2	点上げ・床面上	柄部欠損
19	28	鉄片	不明	1.5	1.9	1.5	0.15	入口手前右	

〔土器〕

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径(cm)	残存高(cm)	調整		色調		胎土	出土層位	焼成
							内面	外面	内面	外面			
19	21	土師器	壺	口縁	11.8(復元)	2.6	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	石英・長石・雲母・黒色粒	点上げ	良好

〔耳環・土玉〕

図版番号	遺物番号	器種	材質	色調	径(mm)	最大厚(mm)	穿孔径(mm)	重量(g)	出土層位	備　考
19	22	土玉		黒	8.0～8.5	8.5	1.5	0.5	左5グリッド 床上	ヒビ、欠損あり
19	23	土玉		黒	7.5～8.0	7.0	1.5	0.5	左2グリッド 床上	
19	26	耳環	銅	茶～緑青色	20.0～22.0	2.5	―	1.4	点上げ　礫上	材質は分析済

〔土錘〕

図版番号	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	穿孔径(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成	備考
19	20	6.5	2.3	2.1	0.5	27.9	浅黄色(2.5Y7/4)	石英・雲母・赤色粒	良好	点上げ

引用・参考文献

高木正文他　1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会

高木正文　1985　『古城横穴墓群』　熊本県文化財調査報告第74集　熊本県教育委員会

前田一洋　1985　「球磨の諸窯」　『日本やきもの集成12』九州Ⅱ沖縄　平凡社

木崎康弘　1986　『大丸・藤ノ迫遺跡』　九州縦貫自動車道（八代―人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査
熊本県文化財調査報告第80集　熊本県教育委員会

木崎康弘　1987　『狸谷遺跡』　九州縦貫自動車道（八代―人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査
熊本県文化財調査報告第90集　熊本県教育委員会

渋谷　敦　1987　「人吉市」　『角川日本地名大辞典　43　熊本県』　角川書店

杉山秀宏　1988　「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』　橿原考古学研究所

西住欣一郎　1989　『天道ヶ尾遺跡（Ⅱ）』九州縦貫自動車道（八代―人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査
熊本県文化財調査報告第103集　熊本県教育委員会

松本健郎・高木正文・西住欣一郎　1989　『北上原伊勢古墳・瀬戸口横穴墓群』
熊本県文化財調査報告第104集　熊本県教育委員会

西住欣一郎　1990　『天道ヶ尾遺跡（Ⅰ）』九州縦貫自動車道（八代―人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査
熊本県文化財調査報告第111集　熊本県教育委員会

西住欣一郎　1991　「肥後における横穴墓について」『おおいた考古』第４集　特集・日本の横穴墓

種元勝弘　1990　「先史・古代」『人吉市史』　人吉市教育委員会

鶴嶋俊彦・和田好史　1992　『荒毛遺跡』　人吉市遺跡詳細分布調査報告書　人吉市教育委員会

和田好史　1993　『中堂遺跡』　熊本県人吉市文化財調査報告書　人吉市教育委員会

佐賀県立博物館　1998　『日本の古墳』　僕が調べた歴史の謎　佐賀県立博物館

網田龍生　1998　『上高橋高田遺跡　概要報告書』　熊本市教育委員会

大橋康二・西田宏子監修　1998『古伊万里』　別冊太陽　日本のこころ63　平凡社

高木正文　1999　「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集
国立歴史民俗博物館

北川賢次郎　2000　『新深田遺跡』　深田村文化財調査報告第3集　深田村教育委員会

大橋康二・家田淳一・野上建紀・中野雄二・船井向洋・東中川忠美　2000　『九州陶磁の編年』
―九州近世陶磁学会10周年記念―　九州近世陶磁学会

江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

帆足俊文　2001　『瀬戸口横穴墓群・深川遺跡』　熊本県文化財調査報告第193集　熊本県教育委員会

美濃口雅朗　2001　「地域の概要―肥後―」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第４回九州前方後円墳
研究会大会　第１分冊　発表要旨集―資料編―　九州前方後円墳研究会

竹田宏司　2001　「肥後の横穴墓分布」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第４回九州前方後円墳
研究会大会　第１分冊　発表要旨集―資料編―　九州前方後円墳研究会

出合宏光　2001　「中原横穴墓他」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第４回九州前方後円墳
研究会大会　第１分冊　発表要旨集―資料編―　九州前方後円墳研究会

美濃口雅朗　2002　『つつじヶ丘横穴群』―発掘調査報告書―　熊本市教育委員会

鶴嶋俊彦・和田好史・村上晃勇　『史跡　人吉城跡　Ⅻ』人吉市文化財調査報告第23集　人吉市教育委員会

福原　透他　2006　『肥後の磁器』―その歴史と系譜―　平成１８年度秋季特別展覧会
八代の歴史と文化16　八代市立博物館未来の森ミュージアム

Summary of the *Nakahara* Tunnel Tombs

1. Environmental introduction of the site

The *Nakahara Tunnel Tombs* (*Nakagami* town , *Hitoyoshi* city , *Kumamoto* Prefucture) is located along the cliff , which is on the plateau in the right side of the lower reaches of the *Kuma* river . It is from a hundred and seven meters to a hundred and ten meters above sea level.

Along this river , there are many sites of Paleolithic period , *Johmon* period , *Yayoi* period , *Kofun* period , Medieval period and *Edo* period (modern times) .

2. Opportunity for investigation

Preventive constructions of the cliff were decided to construct by *Kumamoto* Prefecture . So we needed to record the statement of the *Nakahara* tunnel tombs as a report before the construction under Law for Protection Cultural Properties , because the construction would destroy and bury the site permanently. Investigation was held in three months between August 2006 and November 2007 . Scope of the investigation was about four hundred meters of the cliff .

3. Result of investigation

1) Beginning

We could find twenty-seven tunnel tombs in late stage of *Kofun* period from a thousand five hundred to a thousand four hundred years ago , and twelve caves confirmed as a air-raid shelter in World War Ⅱ(*Syowa* period) . The cliff was made of volcanic deposit of Mt. *Aso* 90 thousands years ago , through chemical analysis .

2) *Kofun* period

All twenty-seven tunnel tombs did not leave the original form , because of falling cliff and deveroping caves for air-raid shelter . Relics were found in the 7th , 47th , 48th tunnel tombs . They were potteries , iron defensive equipments and ornaments . About built age of stone chambers , I assumed that these tunnel tombs changed from tombs with eaves to tombs without eaves in the 6th century . Important finding was that we found ornament designs (triangle continuative design) of the left wall and back wall of the 47th tomb , and they were carved in the stone chamber . Though ornament designs of relief were found in 9 tombs of the *Omura* tunnel tombs near here in *Hitoyoshi* city , they were almost out of stone chamber . The same ornament designs like the 47th tomb were found in the *Nabeta* tunnel tombs in *Yamaga* city . So I suppose the *Nakahara* tunnel tombs had connections with tunnel tombs in the reaches of the *Kikuchi* river .

3) *Syowa* period (World War Ⅱ)

Twelve air-raid shelters were confirmed through the investigation . Seven caves of tunnel tombs were used as a air-raid shelter , four caves were original air-raid shelter , One cave was in the middle of making . Important result was that we could hear the *Nakahara* caves were used as a air-raid shelter . Through these testimonies , we could get the days of deveroping caves for air-raid shelter and the situation of people in World War Ⅱ .

4) Ending

We could see that prehistoric *Hitoyoshi* and *Kuma* region was the southern limit of the north culture and the northern limit of the southern culture , through potteries in earliest stage of Jomon period and the style of burial chamber built by board stone in the terminal stage of Yayoi period . I think that people having a custom of making tunnel tombs in the south Kyusyu , who live with people having a custom of making style of burial chamber built by board stone in the all west Japan , in the late stage of *Kofun* period . If the opportunity of investigation increase in future , cultural exchange of the north and the south will come to light more and more .

── 附　論 ──

人吉盆地西部中原横穴墓群周辺地域の地形及び地質の概要

【熊本県教育庁文化課　馬場　正弘】

（１） 地形

本遺跡は、断層角盆地（周囲を断層で境された盆地）とされる人吉盆地の西端部に位置する。周辺の地形としては、盆地周辺部は山地を主としており、盆地内の周辺部に小規模な丘陵地が分布し、盆地内を流れる河川沿いには、台地・河岸段丘・低地が分布する。

①　山地および丘陵地

本遺跡周辺の山地は、球磨川を境（球磨村一勝地と芦北町湯浦を結ぶ線）に、北側は固結堆積物からなる九州山地の西部にあたり、南側は肥薩火山岩からなる山地より形成されている。山地と比べて起伏が小さく開析の進んだ丘陵地は、人吉盆地周辺部や盆地内に見られるが、火砕流堆積物の分布域に限られており小規模である。

②　台地および河岸段丘

台地は、主に鹿児島県の姶良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物からなる火砕流台地であり、人吉盆地の周辺部と内部にみられ、海抜160～180ｍの高度に大方おさまる。本遺跡周辺では、河岸段丘は５段（高位より段丘Ⅰから段丘Ⅴとする）に区分される。段丘Ⅰは、沖積地からの比高30～40ｍで上原田町付近に分布する。段丘Ⅱは、沖積地からの比高25～35ｍで中神町付近に分布する。段丘Ⅲは、沖積地からの比高20～30ｍで中神町付近に分布する。段丘Ⅳは、沖積地からの比高４～９ｍで球磨村茶屋付近に分布する。段丘面Ⅴは、沖積地からの比高１～３ｍで球磨村今村付近に分布している。

③　低地

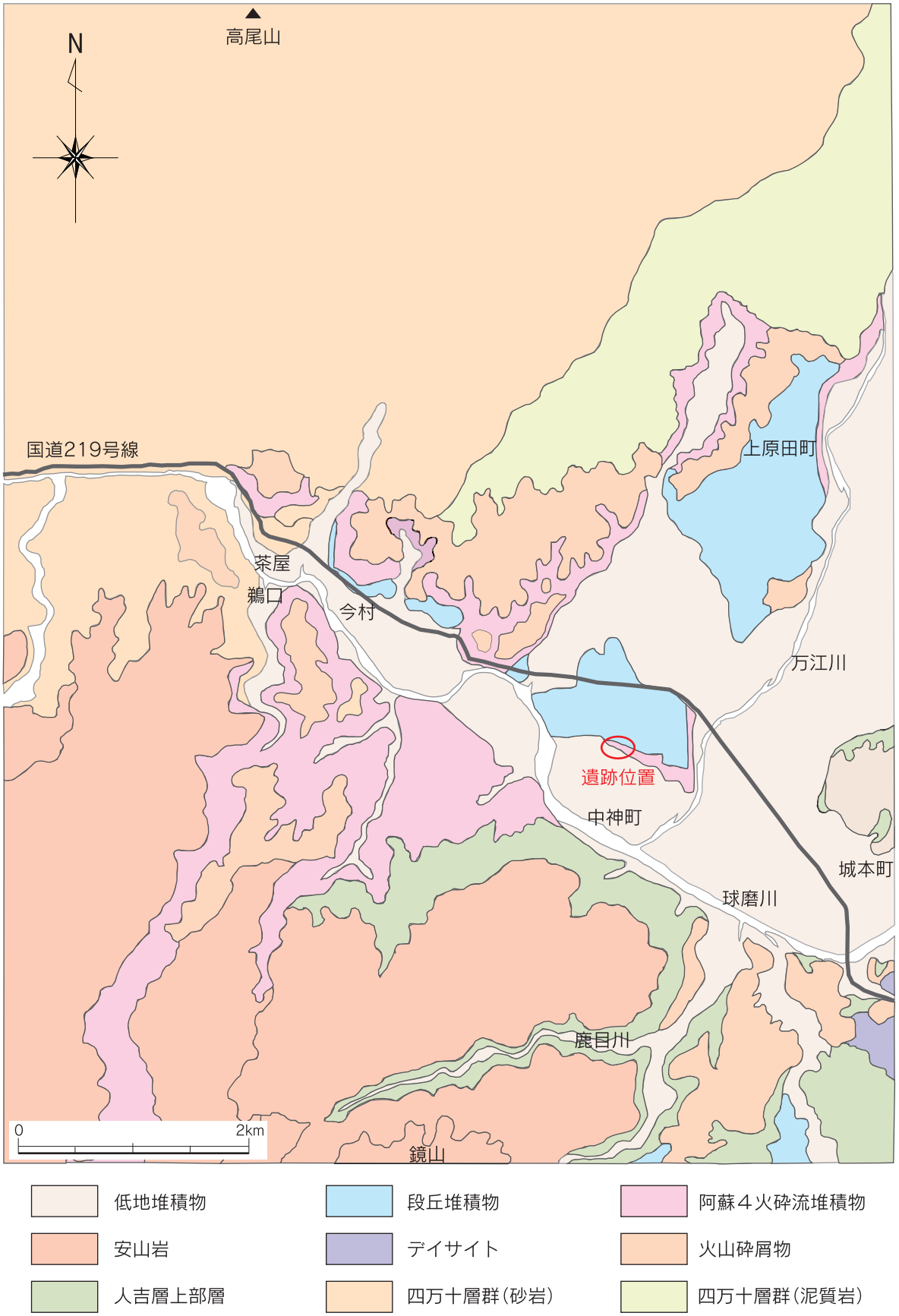
扇状地は、瓜生田付近に発達しており、谷底平野は盆地内に広大にみることができ、遺跡周辺には球磨川右岸側に見られる。自然堤防は、きわめて良好に発達している。万江川流域では、井手の口から合ノ原にかけ規模の大きい旧河道が見られる。

（２）地質

本遺跡周辺の地質（図ー１）については、石器の石材として使用の多い岩石を中心に説明を加えておく。球磨川の南を境に大きく地質帯が異なっており、北側が堆積岩からなる白亜系の四万十帯、南側は第三紀後期から第四紀にかけて形成された火山性岩石が広く分布する。

四万十帯は、砂岩、泥質岩、凝灰岩が主となり、これらに挟まる他の岩石の組み合わせにより層を分類している。本遺跡周辺では、砂岩・砂岩泥岩互層が主である地層と泥質岩、凝灰岩、礫岩が主である地層の2種類が近隣に分布している。これら四万十帯に北西側にはチャートや石灰岩を含む三宝山帯、さらに北西側には、緑色結晶片岩を主とする黒瀬川帯が分布している。尚、三宝山帯の南縁部に大阪間（仏像）構造線が通っているとされている。

対して四万十帯等の堆積岩の南側には、組成においてデイサイト質から玄武岩質まで幅をもつ安山岩



図－1　中原横穴墓群周辺地域の地質図　土地分類基本調査図（熊本県，1989）を修正・加筆

が重複しながら、芦北町や水俣市まで広く分布する。これらの集合体は、肥薩火山岩と称されている。

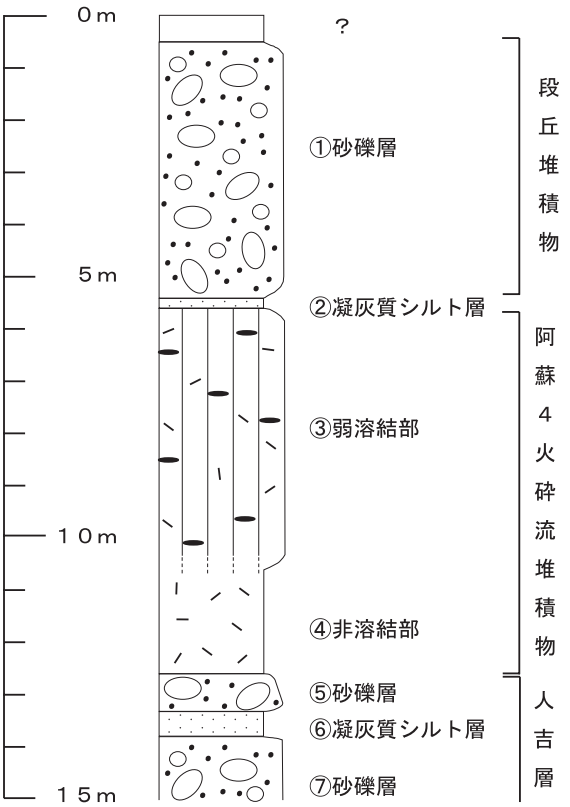
人吉盆地内では、火山砕屑物と砂・泥・礫から構成される人吉層が卓越する。火山砕屑物には本遺跡周辺には、俗にシラスと呼ばれている約２万５千年前に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物と約９万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇４火砕流堆積物が広く分布している。球磨郡球磨村鵜口では、局地的ではあるが約250万年前形成された舟戸凝灰岩が分布している。

人吉層であるが、砂や礫を中心に斜交層理が発達していることや堆積物の構造から網状河川やファンデルタ（扇状地の末端が湖水に直接浸る地域）であったことが推定され、人吉盆地には水を湛える湖があったことが推測される。人吉層の最下部を見ることのできる球磨郡球磨村鵜口では、四万十帯の上に不整合の関係で人吉層の最下部となる茶屋角礫岩部層がのっており、さらにこの角礫岩層の上に舟戸凝灰岩部層が整合の関係でのっている。ここでは，四万十累層群→茶屋角礫岩部層→舟戸凝灰岩部層という順に見ることができる。舟戸凝灰岩の形成時期は約250万年前の値が出ているので、この人吉層は少なくとも250万年前からでき始めたと考えられている。人吉市中神町付近では、この人吉層の泥質堆積物の中から珪質団塊（ノジュール）等も発見されている。

（３）　本遺跡における地質と横穴

本遺跡の地質は、下位より凝灰質な堆積物である人吉層をベースに阿蘇４火砕流堆積物が上にのり、段丘堆積物がこれを覆う（図－２）。横穴墓を形成している地層は、阿蘇４火砕流堆積物の弱溶結部である。尚、扇状地堆積物の上にのる堆積物は、本遺跡では観察できなかったため「？」として扱っているが、周囲の露頭での様子からAT（姶良・丹沢火山灰）やアカホヤ火山灰が堆積しているのは明らかである。

図－２は本遺跡で断片的に観察できる地層を総合的にまとめた柱状図である。人吉盆地内の自然環境及び地形の変遷をまとめるため、各層ごとに記載をしておく。



図－２　中原横穴墓群総合柱状図

① 砂礫層

段丘堆積物を構成する砂礫層であり、円礫の砂岩と泥質岩と亜円礫のチャートから主に構成される。礫種から、後背に分布している四万十層群から供給された砂礫と考えられる。

② 凝灰質シルト層

凝灰質なシルト層である。土壌化はしていない。時間間隙は見られない為、堆積環境になく逆に浸食環境にあって、削平された部分が多いと考えられる。

③ 阿蘇４火砕流堆積物弱溶結部

阿蘇火山は、大規模な火砕流噴火を４回行っているが、最後の噴火（約９万年前）の際堆積したものであり、熊本県内では谷部を埋めるように広く堆積している。本露頭では、層厚約５ｍの弱溶結部があり、その下位に非溶結部を伴っている。火砕流堆積物では、強溶結部または弱溶結部の上下にしばしば非溶結部を伴うが、本露頭では弱溶結部の上位にのっていたと考えられる非溶結部は削平されなくなっている。

写真－１　横穴を掘った阿蘇４火砕流堆積物の弱溶結部

露頭での特徴としては、中心部は板状節理が発達しており、柱状節理も観察される部分もある。溶結したレンズ状の軽石と多量の角閃石を含んでいる。軽石の扁平率は40％から60％であり、ほぼ水平の状態で含まれている。扁平した軽石の傾斜角は旧地形（火砕流が来る前の地形）の傾斜角に左右されることから、火砕流が来る前もこの周辺は平たんな地形であったことが推察される。

④ 阿蘇４火砕流堆積物弱溶結部

上位の弱溶結部から漸移的に、軽石の扁平も少なくなり、基質（マトリクス）は、ガサガサした砂質へと変化する。

⑤ 砂礫層

上位の阿蘇４火砕流堆積物弱溶結部とは、間に挟む火山灰やローム等はない。川原などの礫が露出する状況下で阿蘇火山からの火砕流堆積物が堆積したようである。尚、本層から下位は整合関係である。

⑥ 凝灰質シルト層

非常に凝灰質でやや粘土化しており、黒雲母や石英を含んでいる。本層の上面から湧水している。本層が不透水層となっているようである。凝灰質で黒雲母を含むことから、造岩鉱物を同じくする小林テフラの影響を受けているのかもしれない。

⑦　砂礫層

本層はかなり凝灰質な堆積物であり、砂岩・チャート・結晶質石灰岩が含まれている。周辺の露頭でも⑤・⑥・⑦のような砂礫層とシルト層の互層が確認される。全体的に凝灰質で、礫層の礫も直径が10から15cmの小さい礫を多く含むことから人吉層上部層と考えられる。

写真－２　人吉層上部層のシルト層と砂礫層

（４）　堆積物から推察できる本遺 跡周辺の自然環境の変遷

本遺跡に実在する堆積物から本遺跡周辺の大地の成り立ちについて概観する。

約250万年前、人吉盆地から流れ出る河川が何らかの原因（地震や火山活動等）でせき止められ、湖のような環境になった。茶屋付近で観察されるように人吉層の底には、火砕流堆積物や軽石層が堆積していることから湖になる直前に火山活動があった可能性が高い。その後、扇状地の末端が湖水に直接浸る地域（ファンデハタ）が形成され、砂や礫等によってものすごいスピードで埋め立てられていった。この間の堆積物に淡水性貝類や植物片などの化石も発見されていることは、淡水のある環境にあったことを裏付けている。この周辺では、阿蘇火砕流が来る前までこのように河川や湖などの水の影響をうける地域であって、長年にわたって砂や礫を堆積し続けたのではないだろうか。そして、今から約９万年前に数十km離れた阿蘇火山の４回目の火砕流噴火である阿蘇４火砕流の高温の巨大な岩なだれのようなものが押し寄せ、低い土地を埋め尽くすように堆積した。現存する堆積物の層厚から推測しても、少なくとも厚さは７ｍ以上あっただろうと考えられる。おそらく着地した火砕流は、多くの生物に甚大な影響を及ぼしたことが推測できる。この火砕流によって、盆地内では、まるでお茶碗にお米を入れたように短期間に平らな土地が形成されたのである。その後、雨水等の侵食により河川が形成され、現在の球磨川周辺を水が流れ始めたことであろう。その後、９万年という長い年月を要して、段丘を形成しながら河道は現在の位置まで下がっていったと思われる。本遺跡は、その段丘の崖の部分に位置している。古代人は、露出した溶結凝灰岩をうまく利用して、横穴墓をつくったのである。

参考文献

表層地質図『佐敷・大口』（1990）．熊本県.

日本の地質９『九州地方』（1992）．共立出版.

鳥井真之・池田和則・板谷徹丸（1999）：熊本県人吉盆地に分布する人吉層中の凝灰岩のK・Ar年代.地質学雑誌　105（8）.

写真(PL)3　調査区遠景(南より)

写真(PL)4　調査区遠景(東より)

写真(PL)5　調査区近景(東より)

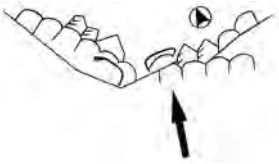
写真(PL)6　調査区近景(西より)

写真(PL)7　33号墓周辺状況(西より)

写真(PL)8　33号墓周辺状況(東より)

写真(PL)9　1号墓全景

写真(PL)10　2号墓全景



写真(PL)11　6号墓全景(南より)

写真(PL)12　7号墓礫出土状況

写真(PL)13　7号墓調査前状況

写真(PL)14　7号墓完堀状況

写真(PL)15　6号墓全景(南西より)

写真(PL)16　7号墓、8・9号墓・壕出入口

写真(PL)17　8・9号墓・壕

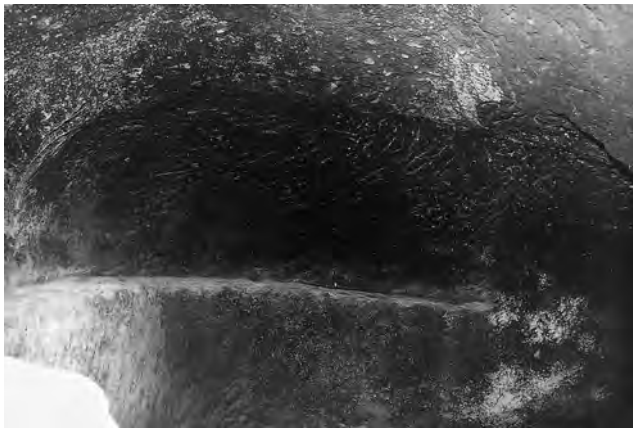
写真(PL)18　8号墓・壕の玄門、出入口を覗く

写真(PL)19　8号墓・壕側から9号壕を覗く

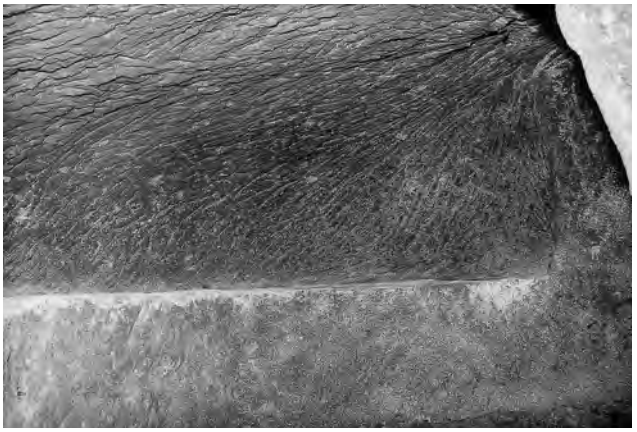
写真(PL)20　8号墓・壕内部

写真(PL)21　8･9号墓･壕天井部

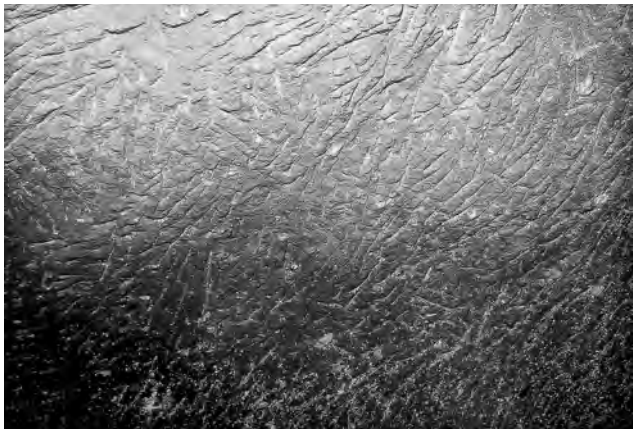
写真(PL)22　8･9号墓･壕の連結部



写真(PL)23　9号壕右側壁(1)



写真(PL)24　9号壕右側壁(2)



写真(PL)25　9号壕天井部

写真(PL)26　9号壕内部より出入口を覗く

写真(PL)27　10･11･12号墓･塚全景

写真(PL)28　10号墓･塚の出入口部

写真(PL)29　10号墓内部より出入口部を覗く

写真(PL)30　10号塚内部の棚

写真(PL)31　12号墓全景

写真(PL)32　11号塚出入口

写真(PL)33　13・14号墓・壕出入口

写真(PL)34　13号墓・壕内部(1)

写真(PL)35　13号墓・壕内部(2)

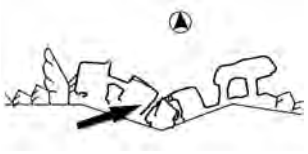
写真(PL)36　13号墓・壕側より14号墓・壕に繋がる通路

写真(PL)37　14号墓・壕内部(1)

写真(PL)38　14号墓・壕内部(2)

写真(PL)39　14号墓・壕天井部

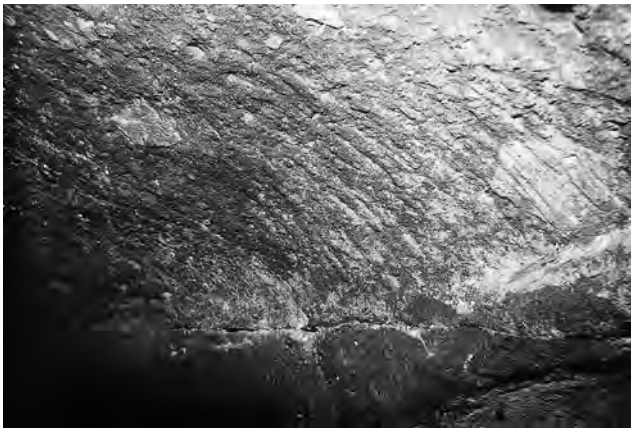
写真(PL)40　14号墓・壕側より13号墓・壕に繋がる通路



写真(PL)41　15号墓・壕出入口部

写真(PL)42　15号墓・壕内部(1)

写真(PL)43　15号墓・壕内部(2)



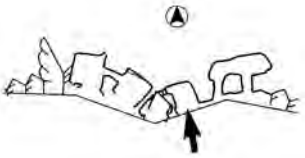
写真(PL)44　15号墓・壕天井部

写真(PL)45　15号墓・壕内部(3)

写真(PL)46　15号墓・壕側より16号墓・壕に繋がる通路

写真(PL)47　15号墓・壕内部(4)

写真(PL)48　16号墓・壕出入口部



写真(PL)49　16号墓・壕内部

写真(PL)50　16号墓・壕側より15号墓・壕に繋がる通路

写真(PL)51　17号壕出入口部(1)

写真(PL)53　17号壕内部状況(1)

写真(PL)52　17号壕出入口部(2)

写真(PL)54　17号壕内部状況(2)

写真(PL)55　17号壕内部状況(3)

写真(PL)56　17号壕内部と出入口部周辺

写真(PL)57　15号墓・壕周辺より西側を望む

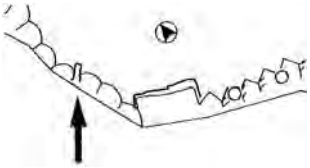
写真(PL)58　16号墓・壕全景と弾痕跡？

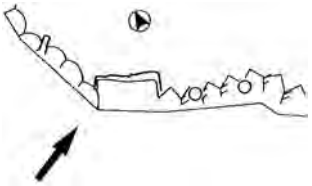
写真(PL)59　17・18号壕出入口周辺

写真(PL)60　19号壕出入口周辺

写真(PL)61　19号壕内部状況

写真(PL)62　21・22号墓全景





写真(PL)63　21号墓全景

写真(PL)64　22号墓全景

写真(PL)65　23･24号墓全景

写真(PL)66　23号墓全景(1)

写真(PL)67　23号墓全景(2)

写真(PL)68　24号墓内部状況(1)

写真(PL)69　24号墓内部状況(2)

写真(PL)70　25･26号墓全景

写真(PL)71　25号墓近景

写真(PL)72　26号墓全景

写真(PL)73　29号墓遠景

写真(PL)74　29号墓近景

写真(PL)75　33号墓遠景

写真(PL)76　33号墓近景

写真(PL)77　39･40号墓を望む

写真(PL)78　38号墓全景

写真(PL)79　40号墓全景

写真(PL)80　41号墓(左)遠景

写真(PL)81　41号墓近景

写真(PL)82　45号墓全景

写真(PL)83　46号墓全景(西より)

写真(PL)84　46号墓調査前状況

写真(PL)85　46号墓完堀状況(1)

写真(PL)86　46号墓完堀状況(2)

写真(PL)87　47号墓調査前状況

写真(PL)88　47号墓礫出土状況

写真(PL)89　47号墓遺物出土状況

写真(PL)90　47号墓完堀状況

写真(PL)91　47号墓開口部付近

写真(PL)92　47号墓線刻確認状況

写真(PL)93　48号墓調査前状況

写真(PL)94　48号壕碑文

写真(PL)95　48号壕内部より出入口部を望む

写真(PL)96　48号壕内部状況

写真(PL)97　48号墓礫・遺物出土状況(遠景)

写真(PL)98　48号墓礫・遺物出土状況(近景)

写真(PL)99　48号墓完堀状況

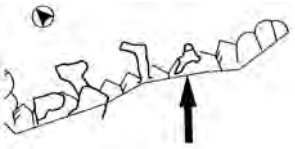
写真(PL)100　49号壕全景

写真(PL)101　49号壕内部

写真(PL)102　49号壕内部より出入口部を望む

写真(PL)103　49･50号壕遠景

写真(PL)104　50号調査前状況



写真(PL)105　50号完堀状況

写真(PL)106　51号墓全景(1)

写真(PL)107　51号墓全景(2)

写真(PL)108　51号墓右側壁

写真(PL)109　52号墓全景

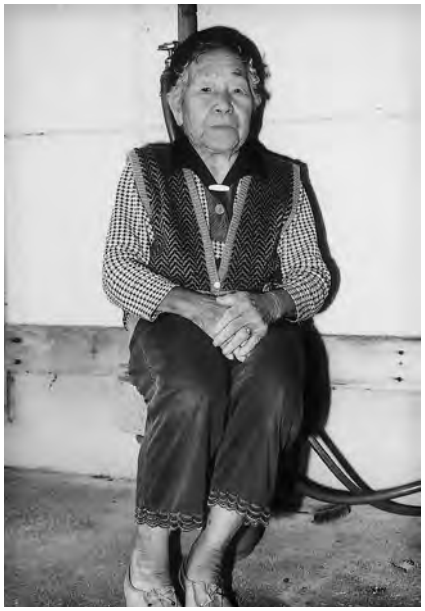
写真(PL)110　52号墓近景

写真(PL)111　52号墓周辺状況

写真(PL)112　14号墓・壕と中間靖さん

写真(PL)113　14号墓の堀削痕跡の拓本

写真(PL)114　15号墓の堀削痕跡の拓本



写真(PL)115　戦争時、49号壕に入られた
中矢野コナミさん

写真(PL)116　29号墓の堀削痕跡の拓本

写真(PL)117　作業員さん方との集合写真

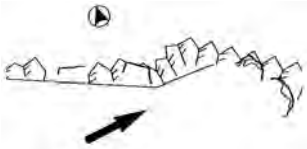
写真(PL)118　調査区伐採後の状況(1)

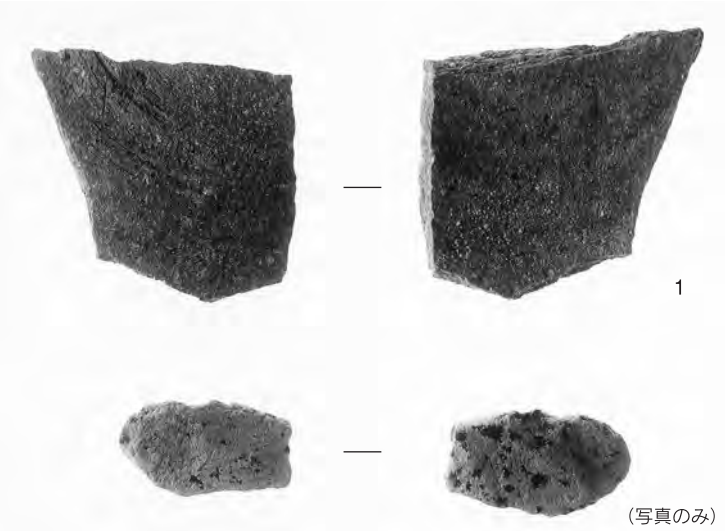
写真(PL)119　調査区伐採後の状況(2)

写真(PL)120　調査区伐採後の状況(3)

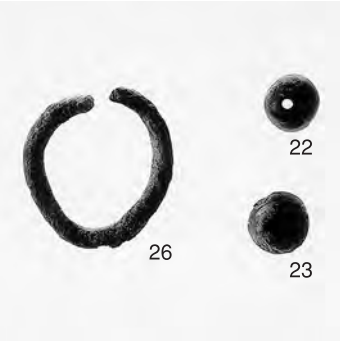
写真(PL)121　調査区伐採後の状況(4)

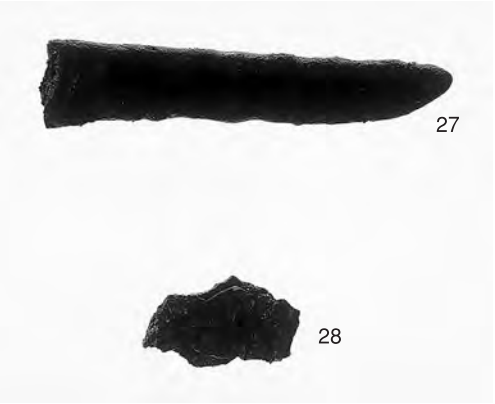
写真(PL)122　調査区伐採後の状況(5)

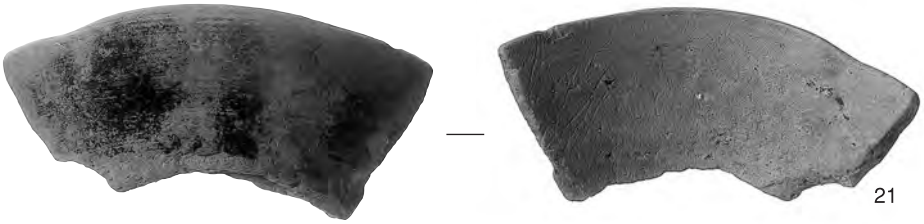




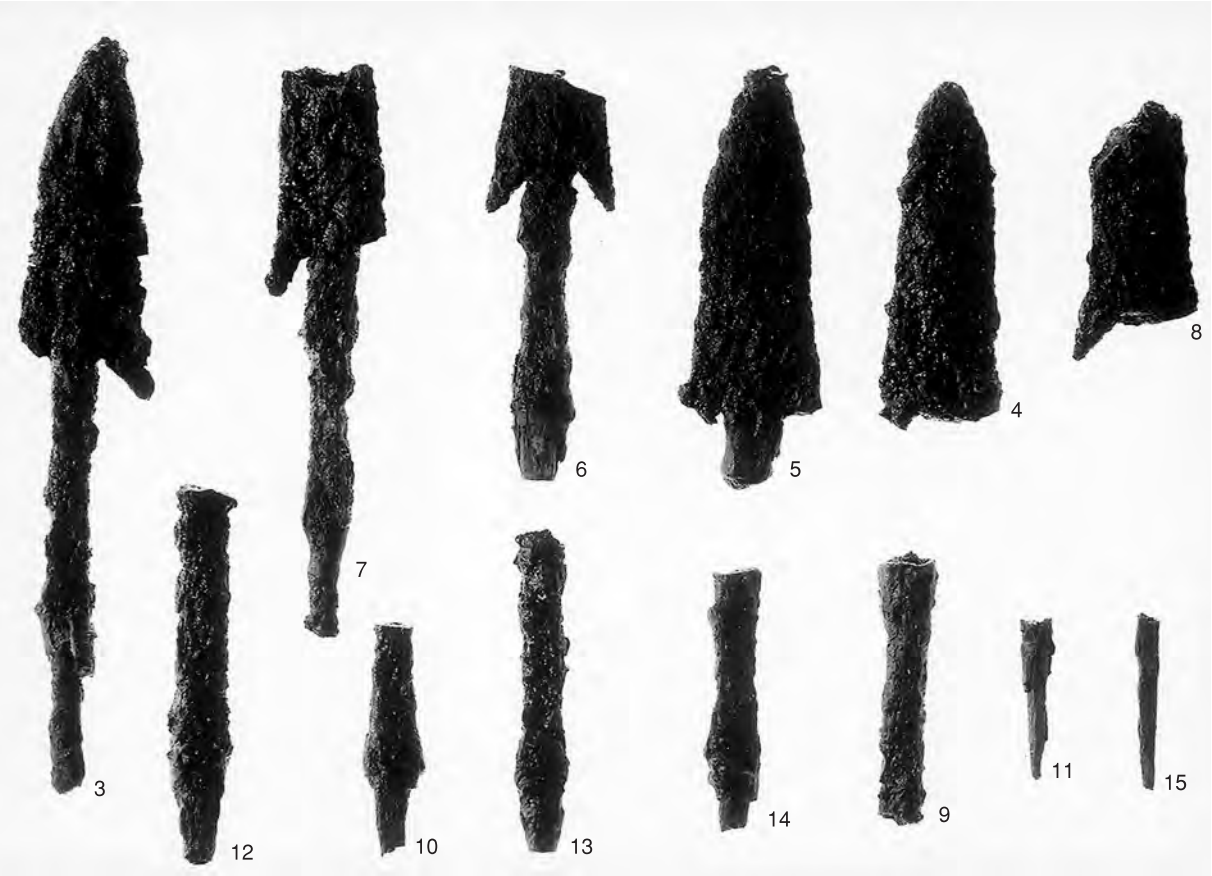
写真（PL）123　7号墓出土遺物



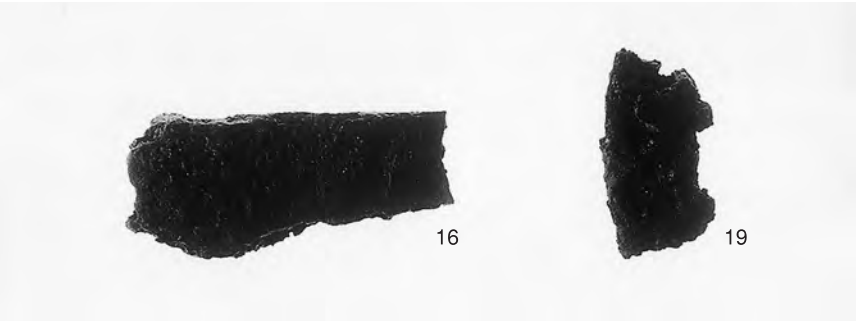




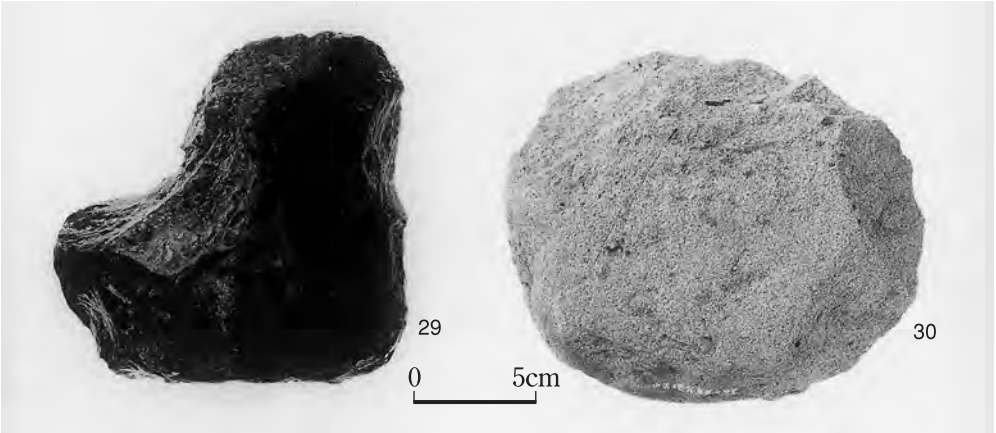
写真（PL）124　48号墓出土遺物

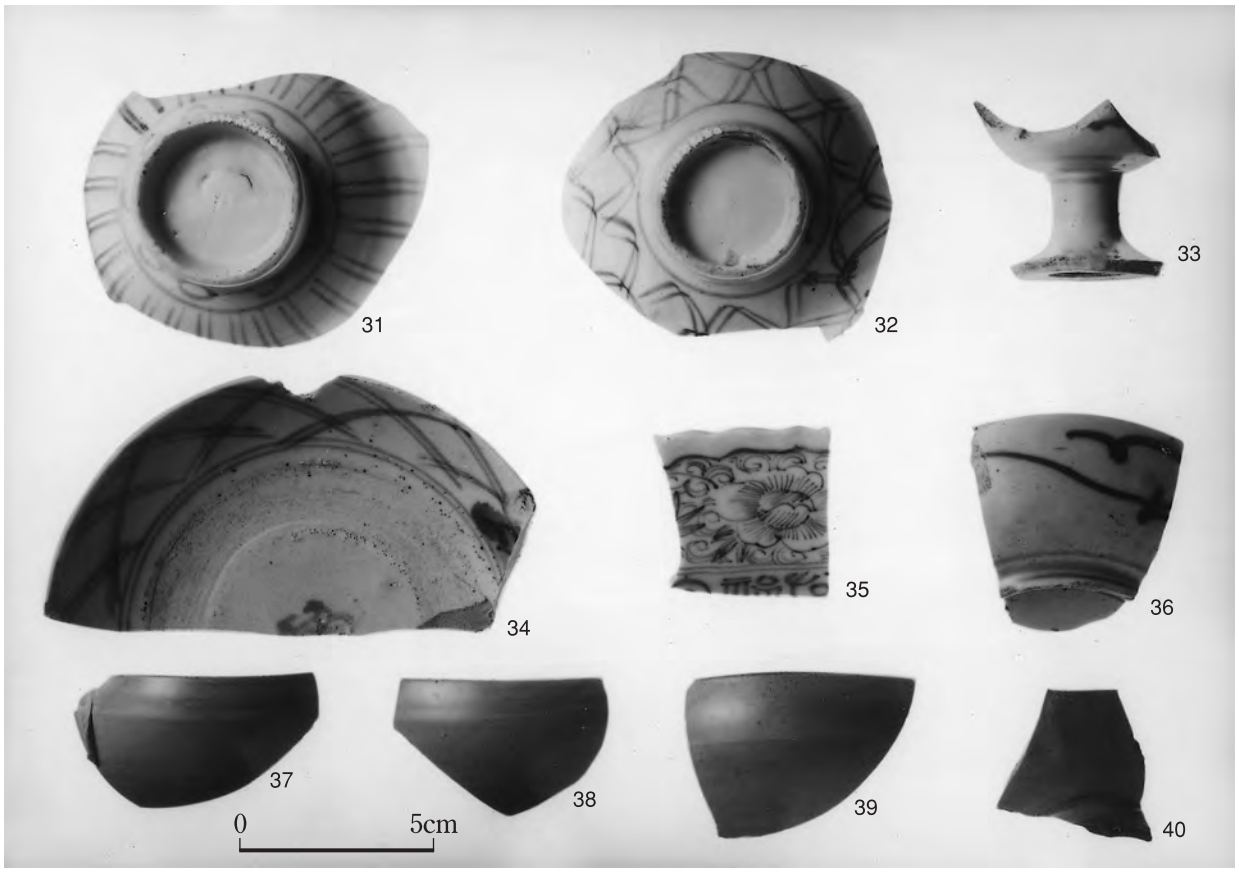


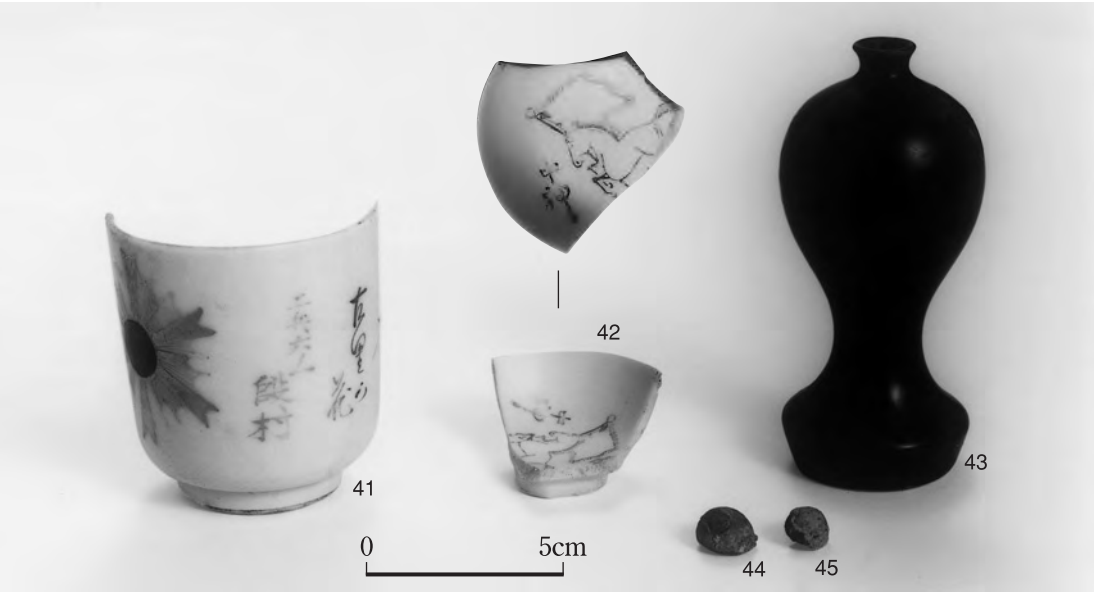
写真(PL)125　47号墓出土遺物(1)



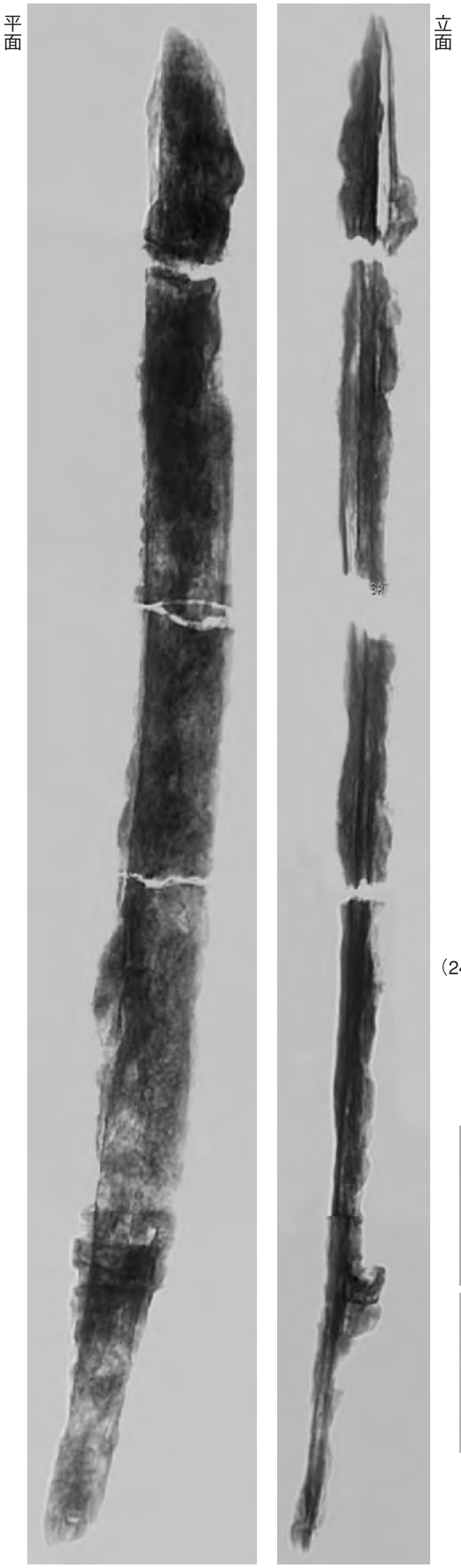
写真(PL)126　47号墓出土遺物(2)





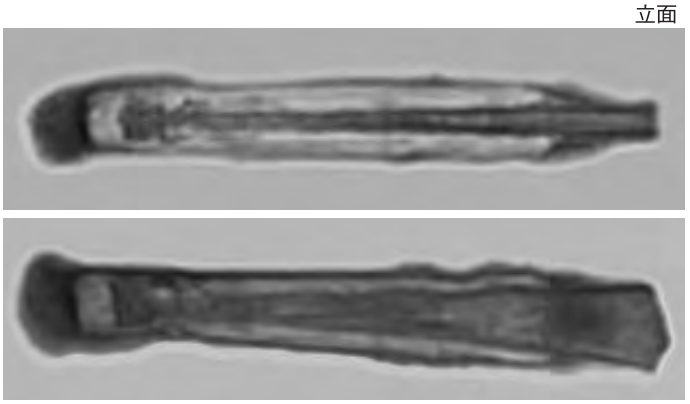


写真(PL)127　調査区周辺の表採遺物(写真のみ)



(24)

(3)



(17)

写真(PL)128　出土遺物のX線写真(直刀・刀子・鉄鏃)

あ と が き

中原横穴墓群の調査は、急傾斜地における崩落防止のために崖面の吹付けや擁壁を建設する前に行った、記録保存のための発掘調査であった。

崖面の崩落が進み、完全な横穴墓は存在しなかったが、凡その墓の形態を把握することができた。また、第二次世界大戦中に防空壕として利用されており、その際に大掛かりな掘削を受けていたことも判明した。最終的に27基の横穴墓、12基の防空壕が確認され、人吉・球磨地方では、最大の横穴墓になった。さらに47号墓からは、奥室と左側壁に線刻による連続三角文の装飾文様が確認された。

私にとって初めての横穴墓の発掘調査であった。色々な時期の遺跡にあたって勉強を積み重ねていくことの重要性を再確認した次第である。

暑い中、一緒に汗を流して下さった現場作業員の皆さん及び遺構実測をしていただいた九州文化財研究所の皆さん、遺物の水洗い、註記、接合をしていただいた一次整理作業員の皆さん、報告書作成に関わって下さった二次整理作業員の皆さん、そして調査から報告書作成までご指導いただいた全ての皆さん方に感謝をして、結びの言葉とします。

ありがとうございました。

（現場作業員）
有山勝次・大瀬幸江・蔵元美代・堀内ミサ子・藪田フミエ・立岡ひとみ・的石喜代美・椎屋元則・
藤本三徳・木村彰一・小柿徳一・岩城初雄・高田清美・井上重克・長村広志・吉川壽夫・吉田久信・
槻木隆光・前谷節郎（順不同・敬称略）

（一次整理作業員）
大塚トシ子・平川早苗（順不同・敬称略）
（二次整理作業員）
宮崎典子・府内博子・佐藤淳子・松本裕子・平川恵里子（順不同・敬称略）

報　告　書　抄　録

フリガナ	ナカハラヨコアナボグン
書　　名	中原横穴墓群
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
副　書　名	中神総合流域防災事業（傾崩）に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ番号	第244号
編　著　者	岡本　真也
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2008年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ﾅｶﾊﾗﾖｺｱﾅﾎﾞｸﾞﾝ 中原横穴墓群	ﾋﾄﾖｼｼ 人吉市 ﾅｶｶﾞﾐﾏﾁ 中神町	43203	203―009	32 13' 20"	130 43' 30"	H.18.8.1 ～ H.19.11.22	1,100㎡	中神総合流域防災事業（傾崩）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
中原横穴墓群	墳墓	古墳時代 後期～終末期 昭和時代 （第二次世界大戦）	横穴墓（27基） 防空壕（12基）	須恵器、土師器、鉄鏃、刀子、耳環、土玉、土錘 直刀	

（遺跡の概要）

調査結果の要点は次のようになります。①古墳時代の後期～終末期にかけての横穴墓が27基確認されたこと。現在人吉・球磨地方では最大の横穴群であることが判明した。②連続三角文の線刻文様を持つ装飾古墳を１基確認したこと。③第二次世界大戦中に使用された防空壕が12基確認されたこと。その中には、横穴墓を転用したものや新たに掘られたもの等が混在していた。

熊本県埋蔵文化財調査報告　第244集

中原横穴墓群

中神総合流域防災事業（傾崩）に伴う
埋蔵文化財発掘調査

発行年月日　平成20年3月31日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
TEL.096（381）9211
印　刷　弘栄印刷株式会社
〒862-0938　熊本市長嶺東8丁目6番1号
TEL.096（389）5570（代）

Cultural Series of *Kumamoto* Prefecture No.244

The *Nakahara* Tunnel Tombs

Excavation for Making Institutions of Preventing Falling Cliff
in *Nakaraha* District of *Hitoyoshi* City

March 2008

Board of Education,*Kumamoto* Prefecture

19 教委　教文
②　004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 244 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：中原横穴墓群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/